

# 死神少女と鏡の魔眼

LAMLE

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、世界はがらりと姿を変えた。

突如として世界に現れた人類以外の異種族。

『魔物』『天使』『悪魔』『死神』

そして異種族の中には人を殺し、喰べ（吸収）、己が力とするものが存在する。

人々は対抗するため『魔法』そして『属性武装（エレメンタル・レギオン）』を使い奴らを退いた。

しかしすべての者が『魔法』を使えるわけではない。

政府は異種族と共にあらわれた魔力が蓄積する島を開拓し魔法使い育成機関『RUB

IC（ルビック）を組織した。

魔法使いの素質があるものが呼ばれ入学することとなる。

主人公『八神 奏華』は、とあるきっかけから

『死神』になってしまう。

それを皮切りに様々な闘争が始まる学園ファンタジー！

# 目次

## 『始まりの物語』

プロローグ

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

第九話

第十話

1

6

16

24

38

53

66

84

105

124

138

第十一話

第十二話

第十三話

第十四話

第十五話

第十六話

エピローグ

『幻影の刺客』

第一話

第二話

第三話

第四話

150

168

179

193

214

234

256

263

275

287

311

# 『始まりの物語』

## プロローグ

《???》

『やあやあ、お客人。初めまして』

『それとも既にどこかでお会いしたのかな?』

『ふふつ、どちらにしても、こうして君に会えたことを嬉しく思うよ』

『ここは物語を保管する書庫』

『いままで紡がれてきた、さまざまな物語を保管しているんだ』

『おっと自己紹介がまだだったね。私はALIS《アリス》この書庫の管理人さ』

『この書庫にはどんな物語があるのかって?』

『それなら一つ、とっておきのものをご紹介しますよ』

『よつと、これはどうだい』

『一人の少年の可能性の物語』

『ここには、その物語がたくさんあるんだ』

『せっかく来たんだし、少し聞いていくかい?』

『それに紅茶とお菓子の用意もしているよ』

『ん? 例えぼんな本があるのかつて?』

『そうだねえ。今回は、これなんかどうかな』

『呪われた少年と死神と呼ばれる少女が世界に抗う物語』

『タイトルは《死神少女と鏡の魔眼》』

『興味が湧いた? ならよかった』

『それでは、ご清聴願おうか。華持つ少年の物語を』

ひらひらと、桜が雪のように舞っている。

あの時のように、ゆっくりと、音もなく花びらが地面に落ちていく。

踏みしめる土の感触、風に揺れる枝の音、微かに香る桜の匂い。

しかし辺りは夜のように、ただただ暗い闇が広がっていた。

ああ、これは夢なんだ。

俺が忘れてしまった。あの時の…。

夢から覚めたら忘れてしまう悲しい夢。

暗闇の中、誰かの声が聞こえてくる。

「わ……を……つけ……」

途切れ途切れに聞こえてくるのは少女の声で……

でも、それが誰なのか思い出すことができない。

とても大切な人だった気がする。

「そ……うか……」

「っ!？」

そうか……名もわからない少女が呼んだのは、俺の名前。

心に懐かしさがこみ上げる。

しかし少女のー彼女のことを思い出そうとした瞬間、頭に鈍い痛みが走る。

「ぐっ……」

まるで思い出すのを邪魔するように

「ぐっ、 ああああ」

まるで彼女のことを忘れろと言っているように頭痛はどんどんひどくなる。

「や……めろ、 やめろおおーー」

痛みに耐えきれず、地面に膝をつく。

悲しみ、後悔、憎しみ、怒り、さまざまな感情が駆け巡る。

頭痛は未だ収まらない。

この痛みは意識がなくなるまで消えることはない。

決して終わることのない地獄。

そうしていつも夢が終わる…はずだった。

「!!」

意識を失いかけたとき、背中に誰かの温もりを感じた。

「安心して…大丈夫だよ」

彼女の声とは違う声。

なぜか心が落ち着く。

「大丈夫…大丈夫だから」

それに呼応するかのように体を蝕んでいた

負の感情が和らぎ痛みも消えていく。

「…つてるよ、…で、…が…のを…てる」

声が次第に遠くなっていく。

真つ暗だった世界に亀裂が入り光が差し込んでくる。

「ま…つてー!」

聞き返そうとしたが上手く声が出せない。

夢から覚めようとしている。  
俺の意識は現実へと引き戻されていった。

# 第一話

〈奏華の部屋〉

「……ん」

目が覚めると俺『八神 奏華（やがみ そうか）』はベッドで寝ていた。見慣れない天井に同じく見慣れない部屋。

目覚めたばかりで、まだ少しボーツとする頭で思い出す。

ここは学園の近くに用意された寮のひとつ。『第七寮』

見慣れないのは、つい最近、引越してきたばかりだからだ。

「……」

ダルイ身体で寝返りをして、視線を窓へ向ける。

窓の外からは鳥のさえずりが聞こえ、朝日が差し込んでいて眩しい。

その日差しを手で覆いながら何となしに呟く。

「また……あの夢」

夢……ある時を境に見始めたもので、どこか現実味のある夢。

いつも暗い場所から始まり、勝手に進んでいく。

分かっていることは、微かに香る桜の匂い。

暗闇の中、今にも途切れてしましそうな少女の声。

少女は：今にも消えてしましそうな声で俺の名前を呼ぶのだ。

夢の中の俺はその少女のことを知っているはずなのに名前が思い出せない。

無理に思い出そうとする激しい頭痛が襲ってくる。

俺は痛みを耐えながらも、必死に手を伸ばす。

少女を救うために。

だが、その手が届くことはない。

やがて声は聞こえなくなり、あとに残るのは

救えなかったという後悔と少女を失ったという絶望。

そんな現実を生んだ世界を憎みながら終わる夢。

その気持ちは起きた後も、胸の中に残り続ける。

湖畔に積み重ねていく泥のように何層にも何層にも。

「はっ、毎回バットエンドの夢とか：笑えねえ」

思わず乾いた笑いがこぼれる。

まるで忘れることを戒めるように

あの夢が無くなることはない。

俺はいつもの癖で無意識に左眼に軽く触れる。

左眼はほんの少し熱かった。

ピロリン♪

「ん？」

唐突に鳴った着信音によつて俺の意識は枕元へ向かう。

見ると携帯のランプがチカチカ点灯している。

携帯を手に取り、確認すると一通のメールが届いていた。

メールの送り主は：希沙羅だった。

『友禅寺 希沙羅（ゆうぜんじ きさら）』魔法使い育成機関RUBICの

学園長で数年前、孤児だった俺を保護、生活できる環境を

用意してくれた、俺の保護者に当たる人物だ。

メールには

『依頼求：今日の放課後、いつもの場所へ』

と書かれていた。

この学園は少し特殊で生徒たちは何かしらの仕事を与えられている。

アルバイト：に近いのだろうか。

とにかく、何かしらの仕事を一人一つ以上持つことになっている。

俺の仕事は学園長である希沙羅の雑用……もとい手伝いをしている。

ふと、携帯のバッテリーを見ると赤いランプで20%と表示されていた。

おそらく、昨晩は充電を忘れて寝てしまったのだろう。

「まずったな。だけど今日は午前授業だし20%でも大丈夫だろ」

視線を時計へと向けると、針は七時を指していた。

学園は八時から始まる。

そろそろ朝飯を食べておいた方がいいだろう。

俺はメールを打ち込み

『了解』

と返し、支度を始めた。

世界に突如として現れた『魔物』『天使』『悪魔』『死神』

奴らは共にあらわれた幾つかの島を拠点に自分たちの領域を作りあげた。

政府が目をつけたのは、異種族と同じように各地に出現した

森で覆われ、魔力の蓄積される謎の島。

政府は、この島のひとつを開拓、街を作り、異種族に対抗するための

魔法使い育成機関『RUBIC』を組織した。

魔法使いとしての素質があるものが本土から呼ばれ、入学する。

俺も、この生徒として暮らしているひとりになる。

季節は春。

この島に暮らし始めてから約一年がたった。

ここの生活にもだいぶ慣れたし、思ったより不自由ではない。

俺の住んでいるココは、生徒が住むために用意された学生寮。

本来この寮は六人用なのだが、今俺が住んでいる第七寮は

俺と希沙羅の二人になる。

といつても希沙羅がここへ帰ってくることはほとんどない。

なので、この寮で暮らしているのは実質、俺一人ということになる。

一階にある食堂、その奥にある食糧庫から野菜を適当に取り出す。

サラダを作るために、野菜を軽く水で洗い、一口サイズに切って、皿に移す。

フライパンに卵を落とし、目玉焼き。食パンを焼いて、目玉焼きを上に乗せる。

早く、簡単な朝食ができた。

広い食堂で食べるのは俺一人。

去年からこの寮に入居者はおらず、今年も望みは薄いだろう。

その理由は…まあ色々だ。

「まあ気楽っちゃあ、気楽なんだけどな」

流石に一年もこの寮で一人暮らししていれば嫌でも慣れた。今ではそこまで違和感も持たないようになった。

朝食を済ませた後、身支度を整えるために部屋へと戻る。

クリーニングに出していた、白のシャツに赤いネクタイ。

黒を基調に赤のラインが入った軍服に似た作りの制服に袖を通す。

ちなみにラインとネクタイの色は学年によって違っており、二年生は赤色になる。昨日のうちに必要な物は鞆に詰めておいたので

準備にそれほど時間はかからなかった。

まだ最低限、必要な物しか置いてない殺風景な部屋。

部屋の扉付近には、まだ荷解きをしていない

段ボールが無造作に置かれている。

「(今日あたりに片づけておくか)」

そんなことを昨日も言っていた気がする。

俺は鞆を手に持って、寮を後にした。

### 〈学園通学路〉

RUBICの学年は三年生までであり、学園は島の中心にある

丘の上に建てられている。

また希沙羅の「生徒に本来の学生生活を」という意向によりその構造や施設も従来の学校と似た作りになっているらしい。

他には体育祭や文化祭などのイベントも用意されている。

もちろん、能力の実技試験や、魔法を使った大会のように

この島独特のイベントもある。

島にも商店街なんかも作られている。

切り開かれた森に敷かれた硬いアスファルトの道を歩きながら学園を目指す。

寮から学園までの距離は、十五分程度で着くため、さほど遠くない。

歩いていると同じように登校してきた生徒たちを見かけるようになる。

何人かの生徒が俺の姿を確認すると、ヒソヒソと話し出す。

中には俺に聞こえるよう大きめの声で話す者もいる。

「見ろよ、ブランクが来たぞ」

「ホントよく諦めずに来るよな」

「努力したって無駄なのに」

「おいおい、そんなこと言ったら可哀想だろ。」

俺らと違って才能の無い落ちこぼれなんだから」

あはははっ

と笑い合う数人の生徒達。

『ブランク』というのはこの学園で付けられた俺のあだ名みたいなものだ。

なぜそんな風に言われているかというのと、彼らの言った魔法使いとしての才能がない。  
これに尽きる。

具体的に言うなら、俺は魔法が使えないのだ。

高度な魔法はもちろん、初歩の初歩である魔法すらまともにできない。

『白紙の紙（ブランク）』ということだ。

そんな俺がなぜここにいるのか。

それは、俺の持つ魔力量は一般の魔法使い以上あるよう

そのまま放置するのは後々危険ではないか…ということ

保護対象という名目のもと、この学園に入る権利が与えられた。

だが魔力量が多くても肝心の魔法が使えないので成績は常に最下位。

魔法使いは何より実力を重んじているそうで

（プライドの高い上級魔法使いである）彼らからしたら俺みたいな落ちこぼれは、

憂さ晴らしのターゲットになる。

この学園は『魔法』という一種のステータスによって生徒の優劣を決めてしまっている。

魔法使いとして優れたものは劣るものを見下す。

もちろん全員がそういう考えを持っているというわけではないが。

「(ホント…面倒くさいな)」

思わず溜息が出る。

希沙羅に保護された俺だが

てつきり希沙羅の元、雑用として働くものだと思っていた。

しかし何を考えているのか、希沙羅はこの学園に俺の入学をねじ込んだのだ。

あの友禅寺 希沙羅が入れた者。

ということ当初は話題にもなった。

「(まあ、すぐに魔法も使えない落ちこぼれ野郎って評価になったんだけどな)」

それも含めて、俺の学園での立場はあまりよくない。

最初の頃はそれで嘔みついたりしたが

魔法が使えないブランクの俺では喧嘩をしてもまず勝てない。

そんな当たり前のことが嫌でもわかった。

だから今ではトラブルなく過ごすことが一番の選択だと思っているし、

いままでそうならないように避けてきた。

そのおかげでこの状況にも幾らか耐性がついて慣れた。

聞こえてくる侮蔑の声を無視して

さつきより少しだけ早足になって学園へ向かった。

## 第二話

### 〈教室前〉

この学園は入学時と学年が上がる時に行われる魔法試験の総合成績によって所属クラスが決定する。

クラスは上から順にA〜Dに枠決められ、それぞれの教育に合った内容を学ぶ。

魔力だけが取り柄で魔法がカラツキシの奏華は、当然と言えば当然

Dクラスに所属している。

Dクラスには奏華のように魔法が使えない者はいないが、能力値が低い者、魔力量が低い者が集められる。

この制度によって下位クラスへの風当たりは強くなっている。

朝のような出来事はその例に当たる。

校門をくぐった奏華は、校舎内に入り、階段を上る。

今向かっているDクラスは校舎二階の東側にある。

校舎に入った後も、今朝の様な話し声や笑い声がちよくちよく

耳に入って来たが、教室に近づくにつれて、その声も無くなった。

やがて2—Dとプレートに書かれた教室に辿りつく。

奏華は扉に手をかけ、ゆっくりと開ける。

教室には既に何人かの生徒が来ており、机に突っ伏し熟睡する者、

読書をしている者、何人かのグループを作つて楽しそうに談笑している者など様々だ。

教室に入った奏華は、まず座席を確認するために、紙が貼つてある黒板へ向かう。

その途中、奏華に気付いた何人かのクラスメイトがちらほらと挨拶をしてくる。

他のクラスに比べると、Dクラスでは奏華の扱いは悪くはない。

今朝の様な、出来事はまず起こらないだろう。

しかし、学園最低ランク、加えて不愛想な奏華と仲良くしたい者などそうそういない。彼らとの間にはそれ以上の関係は無く、せいぜい挨拶を交わす程度でしかない。

挨拶を返しながら黒板に書かれていた自分の座席を確認する。

席は窓側の一番後ろ、なかなかいい場所だと思う。

机の横に荷物を掛け、席に座る。

窓から差し込める暖かい日差しが身体を包み込む。

「やべ…眠い」

寝不足気味な奏華に、この陽気は効果抜群。

席についてももの数分でうとうとと舟を漕ぎ始める。

幸い、ホームルームまで時間はある。

少しくらい寝ても大丈夫だろう。

そう思ったら、この眠気に身を任せてしまおう。

やがて眠気に従い、昼寝を始めた奏華。

数分後、机に突つ伏し、眠っている奏華に声が掛けられる。

「朝からお疲れか？寝るのもいいが、もうすぐホームルームだぞ」

聞き覚えのある声。

重い瞼を開き、声のした方へ視線を向けると、呆れ顔の男子生徒が一名、立っていた。

この学園で俺の数少ない悪友：もとい友人の

『柏木 琥珀（かしわぎ こはく）』

一年生の頃に席が近かったことがきっかけで、話す様になり、それからの付き合いになる。

「よつ、奏華、おはようさん」

「ああ、おはよう」

目を擦りながら、琥珀に挨拶を返し、身体を伸ばす。

体勢が悪かったのか、首のあたりが少し痛む。

時計を見ると、もうすぐホームルームの開始、10分前だった。

この席は思いの外、日差しが気持ち良く、予想以上に寝入ってしまった。気を付けなければ…。

そんな事を自分に言い聞かせていると、琥珀が俺の顔を覗き込む。

「死んだ魚みたいに顔色悪いな…大丈夫か?」

どうやら、ここ最近の疲れと、寝不足のせいで顔色も悪くなっているらしい。

琥珀から見てこの言われ様なのだ：死んだ魚つてのはひどすぎないか?

本当は今すぐにでも眠りたい気分なのだが、そこは何とか堪える。

二年生に上がった初日、居眠りをしたと知られれば、また希沙羅に怒られる。

幸い、今日は午前授業。寮に戻ったら思う存分睡眠を貪るつもりだ。

そのことを琥珀に伝えると

「ふーん。ま、それならいいだけだな。ヤバかったら保健室行けよ」

ニツと歯を出して笑顔を作る琥珀。

そんな歯の浮くセリフを恥ずかしげもなく言う。

もし効果音があるのならキラーンという音と星が付きそうだ。

本人はこれがかっこいいと思っているらしい。

俗にいう、残念なイケメンって奴だろう。

おまけに後ろでは、女子たちに「ないわー」「ねー」と言われる始末。こいつは俺とは別の意味で有名になっている。

顔立ちも良く、何かと気づかいのできる男なのだが、本人のモテたいという願望が強いこと、言葉の端々でかつこつけようとしているせいで、女子からは残念なイケメン、友達でいい。

というレッテルを貼られている。

黙ってさえいれば、それはそれは、モテていただろうに……。

いや、中身がこれだから、たいして変わらないのだろうか。

「そういえば、もうすぐ新入生が寮に移り住む時期だよな」

「ああ、そういえばもうすぐか」

「何とかスカウトして、可愛い子に入ってもらわないとな!!」

琥珀の住む、『第四寮』は現在、入居者男子のみでまとめられている。

そんな訳で、男子ばかりの寮生にとって新入生（女子）の勧誘は

全力で取り組むべき行事なのである。

期待に胸膨らました、子供のようにワクワクしている琥珀とは対照的に、

奏華にとってはどうでもよい話である。

奏華の住む第七寮に現在入居希望者はいない。

おそらく、自分のブランクが原因なのだろう。

学園には何か月かに一度、成績を上げるための試合が寮対抗で行われる。上を目指すものにとって寮を決めることは今後の学園生活に繋がる。

自分が原因というのは複雑だが、成績を上げるつもりもない…そもそも上がる成績自体が無い、奏華にはあまり意味のない行事になる。

「そして、新入生の美少女と起こる…恋愛。これで青春だな！奏華」

奏華が考えている間に、どうやら琥珀の妄想は後輩との恋愛まで発展したようだ。

周りにいる女子の冷めた視線に気づくことなく、妄想に浸る琥珀に、少し憐れみを感じたが

まあ自業自得なので気にしないでおく。

「…そつすね」

「なんだよ、その反応。そこは、『お前ならきつとできるさ！』とか、『俺も負けていられないな！』ってなる所だろ？」

「めんどくさいなあ」

「あの！奏華さん。本音が出てるよ！ナチュラルに傷つくよ!？」

そうやって俺たちがギャーギャー騒いでいると

教室の扉が開き、教師が入ってくる。

くせつけのある髪に分厚い眼鏡を掛け、白衣を着た気怠そうな人だ。教師がきたことで雑談をしていた生徒達も席に座りだす。

「ほら、早く座れよ」

琥珀に席に座るよう促すと

「くそお。覚えてろよ」

そんな、悪役が言いそうな捨て台詞を吐いて、そそくさと退散する琥珀。琥珀が座ったことで教室の椅子に生徒全員が揃う。

「それではHRを始めます」

教卓に立った教師によってHRが開始される。

主な内容は、担任の挨拶と新学期に向けての教育方針などなど。

俺はその話を半分聞きながしながらぼんやりと視線を窓の外へ向ける。

空は晴れ渡り、雲は風に乗ってどこまでも飛んでいく。

異種族がいて、魔法という異能があるこの世界。

周りの人間にとっては変わってしまった日常。

取り戻すべき世界があるのだろう。

しかし俺にとって、この世界こそが当たり前の日常だった。

あの日、希沙羅に拾われてから、俺の空っぽだった時間は動き出した。

ズキンッ

朝と同じように左眼にジクジクと痛みが走る。

目覚めた後に痛む眼。

どれだけの年月が経とうと、変わることはない夢物語。

けれど、今日見た夢はいつもと少し違っていたような気がする。

最後に何か…あつたような…。

晴れた空を見上げながら、ありもしない期待をする。

「(こんな俺でも、何か変われるのだろうか…)」

そんな思考は晴れ渡る青空の中に溶けていった。

## 第三話

### 〈教室〉

HRが終わり、クラス担任が教卓に教科書を置いて、教室を見回す。

教室全体を見回した後、眼鏡の縁をクイツと直し、授業開始の挨拶を始める。

新学期、最初の授業内容は座学。去年学んだ魔法の基礎を復習する。

黒板には魔法の種類や細かな説明が書かれている。

ここで魔法についての基礎知識を話しておく。

魔法は絵本や小説にあるような何でもできる万能な物というわけではない。

そして魔法はごく一部の人間だけが使うことができる。

最初に魔法が使えるようになった人間たち

第一世代と呼ばれる魔法は、以下の能力になる。

- ・人や物のステータスを上昇、または低下させる強弱魔法。
- ・魔力をエネルギー弾に変え、遠距離攻撃を可能とする放出魔法。
- ・魔力を象り、質量を与える変化魔法。

この三つが第一世代の魔法となる。

そして時代と共に魔法使いは進化をした。

第二世代と呼ばれる魔法使いは上記の魔法に合わせ、武器を手に入れた。

魔法のさらなる進化を促すアーティファクト、それが『Q—b i c（キュービツク）』と

呼ばれる未知の物質だ。

大きさは手のひらサイズでサイコロの様な六面体の形をしている。

Q—b i cは中心にコアと呼ばれるものが埋め込まれており、

一定の魔力を注ぐことで魔力を帯びた武器へと姿を変える。

この状態を『属性武装（エレメンタルレギオン）』という。

属性武装の形状は様々で、槍、剣、杖、銃、鎧などQ—b i cに

記録されているデータによって変わる。

属性武装には五種類のエレメント、火、水、雷、地、風がある。

そしてQ—b i cは持ち主と触れ合う、コミュニケーションのため、

身近なものへと姿形を変えることができる。

変化するのは髪飾りやイヤリング、腕輪など、中には動物や人の姿になる場合もあ

る。

この状態を『妖聖（ようせい）』という。

また、属性武装や妖聖で魔力を消費した場合、彼らは眠る…というアクションを起こす。

眠る場合は最初のサイコロ形状『キューブ』に戻る。

このQ—b—i—cには数に限りがあるため、すべての生徒が持っているわけではない。一応言っておくが、俺は持っていない。

と、大体の話は、これで終わる。

この話は入学当初から聞いている話なので、クラス連中も話半分に聞いている様子。教室を見回すと寝ている者、ノートに落書きをしている者、など様々だ。

教師もそれを咎めることはなく、黙々と書いていく。

やがて時間が経ち、授業終了のチャイムが鳴る。

「今日はここまで。ちゃんと復習しておくように」

そう言っただけはチョークを置き、教卓に置いていた、

何枚かの書類を持って教室から出ていく。

教師が出ていくと、次第に教室が騒がしくなる。

この後の予定を話し合う、楽しそうな声が周りから聞こえてくる。

商店街に新しく出来た店に行くだとか、港にあるゲームセンターに行くだとか。

やがてそれぞれ思い思いの場所へ行くため、ひとり、またひとりと教室を後にしてい

く。

俺もまた、移動するために鞆に荷物を詰め込む。

「奏華、昼めし食いに行かないか？」

鞆を片手に琥珀が声を掛けてくる。

いつもなら二つ返事で行くところだが、今日は希沙羅からの呼び出しがある。

直ぐに行かなければならない、というわけじゃないが、戻ることを考えたら、

街に出るのはよくないだろう。

琥珀には悪いが、今日は断ることにした。

「悪いな。今日はきささ……学園長に呼ばれているんだ」

希沙羅と言いきささになったのを抑えて、言い直す。

学園長なんて言い慣れていないのでよく間違えてしまうが、希沙羅の立場を考えると

呼び捨てはよくないだろう。

もちろん琥珀はそんな事気にしないだろう。だけど、注意するに越したことはない。

実際、そのことに対して気にした様子のない琥珀。

だが、その顔はなぜか、ニヤニヤと笑みを浮かべた。

「まあ、先約が学園長なら納得だが。お前ってさ、学園長の事となると、人が変わった様になるよな。活き活きしてるっていうか。正直、面倒くさがりのお前が、なんだかんだ

言つて手伝つてるし、やっぱ何かあるのか？」

琥珀にとつて、他意のない、『お前、あの娘のこと好きだろ？』的な

ニュアンスが含まれたからかいの言葉だったのだろう。

だが、その言葉に一瞬、ほんの一瞬だけ、返答に詰まる。

しかし、直ぐに表面を取り繕い、別の言葉を口にする。

「単に在学を盾に雑用を押し付けられているだけだよ。お前が考えているような

特別な感情なんて持つてない。それに仕事なんだから真面目にやるのは当然だろ？」

「ふーん。まっ、違つてんならそれでもいいけど。恋愛は学生の特権だけ。お前も今のうちに素敵な出会いを求めてみたらどうだ？」

お前はもう少し、自重したらどうだ…というツツコミ飲み込み、肩をすくめる。

「その気になつたらな」

「はあ、お前の春は、まだかかりそうだな」

正直に言つたのに、溜息をつかれてしまった。

「ほつとけ、こちとら今まで誰かと付き合つたことなんて一度もないわ」

「はん、そんなこと…俺だつてないわ!!」

フンツと鼻を鳴らし、腕組みをする琥珀。

…何故かドヤ顔で。

「人の事言えないじゃねえか!？」

言われてみれば、毎日のようにナンパしているが

こいつに彼女がいるなんて聞いたことがなかったな。

そう考えると、琥珀が憐れに思えてきた。

さつきまでは面倒くさい気持ちが強かったが、今なら違った見方ができる。

可哀想に…

「あのー奏華さん。なぜそんな憐れみの視線を?」

琥珀が憐れに思えた俺は肩をポンツと叩くとできるだけ優しい声色で語り掛ける。

「まあ、なんだ。お前みたいな残念な奴でもいつかは…そう、いつか…きつと…ミクロ単

位で報われるさ」

俺の激励が余程嬉しかったのか、琥珀は肩をプルプル震わせている。

ふう、やれやれ。元気づけるのも楽じゃないな。

「全く、お前つてやつは、息を吐くように人を傷つける天才だよな!ちくしょー!!」

突然叫んだかと思うと、すごいスピードで教室を出ていく琥珀。

何を叫んでいたのか、聞こえなかったが、きつと走り出すほど嬉しかったのだろう。

自分が人を勇気づけられたことに軽い達成感を覚える俺であった。

琥珀がいなくなったことで、教室に残っているのは、自分だけになった。

「…行くか」

まずは購買に行つて、昼飯用のパンでも買おう。

そう思い、手早く残つた荷物を詰め込んだ鞆を持つ。

希沙羅に呼ばれた時間を携帯で確認しながら、廊下へ出る。

既に廊下には人気が無く、自分の歩く足音だけが響き渡つていた。

〈屋上〉

購買でいくつも見繕つたパンを持つて階段を上がる。

既に校舎は人が少なく、すれ違うこともない。

三階建ての校舎の屋上、そこが今向かつている目的地になる。

屋上へ繋がる扉に到着した俺は、金属のノブを回し、重い扉に力を加える。

開いた扉の隙間からひんやりとした風が頬を撫でる。

春とはいえ、まだ肌寒い季節。

さらに午前授業というのも後を押してか、屋上に人はいなくなつた。

屋上へ出た俺は、柵に近づき、学園の辺りを見回す。

学園は島の中心部にある山を切り開いて建てられた為、ここから島全体を

見回すことができる。そこそこ見晴らしは良いのだ。

学園の周りは、これでもかという程の森が広がっている。

学園から何本も生える、森を切り開かれた道を辿っていくと、対岸沿いには商店街が並んでいる。

この島にいるのは魔法使いである俺たち学生と政府に関係ある人間だけだ。

街や娯楽施設もそういった人間が経営している。

一通り景色を眺めた後、花壇の近くに設置されている、木製のベンチへ腰かける。

飯を静かに食べたい時、俺はいつもここに来ていた。

学園には食堂もあるが購買のパンの方が安く済むし、何より朝の様な厄介ごとはご免だ。

そういった理由からあまり利用したことがない。

だけど、ここの購買にあるパンも絶品だと俺は思っている。

今も、全てのパン商品を片っ端から選んで食べる。

という、イベントを始めている最中だ。

今回は少し奮発して買ったカツサンド、それを袋から取り出し、口へ持っていく。

あと数センチで噛り付く所で、後ろから声が掛けられる。

「今日は、ずいぶん遅かったね。ソーカ」

鈴の様に凜とした声、聞き覚えのあるその声に、今食べようとした

カツサンドを口から遠ざける。

「…ああ」

情報更新、屋上には先客がいた。

気付かないはずだ。

屋上出入口の上にある貯水タンク、その上に彼女はいた。

整った顔立ち、出るところは出て、引き締まったプロポーション。

栗色の鮮やかな髪は腰まで伸びるポニーテールにまとめられている。

身に纏った雰囲気は可愛いというより、綺麗という印象を与える。

RUBICの三年生、この学園の中でもトップクラスの魔法使い。

『白百合 綾音（しらゆり あやね）』

彼女はその実力、見た目もあり、全校生徒の憧れだった。

そんな俺とは逆の意味で有名な彼女が、メロンパンを片手に座っていた。

「ん？どうしたんだい。じつと見つめてきて。何か私の顔についているのかな？」

その端正な顔をペタペタ触った後、

返事をしない俺を不思議に思ったのか、

紙袋を持って、タンクから飛び降りる。

「よっしっ」

ひらりとスカートが舞う。

ストーンと綺麗な着地を見せた白百合は、こちらに近づき、座るね、と一言言ってから、隣に腰掛ける。

風になびく彼女の髪がふわりと揺れる。

「…はあ」

白百合に聞かれないよう、心の中で密かに溜息をつく。

何故学園で人気の白百合がここにいるかというと

まあ、なんだ…一年の頃、上級生に絡まれていたところを助けてもらったりしたわけで…それからの縁になる。

今では、こうやって食事をとる時に来るようになった。

そのせいで周りからさらに難癖付けられるようになったのだが。

「それで、何の用だ？」

「ん、一緒にお昼を食べようと思ってね。待ってたんだ」

そう言つて茶色の紙袋を持ち上げる。

購買で売られているパンを入れる紙袋だ

「…一緒に、つて言つてた割に、既に食べ始めているようだが？」

「待つていたのは本当だよ。ただ、あまりにもソーカが遅いから」

「そんな時間は立ってないはずだが」

携帯で時間を確認するが、

お昼になってまだ十分程度しか経っていない。

白百合のクラスはそんなに早く終わったのだろうか。

「…二時間くらい?」

「授業始まる前じゃねえか!? 無茶にも程があるわ!」

二時間前と言ったらホームルームが始まる頃だ。

当然、そんな時間に屋上へ行くはずもなく。

「そんな前から居たのかよ…」

白百合は学年でもトップクラスの成績を誇るRUBICの魔法使い。

だが、自由奔放で気分屋、よく授業をサボっていると聞いていたが。

まさか本当だったのか…。

「サボっているとは心外だね。退屈な授業を受けても意味なんてないからね。

いわば時間の有効利用だよ」

それを世間一般では、サボっていると言うと思うが。

あとただ待っていたのなら時間の有効利用はしてないと思う。

「そんなこと続けていたら、教師に目を付けられるぞ?」

幾らトツプクラスの成績でも授業をサボるような生徒に

教師たちは良い感情を持たないだろう。

生徒に人気の白百合だが、その人気ゆえに、生徒の中には彼女の事を快く思っていない者もいる。

こんなことを続けていけば、恰好的になる。

そう説明するが、対して気にした様子もなく。

「んー、もしそうだったら、ソーカと同じだね」

と、ニツコリ微笑む白百合。

思わず頭を抱えたくなる、どうしよう話を通じない。

いや、いつものことだけど。これはどうしようもない。

ふと、白百合の言葉を思い出してみる。

…あれ、同じって、教師陣の俺の評価ってそうなのか？

あまり知りたくないことを知って若干落ち込む俺であった。

昼飯を食べ終えた俺たちは、他愛もない世間話をしていた。

昨日の夕飯、街にできた新しい店。大した話じゃないはずなのに

白百合は楽しそうに話し、聞いていた。

白百合は聞き上手なのか、口下手な俺でも詰まることなく会話が弾む。こういつたところが、彼女の人気の一つなのかもしれない。

そんな中、気になる噂話を聞いた。

「そういえば知っているかい？最近噂になっている『影法師』って噂」

「影法師？」

「うん、なんでも…」

白百合の聞くところによると、影法師とは

夜な夜な森に現れる、謎の影のことらしい。

その正体も目的も不明、突然現れ、消えるらしい。

「怖いよねえ」

大して怖がってなさそうに言う白百合。

「ってか、ワクワクしてないか？」

「だけど、ただの噂だろ？」

そもそも寮生の夜中外出は固く禁止されている。

その規則を破っている前提である噂なんてたかが知れている。

目撃者がいるってこと自体、ありえない。

そう言うとう白百合は呆れたように溜息をつく。

「ふう、ソーカは夢が無いなあ。乙女心もロマンティックも分かってないよ」  
「…否定はしないが、そこまで言われるのは癪だな」

乙女心なんて分かるはずもないが、理解できていたら、

もう少し気の利いたセリフが言えたのだろうか。

乙女心やロマンティックが分かる自分…ちよつと想像できない。

「まあ、ただの噂だとしても、お互いに色々気をつけようってことで」

残りのメロンパンをちぎって口に放り込む白百合。

屋上から吹く風によって彼女の栗色の髪が舞う。

その光景に既視感と共に懐かしさが込み上げる。

長い髪をなびかせるその姿を、いったい誰に重ねたのだろうか。

## 第四話

## 〈校舎〉

あの後、白百合と話しながら昼食を食べ終えた俺は

希沙羅のいる、『資料室』へと向かっていた。

屋上から一階まで続く階段をゆっくりとしたペースでおりていく。

人通りのない、静かな校舎に俺の歩く音がコツツ、コツツ、と響き渡る。

これから向かう資料室は、校舎から離れた位置にある、別館という場所にある。

別館には、授業に使う機材や魔法に関する書物など倉庫としての役割がある。

逆に言うとその程度の設備しかない為、物置以外あまり、利用されていない。

そのため普段立ち寄り寄る生徒は少ない。

校舎から別館へ繋がる廊下を歩き、目的の場所へとたどり着く。

扉に付けられた、金色のプレートには『資料室』と書かれている。

時間を確認するためにポケットを探り、携帯を取り出す。

今は約束の十分前。

この時間なら、既に希沙羅も来ていると思うのだが。

確認として、扉をノックしておく。

コンツコンツ、と小気味の良い音が廊下に響く。

いつもなら、中から返事が返ってくるはずだが…今日は一向に返事が返ってこない。疑問に思った俺は、試しにドアノブを回してみる。

ガチャツ

「…あれ？」

ドアノブは何の抵抗もなく回った。

扉を手前に引くと、ギイツと音を立てながら、ゆつくりと開く。

鍵がかかっていなかったことは…希沙羅はいるのか？

それにしても返事が返ってこないのはどうしてだろうか。

確かめる為に部屋へと足を踏み入れる。

室内は、昼過ぎにしては、少しばかり暗い。

その理由は本来、日差しが入るはずの窓に

本棚が所狭しと置かれているため、日光が入りにくくなっているのだ。

資料室に入って、目を引くのは、視界を埋め尽くす大量の本。

まさに本の海、情報の宝庫だった

元々この資料室は、魔法についての書物や歴史、学園関連の書類、

島の地形調査について、まとめられた資料などが、置かれているのだが…。

今は希沙羅が半分私物化しているので、置いてあるものも

料理本や漫画、絵本、小説など多種多様なジャンルが置かれている。

その光景は、図書館と呼ばれる場所に少し似ている。

「(図書館：そういうえば本土にいた頃、何度か希沙羅に連れて行ってもらったつけ)」

希沙羅に拾われてきた俺は、当時入院していた。

あの頃の自分とはかく世間に疎かった。

記憶が無い…というのは不安なもので。

それを知られてから、希沙羅に連れられて行つた場所がある。

『お主に必要なのは知識だ。ここで勉強でもしておけ』

そう言われて、病院の中にあつた図書館へ放り込まれたのだ。

無数に並ぶ本、様々なジャンル、一冊に込められたその情報量。

初めての図書館に俺は只々圧倒されていた。

その日から俺は時間があれば図書館へ通つた。

本を読むのは楽しくて、色々な本を読んだ。

絵本や小説、民話や伝承など、片っ端から読み漁つていた。

自分の知らない、忘れてしまった世界を知ることができる喜び

それはとても刺激的で感動的だった。

そんな懐かしい記憶を思い出しながら部屋の奥へ進む。

部屋の中央まで行くと、書類や資料に囲まれた長テーブルに

突っ伏している、ひとりの少女を発見した。

その背中は規則正しく、上下している。

どうやら眠っているようだ。

少女の見た目は奏華と同じくらいの年に見えるだろう。

人形のように整った顔立ち、腰まで伸びる、プラチナブロンドの髪。

今は閉じているが、その瞳には力強い意志が宿っている。

この姿こそ可憐な少女こそ、その若さで魔法使いの上に立つ者たちの一人。

魔法使い育成機関 R U B I C の学園長であり、俺の身元引受人『友禅寺 希沙羅（ゆ

うぜんじ きさら）』その人だ。

「…ん」

もぞもぞと、身を縮めるように動く希沙羅。

硬い机に突っ伏しているせいかな、少し寝心地が悪そうだ。

大量に置かれた本を踏まないよう避けながら、近付いた俺は、希沙羅の肩を揺する。

「希沙羅、希沙羅。起きてくれ」

ユサユサ。

「……んん」

肩を揺すつたことに、わずかに反応を見せるが、目覚める気配はない。机を見てみると、いくつか書類が積み重なっていた。

おそらく、仕事の途中に眠ってしまったのだろう。

最近の仕事が忙しくて、ロクに寝てないのかもしれない。

「……ふう、しょうがないな。よつと……」

希沙羅の足と背中に手を回し、持ち上げる。

いわゆるお姫さま抱っこというやつだ。

希沙羅が起きていたなら、恥ずかしさで暴れるだろうが、今は夢の中。

この間に、ソファにでも移してやろう。

「(…にしても、軽いな)」

普段ちゃんとお食べているのかと不安になるくらい希沙羅は軽かった。

それとも俺が知らないだけで、女の子ってのはこんなに軽いものなんだろうか。

それに、密着しているせいかな、希沙羅から甘い香りがした。

「う……んん？」

それは神さまの粹な悪戯なのか、あと少しでソファにつくところで、

希沙羅の瞼がゆっくりと開く。

何度か目をパチクリさせて、顔を上げる。

まだ寝ぼけているのか、焦点の合わない瞳で俺を見上げる。

こんな無防備な表情をする希沙羅はあまり見ない為、かなり新鮮な気分だ。そんな呑気な事を思っていた俺だが、ふと状況を確認してみる。

寝起きの希沙羅、そんな彼女をお姫さま抱っこしている俺。

あれ、なんかやばいような…。

「えっと…おはよう?」

「ん、おはよ…ん?」

挨拶を返そうとした希沙羅だが途中で止まる。

その目にゆっくりと理性という名の俺の悲劇へのカウントダウンが始まる。

やがて状況を理解したのか、その顔が次第に真っ赤に染まっていく。

あ…これはまずい。

「あー希沙羅。これはだな…」

何か言わなければと思ったが、咄嗟に思いつかない。

人間、追い詰められると、何も思いつかないのだと、俺は今日、そのことを身をもつて体験した。

顔を真っ赤にした希沙羅が猫の様にするりと腕から逃れる。

「ふ、ふ、ふ。まさか我（われ）が寝ている隙に……とは」

言うが早いのか。

希沙羅は人差し指と中指の間に一瞬にして一本の裁縫針を出現させた。すると希沙羅の指先に魔力が集中していく。

オレンジ色の電気がバチバチとはじける。

第二世代の属性魔法のひとつで希沙羅が得意とする雷属性だ。

「……（。D。）ハッ！」

呑気に解説している場合じゃない！

急いでこの状況を説明しなければ！

「誤解だ！魔力を込めるな！俺はただ、アンタをソファに……」

「ああ。分かっているとも。若い衝動を責めるつもりはない。だがよもや

寝ている者に手を出すとはな……この外道!!」

「やっぱりわかってないだろ!?!」

若干涙目になっている希沙羅に罪悪感が湧くが、俺何もしないよな!?!

そうこうしている間に、指先程度だった電気の球体は、拳くらいの大きさへと成長する。

あんなのまともに喰らったら、シャレにならない。

いやマジでっ！

焦る俺を希沙羅は慈愛を込めて微笑む（涙目で顔は真っ赤）。

同時に俺は背筋が凍るような悪寒を感じる。

希沙羅はまるで罪人へ向けるように宣言する。

「さあ選べ、感電してからお縄につくか、お縄についてから感電するか」

既に希沙羅の中では、警察沙汰になってる!?

「それ選択って言わないよな!? ていうか後者って、ただの追い打ちだよな!?

なにより、それ生身の人間に撃つのもって危険だよな!?

俺との会話のキャッチボールをフルスイングで打ち返す希沙羅。

拳サイズの電撃がこちらへ飛んでくる。

「あつぷ!?!」

それを咄嗟に避ける。

電撃はすぐ横を通り過ぎるが、壁に当たる直前、空気に溶けるよう霧散していった。

おそらく、壁に当たる直前に消えるよう魔力を調整しているのだろう。

しかし、今の一撃、避けなかったら…もろ当たっていた。

もし当たっていたら…。

その光景を想像して背筋が凍るのを感じる。

後ずさりながら抗議の声を上げる。

「……これってよく言う体罰ってのになるよな?」

俺の抗議の声に希沙羅は、それはもう良い笑顔で。

「なに、安心しろ。これは体罰ではなく、教育ツツだ!!」

再び電撃を放つ希沙羅。

てか、そのセリフが通つたらなんでもありじゃねえか!

「ちよ!?ちよつと待て!だから話を…ギャー!!」

正午過ぎの資料室に男子生徒一名の叫び声が虚しく響き渡った。

「状況確認もせず、いきなり魔法撃ってくるやつがあるか!」

「るっさい!気安く乙女の柔肌に触りおつて。普通なら即刻死刑だ!!」

顔を真っ赤にしたまま、視線を合わせようとしない希沙羅。

いや、確かに起き抜けにお姫さま抱っこされてたら、慌てるかもしれないが。

魔法攻撃はやり過ぎだと思うんだが…。

あの後、希沙羅の電撃を躲しながら、必死の説得を続け、どうにか撃つのは止めても

らった。

…疲れた。

しかし、あれだけ調整された魔法を撃っても疲れひとつ見せない希沙羅。やはり最上位の魔法使いは伊達ではない。

こっちは自前の体力で必死に避けていたから、もうヘトヘトなのだが。

「そもそも呼び出しておいて、寝ていたそっちにも非はあると思うんだけど？」

「うぐっ…」

「まあ、それだけ忙しいってのは、分かっているつもりだけだよ」

お姫様抱っこが、よっぽど恥ずかしかったらしく。

さっきからこの調子で、すっかりへそを曲げてしまった。

これではどっちが子供なのか分かったものではない。

頭を掻きながらどうしたものかと考えていると。

「よし、仕切り直しだ！お主は扉の前に戻れ」

…再開を求めてきた。

希沙羅なりの、はじめなんだらうが…正直。

「…めんどくさいなあ」

「めんどくさい言うな！お主は乙女心が何にも分かっておらん！」

ふいっとそっぽを向く希沙羅。

その顔は未だ赤いままだった。

それにしてもこの短い時間で女子二人に乙女心が

分かってないと言われるとは、やはり少しは勉強した方がいいのだろうか？

あの後、やり直しを求めてきた希沙羅をどうにか落ち着かせた。

希沙羅は再び椅子に座り、大人の余裕（自称）を持った笑みを浮かべていた。さつきまで取り乱していた人とは到底思えない。

だがこれ以上話を掘り下げても、藪をつついてなんとやら、合わせておこう。

「それで、今日は何の依頼なんだ？」

「ああ、そういうえばそうだったな」

そう言つて希沙羅はテーブルに積まれたとは別に

引き出しにしまわれていた大量の紙束をドンつと机に置く。

うわあ、すごい量。

「お主にはこのプリントを しおり としてまとめてもらおうと思つてな」

「いや、さすがにこの量を一人でつてのは…」

希沙羅が渡してきたものは新入生へ向けた学園案内のしおりだ。十枚で一セット、それをひたすらホツチキスでとめていく作業だ。

この量を一人でやるのはさすがに無理がある、そう言おうと思ったのだが…

「お・ね・が・い」

両手を合わせ、可愛らしく、ウイंकする希沙羅。

さっきの出来事もあり、断れるはずがなかった。

「…はい」

こうして、今日の依頼である書類まとめが始まった。

ページをまとめ、ホツチキスでとめる。

まとめる。とめる。まとめる。とめる。

この工程を何度も繰り返し返す。

単純な作業だが、これが結構疲れる。

作業の手を止めて一息つくくと、希沙羅がお茶を出してくれた。

「ありがとう」

お礼を言っただけにする。

お茶の温かさが全身に染みわたる。

ホッと一息ついて、希沙羅へ視線を向けてみる。

「……」

希沙羅は集中しているようで、大量の書類と睨めっこしている。

時々あくびをかみ殺すような声が聞こえるが、その間も手は休むことなく動いていた。

それに倣って、俺も作業に戻ろうとしたのだが。

「……なあ、奏華」

俺の視線に気づいたのか、それとも偶々なのか

相変わらず手は止めてないが、希沙羅が話しかけてきた。

「なんだ？」

「教師共が話しているのを偶然耳にしたんだが……『影法師』というのを知っておるか？」

「……ああ、夜な夜な森に出てくる不審な影ってやつだろ」

丁度さつき、白百合がその話をしていたので記憶に新しい。

「この島には、まだまだ謎が多い……気を付けておけ」

気を付けろ……その言葉に思わず、作業を止めて、希沙羅を見る。

希沙羅もこちらに顔を向けていた。

彼女の力強い目は真剣身を帯びていた。

「……そこまでなのか?」

単なる噂程度で希沙羅が警戒するなんて…。

「なに、単なる乙女の勘というやつだ。心の片隅にとどめておく程度で良い」

希沙羅はそう言うが俺はやけに気になった。

今までも何度かこういつた噂は流れていたが、希沙羅が興味を示したことはない。

『…くだらん』

いつもそう言っていた。

もしかしたら、この噂はただの噂じゃないってことか?

「ふう、雑談が過ぎたな。今のは忘れよ」

そう言って再び作業に戻る希沙羅。

それ以上の会話は望んでいないようだった。

その後はお互い話すことはなく。

黙々と作業を続けた。

〈学園前〉

休憩を挟みながら、なんとか作業が終わり、解放されたのが五時間後。

学園を出る頃には、既に辺りは暗く、道沿いに置かれた街灯が夜道を照らしていた。暖房の聞いていた、室内と違い、外の空気は冷たく、少し肌寒い。

時間にして六時三十二分。

ここRUBICは八時になると、コンビニはおろか、全ての施設は機能を停止させ、生徒達の出歩きを完全封鎖している。

この時間では、とてもじゃないが外食に行く時間はない。

面倒だが、夕飯は自分で作るしかない。

「まあ、適当なもんでいいか」

伸びをして疲れた体をほぐしながら、街灯が仄かに照らす、通学路へと歩き出した。

## 第五話

&lt;森&gt;

草木生い茂る暗い森を奏華は走っていた。

既に辺りは薄暗く、わずかな光は彼を見下ろす月だけだった。

「はあっ、はあっ……」

一体、どのくらい走ったのだろうか。

すでに脚は棒のようになり、感覚もなくなっている。

肺は呼吸をすることを忘れ、うまく酸素を取り込めない。

森の中は薄暗く、何気ない木でさえ、今は恐怖を煽る不気味さを持っていた。

夜の森をがむしやらに走っていた為、方向も分からなければ、自分の今いる場所も分からない。

完全に方角を見失ってしまった。

一度落ち着いたほうがいい、そんなことは分かっている。

…けれど

今この瞬間にも、“アイツ”が近づいているかもしれないという恐怖が俺の足を速め

る。

「はあ、はあ…」

足に限界が来て、ようやく立ち止まる。

ここまで休まず、走り続けてきた為、何度も荒い息を繰り返す。

「はあ、はあ…あつー！」

手の力が緩み、持っていた携帯が落ちる。

幸い、草がクツションになり、大事には至らなかった。

だが既にバッテリー残量は切れていて電源は入らない。

「(ちやんと充電しておけば…)」

だが、今更そんなこと言っても仕方ない。

呼吸を落ち着かせた俺は

息をひそめ、音を立てないよう気をつけながら移動を再開する。

足音を殺して、ゆっくり、ゆっくりと歩く。

歩きながらも細かな音を一つも聞き逃さないよう辺りをうかがう。

聞こえるのは風に揺れる木の葉の音、自分の呼吸だけ。

嫌な汗が背中をつたう。

何か得体の知れないものが全身を這いずっているような不快感。

そんな俺を嘲笑うように、木々は揺れていた。

——三十分前——

〈学園通学路〉

希沙羅から出された仕事を終えた俺は、学園から

第七寮まで続く一本道を歩いていった。

第七学生寮は学園に近い代わりにも人通りが少ない。

それは第七寮が森に一番近い場所に建てられており、その関係で他の建物がまっただけではないからだ。

この道は第七寮専用の道と言っていていいだろう。

加えて、もうすぐ夜時間。

RUBICには夜間外出の禁止が出されている。

出歩けば処罰の対象となり、発見され次第、何らかのペナルティが課せられる。

だから、基本よっぽどの阿呆じゃない限り、夜間に外出しているやつなんていない。ちなみに現在の時刻は六時四十分。

禁止時間の八時まであと一時間以上余裕がある。

この道なら十分間に合うだろう。

『』

「ん？」

なんだ、これ。

学園を出て少し歩いた所で、何か聞こえてきた。

「（これは…歌？）」

微かに聞こえる声。

それは何かを歌っているように聞こえた。

こんな時間に、いったい…？

辺りを見回すが、鬱蒼と生い茂る森だけが広がっているだけ。

人影すら見あたらない。

日頃の寝不足でついに幻聴が聞こえたのかと思ったが、歌は絶えず聞こえてくる。

「……」

…耳を澄ませ、声を拾う、歌は森の奥から聞こえていた。

本来、森は許可が下りた者しか入ることを許されない。

その理由としては、この島の安全が完全に確保されていないからだ。

実際、森で行方不明になった者もいるという。

ありえない…なんてことはないだろう。

この島は異世界から来た島。

人の手が加えられているのはごく一部。

魔物が住み着いている、という報告も上がっている。

魔物：突如現れた異種族の一つ。

その特徴はRPGなどで見るぶよぶよのアメーバのような存在。

奴らはその身体を自在に変えることができる。

時には鳥に、時には四足歩行の動物に：姿は様々だ。

だが大きさや変形能力も個体差があるようだ。

共通点があるとすれば、それは、奴らが魔力を欲していることだ。

微かな魔力でも自らのエネルギーにするために襲い掛かってくる。

捕食されれば、吸収され、あの世行きだ。

何を考えること無く貪る、知性無き怪物、それが『魔物』だ。

だが、これは魔物の発する動物のような唸り声でも、

奴らが動くベチャツとした不快な足音でもない。

今、聞こえているのは歌声だ。

「(新種の魔物：って考えるより)」

脳裏をよぎるのは昼に白百合や希沙羅とした会話。

夜に蠢く謎の影『影法師』の噂。

影法師：というくらいだ、人の形をしているのだろうか？

その可能性くらいは、あるかもしれない。

白百合だけでなく、希沙羅にも気をつけるよう言われているが。

「（…確かめるチャンスか）」

二人の忠告を無視する事になるが、例の噂、その真相が、すぐそこにあるのかもしれない。

もし違っていても、この歌の主を確かめることができる。

少し躊躇したが、好奇心が先行し、結局、森の方へと足を向けた。

森の中に入ってから、どのくらい歩いただろうか。

携帯の時計を見ると十分程経過していた。

歌は思っていたより森の深くから聞こえており、まだつかない。

既に日は落ち、辺りは薄暗くなった。

手に持っている携帯のライトと月の光だけが森の道を仄かに照らしている。

森の奥へ行くにつれて、歌はより鮮明にはつきりと、聞こえるようになっていた。

それと同時に、胸騒ぎ……というのだろうか。

今の自分の行動すら、何か得体の知れないモノに導かれている。そんな気さえしてきた。

だが、いまさら引き返すようなことはしなかった。

やがて俺は周りの木々が開けた、広い場所へと出た。

何故かこの場所には木が一本も生えていない。

まるで木がこの場所に生えるのを避けているかのように。

森の中にぽっかり空いた場所。上空からならそう見えるだろう。

その開けた場所の中心、そこに一人の少女が立っていた。

後ろ姿で顔は見えないが、腰まで伸びた長い黒髪が

月明りに照らされ、淡く輝いているように見える。

真っ白なワンピースがその黒髪をより一層引き立てていた。

儂い、今にも消えてしまいそうな、そんな幻想的な少女に思わず息をのむ。

とても神秘的で……綺麗だった。

いつの間にか、俺は目の前の少女に見惚れていた。

「……(い)き(づ)ん(よう)つ」

鈴を転がすような透き通った声が静かに響く。

俺の存在に気づいたのだろう。

歌を止めて、少女が声をかけてきた。

しかし、少女が振り返ることはなく、その顔は見えない。

だが俺は、少女が笑っているのだと…なんとなく分かった。

「今日は月が綺麗ね。こんなステキな夜、月光浴をしないともつたいないわ」

顔を上へ向けながら、楽しげに話す少女。

その言葉につられて、俺も上を見上げて見る。

宝石をちりばめたように輝く満天の星空。

その中でもひとときわ大きく、輝いている満月が俺たちを見下ろしていた。

「今日は満月の日だったのか」

ライトと月の光を頼りに森の中を歩いてはいたが、空までは見上げていなかった。

「月光浴ってね。内面を浄化する、なんて言われているそうよ。月には不思議な魔力が宿っている…なんて」

少女は話し続ける。

心なしかその声は楽しんでるように聞こえる。

「その反対に月には邪悪なものを活性化させると言われている。その二面性が面白い

わ

「…君はこんな時間に、こんな所で何やってんだ？」

「…残念。私のムーントークはお気に召さなかったみたいね」

肩をすくめ、ふう、とため息をつく少女。

たいして残念そうには見えないが…。

…てかムーントークで。

色々ツツコミを入れたいが話がややこしくなりそうなので我慢する。

「(どう見ても普通の女の子…だよな?)」

噂に聞く影法師、そう思っていたが、どうやら違っていたようだ。

ここにいたのは少し変わっている少女だった。

予想していたものと違ったためか、単に安心したのか脱力してしまった。

「それにしても静かね、人っ子一人いないわ」

「そんなの、もう直ぐ外出禁止の夜時間だからに決まっているだろう」

「あら、そうなの？でも、それなら貴方はどうしてここに？」

「…俺は学園で用事があったんだ。それで遅くなった」

「…学園？」

その時、少女が初めて振り返った。

だが、長い前髪で目元は隠れていて表情までは分からなかったが、整った顔立ちから美少女であると思った。

少女は俺に近付くと、可愛らしく小首を傾げる。

まるで俺の言っていることが伝わっていないみたいだ。

「こんな森に学園があるの？」

「…は？」

少女の言葉に一瞬あつげにとられる。

いったい、この娘は何を言っているのか。

ここに住んでいる人間がRUBICを知らないはずがない。

驚いている俺の反応を見て少女は「ああ…」と何か納得した顔をする。

「ごめんなさい。どうやら私、記憶が無いみたいなの。気が付いたらここに…」

「記憶…それって…」

まさか、目の前の少女は記憶喪失なのだろうか。

魔物に襲われたのか、頭でも打ったのか。

その理由は分からないが、そう言うことなのか？

しかし、少女の身体や服に汚れは見当たらない。

「それで、ここはどこなの？」

「……ここは魔法使い育成機関『RUBIC』だ」

「魔法使い……RUBIC……」

俺の言葉を繰り返すように呟く少女。

その声には不安があるように聞こえる。

「何があったか分からないが、ひとまず学園に行くか？ アンタがここの生徒なら希沙羅に聞けば詳しい情報が分かるはずだ。 ……不安なら一緒に聞いてくけど」

いつもの俺なら、すぐに希沙羅に連絡して後は任せていただろう。

だが、『不安なら一緒にについてく』そう声を掛けたのは記憶喪失という少女に  
少なからず自分を重ねてしまったからだろうか。

「……優しいのね。でも遠慮しておくわ」

そう言つて、少女は歩き出す。

「あ、おい！ 待てよ」

記憶喪失の少女はどこへ行くかうというのだろうか。

俺の来た道とは反対の道へ歩いていく、森の奥へと……

ただでさえ、夜の森は危険なのにさらに奥へ行くななんて、いくらなんでも危険すぎる。

「おい、ちよつと待て！」

「……そう言えば」

俺の静止の声で止まったわけではないが、立ち止まった少女。

「狂い桜って…知ってるかしら？」

「くろく…さくへんさく…」

その時、一陣の強い風が吹き、木の葉が視界を覆う。

視界が晴れたとき、いつの間にか少女の姿は消えていた。

なんだ…今のは…魔法？

だが、そんな動作一度もなかったと思うが…。

そもそも本当に記憶喪失だったのか。

「…まさかな」

不思議な少女だった。

今まで話していたというのにどこか現実味がない。

夢でも見ていたように、さっきまでの出来事があやふやに感じた。

『影法師』

俺は狐にでも化かされていたのだろうか。

『狂い桜って…知ってるかしら？』

「(また噂、今日はそんなんばつかだな。それに…いや、今はそれどころじゃないか)」

このまま森にいたら俺も危険だ、急いで戻らないと。

少女の事は気になったが、何か考えがあつての行動かもしれない。

そう自己完結して踵を返す。

明日にでも希沙羅に報告をして、いつしか今日の出来事も忘れていくだろう。

そうして、また普段の日常に戻る…そう思っていた。

『今度こそ良き物語を…君に…』

しかし、その日常を壊すかのように、ソレは来た。

## 第六話

〈森〉

目の前で起こる爆発。

「ツ!? な、なんだ」

土煙の上がる中心。

眼を凝らし、爆発が起きた場所へ近づいていく。

風によつて、土煙が徐々に薄れていく。

その中で立ち上がる影が見えた。

一見、そのシルエットは人間に見えた。

だが煙が晴れた後に見たもの。

それは、人間とは全く異なる存在だった。

「…っ!?!」

マネキンのように作られた、表情の無い顔。

白くコーティングされたボディは不気味な光沢を放っており、

関節や所々に歯車などの内部パーツが見え隠れしている。

一番目立つのは、背中に生えたトゲのように鋭く、広げられている二枚の鋼の翼。

まるで悪戯に人間を真似て作ったような、神への冒瀆。

人でも天使でもない、歪で未完成の存在。

眼の前には紛れもない。

異世界から現れた、異種族の一つ『機械天使』だった。

### 『機械天使』

奴らの目的や行動は詳しく分かっていない。

だがこれまで奴らが行ってきたことから、ある推測が出されている。

それは：自分（機械天使）たちの脅威となる存在の排除。

魔物と違って考える能力があっても、善悪の判断は無く、その思考を止める

ブレーキが存在しない、理性無き怪物。

天使がゆっくりと立ち上がり、表情の無い顔を上げる。

硝子のように無機質な目が動き、ゆっくり周りを見回す。

そしてその目で俺を捉え、じっと見つめる。

時間にして数秒だっただろうか。

その間、俺は動けず、何もできなかった。

思考が状況を受け止めきれず、行動を止めてしまったのだ。

先に動いたのは…天使だった。

天使は俺に向かって、ゆっくりと手を突き出した。

人と同じ五本の指。それは本物の人間のようで

人と同じ姿をした目の前の存在に言いえぬ恐怖が全身を駆け巡る。

天使の手に魔力が集中していくのが分かる。

動かない身体で避けるため、姿勢を横に倒し、体重をかけて無理やり転がり込む。

直後、背後から爆発音が響き渡る。

その爆風に耐えられず、ふきとばされる。

「はっ…はっ…う…」

全身を強く打ち付けられ、痛みで苦悶の声を上げる。

痛みに耐えながら、背後を確認すると

さつきまで俺が立っていた場所にはクレーターができていた。

避けなかったら、今頃…。

「はあっ…はあっ…！」

心臓が早金の様にうるさい。

ヤバイ：ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ。

この状況はまずい。

焦る頭に浮かぶのは何故という疑問ばかり

何故天使がこの島にいるのか。

何故この島に入れるのか。

いくら考えても、そんな疑問すぐに無意味だと分かる。

鳴り止まない心臓の音をうるさく思いながら、なんとか立ち上がる。

だが、一体どうすればいい。

奴らは災害と同じ、ただの気まぐれで通り過ぎるだけ。

人の力だけでは到底争うことなどできない。

天使は再びこちらへ手を向ける。

恐らくさつきのように撃つてくるのだろう。

未だ上手く動かない身体を無理やり動かして、森の方へと走り出した。

何度かバランスを崩しかけたが幸運なことに倒れることはなかった。

森の中は木々が生い茂り、視界が悪い。

上手くいけば隠れることができるはずだ。

それで天使が諦めるかは分からないが、あの場にいるよりは100%マシンはずだ。間一髪、すぐ後ろで爆発が起きる。

背に熱を感じながらも、なんとか森の中へと入ることが出来た。

「少しでも…遠くへ！」

その後は少しでも離れられるよう無我夢中で走った。

---

そして、時は今に至る。

「はあ…はあ…」

方向も見失い、携帯の明かりも無くなった。

ついに体力の限界が来て、すぐそばの木へ寄りかかる。

「…（これからどうする？）」

まだ天使が俺を探しているかは分からないが、遭遇すれば、俺は死ぬ。

ただの人間に機械天使に対抗できる術はない。

勝てる保証なんてどこにもない。

だが…アレを使えば、少しは戦えるかもしれない。

少なくとも逃げるチャンスくらい生まれるのかもしれない。

「いや、ダメだ。これは…」

これは出来れば使いたくない。

もう二度と…使いたくない。

…でも。

「ホントは使わないのが一番なんだけどな…」

そんな自分の発言に思わず苦笑する。

俺はこんな時でも自分の命より、そんな事を気にするなんて。

魔法が使えない俺では逃げることしかできない。

何度目かの深呼吸、幾分か思考がマシになった。

気持ち落ち着かせた俺は、改めて、何か目印になるものがないかと辺りを散策する。

しかし、夜の森はどこまでも暗く、灯ひとつ見当たらない。

この暗い森を月明りと携帯のライトだけで移動しなければならぬのだ。

状況で言えば最悪。

だが、ここで立ち止まる程、臆病になったつもりはない。

動かなければ何も変わらない。

この言葉は何度も希沙羅に言われてきた。

さて…と、動くか。

「…今日は夜更かしだな」

自分に言い聞かせるように、少しでも恐怖を払えるように、ワザと元気に言ってみせる。

そして俺は暗い森を再び歩き出した。

〈現在〉

携帯の電池が無いせいで詳しい時間は分からないが、あれから二十分ほど歩いたかどうか。

何度も転びそうになりながらも、道なき道を歩き続けた俺は前方から微かな光が見えているのを発見した。

「もしかして、道へ出たのか！」

わずかな期待を胸に、光のある方角へ進むと、森が開けた場所に出た。

だか、そこはさっきの場所と似た、木々のない、ぽっかりと空いた場所。

しかし全てが同じではなかった。

その証拠ともいえるのが、そびえ立つ一本の桜の木だった。

ただの桜ではない、その桜の花はなぜか淡い光を放っていた。

「なんだ……(汗)」

まるで別世界に迷い込んだかのような錯覚を覚える。

森に、こんな場所があったか？

確かに森の方は探索されてないが、上空から撮られた写真や地図で  
ある程度地形は知られている。

だが、さつきのもそうだけど、この森に、こんな開けた土地は無い。

ましてや、桜の木なんて存在していないはずだ。

しかし、現にこうして存在している。

大きさは十数メートルくらいか。

淡く舞い散る花びら、微かに香る桜の匂いは何より現実だと俺に教えている。

暗闇に対抗するように淡く輝く桜の木は、まるで俺をここまで導いているかのように  
思えた。

『ねえ、狂い桜って知ってるかしら？』

あの少女に言われたことを思いだす。

「……これが……狂い桜……なのか」

俺は無意識に桜へと近づいていた。

何故だろう。どこか懐かしい。

火に誘われる虫の様に俺は桜の木へと近づく。

桜の木の周りを囲うように湖があった。

俺は濡れることを気にせず、湖へと入る。

湖の深さは腰まで浸かった所まででそれ以上は深くならなかった。

ついに桜の木の近くまでついた俺は手を伸ばす。

その手が、あと少しで桜の幹に触れようとした時。

…ガチャリ

微かに聞こえた金属音。

悪寒が走った。

「…ッ!？」

急いで振り返る。

さつき俺が入ってきた森の中、そこには『ヤツ』がいた。

『……』

濁ったガラス玉のような目で、俺を捉えてる、機械天使が。

「…よう、さつき振りだな」

返事が返ってこないことはわかっているが声をかけた。

そうでもしないと恐怖を抑えることができないからだ。

「なんでそんなに俺を執拗に狙ってんだよ？俺なんかしたか？」

当然、返事など返ってこなかった。

しかし、その目は変わらず俺を見続ける。

そしてそれは…一瞬にして動いた。

何かの魔法か、単に奴の機動力か。

天使はそのスピードで一気に距離を詰め、拳を放つ。

「…ッー！」

身体を守る為、反射的に右腕でガードする。

メキッ！

嫌な音が聞こえた。

その勢いのまま吹き飛ばされる。

何度も地面をバウンドしてようやくやく止まる。

「ガアあ…！」

いてえ…

右手が熱い。折れたのか。

身体は地面に突っ伏したままで、右腕が見えない。

「はあっー…はあっー！」

痛みで上手く酸素が吸えない。

気絶しなかったのが奇跡なくらいだ。

天使はそんな俺をジツと見ていた。

不気味なくらい無表情な目で……まるで俺の本質を読まれているかのような気持ちの悪い感覚。

『……』

天使が右手を再び向ける。

こちらが動けないと知って、遠距離魔法を放つつもりなのだろうか。

その読み通り、右腕の痛みで、思うように身体が動かない。

腕が使えず、倒れたままでは起き上がることもままならない。

避けることはできない。

『諦めろ、もう無理だ』

見透かしたかのように聞こえる幻聴。

『もういいだろ？十分頑張ったじゃないか。そこまですて生きたいわけじゃないだろ？』

……るさい

『……運が悪かったんだよ』

「うるさいって言ってるんだよー」

力任せに腕を地面に叩き付ける。

ジーンとした痛みが腕から流れる。

幻聴は聞こえなくなった。

かわりに聞こえるのは天使のガチャガチャと鳴る耳障りな足音。

…アレを使うしかない。

正直、今でもこの力を使おうとすると、手が震える。

いつか、この力に飲み込まれてしまうのではないかと。

使えば使うほど、泥の中に沈んでいくような感覚。

それがとても恐ろしい。

…だけど。

『そう…か…』

俺を呼ぶ今にも消えてしまいそうな少女の声…。

「…そうだ。こんなところで終わってたまるかよー」

まだ、何も掴めていない。

この手の中は空っぽのまま。

だから俺は…まだ…死ねない！

覚悟は決めた。

今、目の前にいる脅威を退けるために。

痛みをかみ殺し、力を振り絞り、うつ伏せから、仰向けになる。

そして左眼に手を触れる。

そして、自らを鼓舞するよう力の限り叫ぶ！

「アクセス！」

一瞬ののち、世界は反転し、赤く染まる。

そのほんのわずかな一瞬に見えた景色がある。

俺の身長を優に超える巨大な歯車。

その周りに空いた七つの空白。

その一箇所へ注ぎ込まれる魔力の奔流。

魔力は空白の一つに埋まるよう集まっていく。

そして形を作り、一つの歯車となつて、空白を一カ所だけ埋める。

一つ埋めただけだが、それに合わせて、巨大な歯車もゆっくりと動き出す。

イメージの世界は消え、現実へと戻される。

その瞬間、紅く反転した世界は、一瞬にして元の色を取り戻す。

変化はすぐに訪れた。

奏華の左眼が紅く染まる。

彼の持つ『魔眼』が発動されたのだ。

「ああ、この感覚、久しぶりだ」

心の奥から湧き上がる高揚感。

だが決して流されないようなんとか抑え込む。

首を動かして機械天使の方を見る。

今にも、ヤツは魔力を放とうとしている。

「（…視えるな）」

奴の魔法の構成が、俺に知識として流れてくる。

俺が理解しなくても、左眼が勝手に理解し、適応させていく。

干からびた砂漠に水路の道ができるように。

俺の中に無いはずの魔力回路が身体全体を巡っていくのが分かる。

俺の『魔眼』によって得た知識。

アイツが使った炎属性の魔法を『写し取った』！

「写させてもらったぞ。天使！」

手をかざし、魔力を左手へと集中させる。

それに合わせて、土で汚れた制服のラインが肩から左手まで

伝うように淡く発光する。

これは制服に組み込まれている、魔力の流れをイメージしやすくするためのものだ。魔法を使い慣れてない俺にとって、この機能は分かりやすくもいい。

「お返しだーくらい…やがれえつつっ!!」

左手に集中した魔力を一気に放つ。

放たれた魔力は炎を帯びて、天使の放った、火球と衝突し、大爆発となる。

『…』

俺の反撃が予想外だったのか、天使の動きが一瞬止まった。

「もう一回だー」

続けて二発目を放つ。

だが、天使はこれ避ける。

「(やつぱり、そう簡単にあたってはくれないか…)」

牽制のため、何発か火球をお見舞いする。

…が、攻撃はろくに当たらず、全て避けられる。

それどころか天使は地面へ向けて火球を連射している。

いつの間にか辺りは土煙が上がっていた。

その間になんとか身体を起き上がらせる。

辺りの警戒を忘れずに。

「(視界が悪い、だがそれはアイツも同じはず)」

地上戦：それを前提に俺は警戒していた。

そんな俺の思い込みが隙を生んでしまった。

『…!』

「ツ!?しまっ…!!」

天使は地上からの攻撃ではなく、空からの奇襲をしかけてきたのだ。

背中の羽は飾りではない、そんな当たり前の事さえ、考えつかないほど俺は冷静ではなかった。

後ろに降り立った天使の攻撃に反応が遅れる。

「ぐっ…」

とつさに動く左腕で庇ったが

天使の拳は勢いを殺さず、吹き飛ばされ、桜の木へ打ち付けられた。

「う…あ…くっ…そお…」

全身の力が抜けて、そのまま倒れる。

左腕の感覚がない、両腕をやられた。

「(ああ…今日だけで何回地面に顔当ててんだよ)」

うつぶせのまま、俺は動けない。

天使がゆっくりと近づいてくるのが分かる。

「(くそ…身体が動かない…)」

死ぬ…死ぬのか。

こんな…ところで…。

自分の事も碌に分からないまま…。

なにも思い出せないまま…。

「あ…死にたく…ないなあ」

誰かにすがるわけでもなく、命乞いをするわけでもなく。

ひとりごとのように呟いた言葉。

誰の耳にも入ることなく、静かにこの世界から退場する。

それこそが八神奏華、最後の言葉になるだろう。

しかし、そんな呟きに返事が返ってきた。

『死にたくないの?』

それは深い井戸の中から聞こえるように

『夢現の中で内に宿した羨望の念、終わることのない、消えることのない渴望の念、

貴方はそのすべてを捨て去ろうとしている』

それは泣く子供をあやす様に

『それなら、私が貰い受けましょう』

それは耳元で囁くように

『その…身体…』

意識は薄れ、眠気が襲ってくる。

ガツガツと、天使の近づく足音がすぐ近くで聞こえる。

このまま、俺は…。

『…』

天使が奏華へ止めを刺そうとしたその瞬間。

黒の一閃がその身体を切り裂き、一瞬にしてスクラップへと変えた。

天使の乱れる映像で最後に見たものは…『白の死神』だった。

## 第七話

## 第七話

<Another view>

始まりの夜。

一つの影が森で起きた一部始終を見ていた。

影は笑う。

影が見つめるその先には力尽きたようにグッタリしている少年と彼を背負い運ぼうとしている少女。

その周りにはスクラップのように散らばるものがあつた。

それは先ほどまで少年を追い詰め、トドメを刺そうとしていた

天使だったものの残骸。

「だけどまだ……足りない」

誰に言うわけでもなく、そつと呟く影。

「……」

少年を背負っていた少女がふと何かを感じたのか。

闇夜に輝く瞳が影のいる場所へと視線を向ける。

しかし、すでに影は闇夜に消えていた。

「……」

数秒間見つめていたが、少女は再び視線を前へと戻し、歩き出した。

深い、海の底から浮上する感覚。

途絶えていた意識が再び構築され、一筋の光が差す。

次第に暗闇が晴れ、感覚がはつきりしてくる。

「ん……」

重たい瞼をゆっくり持ち上げる。

最初に眼に入ったのは、どこか見覚えのある天井。

ああ、そうだ。

ここは第七寮にある自室のベッド。

既に日が昇っている為、カーテンから漏れる光が眩しい。

スプリングのギシツという音を立てながら奏華はゆっくりと身体を起こす。

妙な気だるさが、身体を支配している。

だるそうにベットから降りて身体を伸ばす。

そしてゆっくりと思ひ出す。

昨日は…確か希沙羅の手伝いをして、夕方に帰って…。

その後は…。

寝起きのせいか、上手く思ひ出せない。

まるで頭に霧がかかっているような気味の悪い気分だ。

コンコンツ

考え込んでいると、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

この時間、希沙羅が寮にいることはない。

「…だれだ？」

ノックの主に戻事を返す前にガチャリとノブが回り、扉が開く。

扉の前に立っていたのは、綺麗な女の子だった。

絹のようにサラサラな銀色の髪。

整った顔立ち、海のように澄んだ藍色の瞳。

学園指定のシャツの上に桜模様をあしらえたエプロン。

そしてその手には調理器具であろう、お玉が握られていた。

「あ、起きたんですね。〃 兄さん〃」

少女の視線は真つ直ぐにこちらへ向けられる。

「にい、さん?」

『兄さん』それは目の前の少女が俺に向けて言った言葉。

その言葉に違和感を覚える前に…。

——ザザツ——

ああ、そうだ。

なんで忘れていたんだろう。

ふいに霧が晴れたように頭がクリアになる感覚。

まるでバラバラになったパズルのピースがカチリとはまるように。

さっきまでの違和感が嘘のように消えていく。

そう、この娘は——

「…桜花（おうか）」

「はい、おはようございます。兄さん」

はにかむように、小さく微笑む目の前の少女。

肩の力が抜け、自然に頬が緩むのが分かる。

大切な妹が、今日からこの寮で暮らすことになったのだから。

## 『八神 桜花』

八神 奏華の妹でRUBICの二年生。

妹といつても、血の繋がりは無い。

桜花は俺と同じく希沙羅に保護された少女で、俺と同じく記憶の欠落が見られる。

そのため、両親すら覚えていないという。

同じ境遇のためか桜花はすぐに俺に懐いた。

そして俺も、いつからか、そんな桜花を守ろうと誓った。

血の繋がりになんて関係なく、桜花は俺にとってかけがえない家族で大切な妹なのだと。

だが桜花は生まれつき身体が弱く、何度も入退院を繰り返していた。

俺がRUBICに行く時も、桜花の強い希望により、この島にある病院に入院することになった。

それが先日ようやく退院したのだ。

今日から正式に、同じクラス、同じ寮で共に過ごす事になる。

「もう、私の初登校日なんですよ？寝坊なんて、ひどいです兄さん  
拗ねたように頬を膨らませる桜花。

いつもは、しっかりしている妹なのだが。

俺に対して、こうして甘えてくる時がある。

「悪かったよ。でも桜花なら友達だつてできると思うぞ？」

そう言つて桜花の頭を優しく撫でる。

手入れが行き届いている、サラサラの髪は触り心地がいい。

兄である俺が言うのもなんだが、桜花なら問題なくクラスに溶け込めると思う。

綺麗な長い銀色の髪に、透き通るような肌。

整った顔立ちも合わせ、かなりの美少女だ。

きつと世の男どもは放つていないだろう。

そのことを伝えると桜花は顔を赤くしてワタワタと手を振る。

「も、もう！またそうやって誤魔化すんですから！」

そうは言っているが頭を撫でられて、桜花も気持ちよさそうだ。

頭を撫でている数分間、大人しく撫でられていた。

そして手を離すとハツとしたように慌てて離れる桜花。

「そ、それより、朝ごはんです！顔を洗つてきてください」

「ああ、すぐに行くよ」

待つていますね、と顔を赤くしたまま、桜花は部屋を出て、一階へと降りていく。さて、待たせるわけにはいかない、俺も行かないと。

早速、廊下に設置されている洗面台に向かう。

蛇口をひねり、冷たい水で顔を洗う。

その後すぐに部屋に戻り、ハンガーにかけておいた制服に袖を通す。

上着を鞆の上に置いておき、支度を済ませた俺は、一階へと降りた。

エントランスから通じる扉を開け、食堂へと入る。

すると、食欲をそそるいい匂いがしてきた。

テーブルには二人分の食事が置かれていた。

御飯に焼き魚、みそ汁にサラダ。

どれもおいしそうだ。

「それでは冷めないうちにいただきますしよう」

洗い物をしていたのか、タオルで手を拭きながら、桜花がテーブルに着く。

俺も同じように席に着き、手を合わせる。

「いただきます！」

互いに、そう言いつて食事を口に運ぶ。

「…美味しい」

今までサンドウィッチくらいしか作らなかつた俺とは違い。

桜花の料理はどれも美味しかった。

それに、せっかく妹が作ってくれたのだ。

気の利いた労いの言葉を掛けるべきではないだろうか。

「…むう」

そう考えてみるが、女心も分かっていない俺に（↑気にしている）

気の利いたセリフなんて思いつくはずもなく。

「ふふつ、無理に褒めなくても、兄さんが美味しそうに食べてくれるだけで私は嬉しいで

すよ」

と微笑んでくれた。

どうやら俺の考えていることはお見通しだったようだ。

うん、無理なものは諦めるか。

「どれも、すごく美味しいよ」

「はいー！」

結局シンプルな言葉でしか言えなかつたが桜花は喜んでいた。

その後はテレビから流れるニュースや学園での他愛もない会話をしながら、

穏やかに食事は進んでいった。

〈学園通学路〉

朝食を食べた後、学園に続く通学路を二人歩く。

時間も余裕があるので桜花のペースに合わせ、ゆつくりとした足取りで向かう。

その間、俺は少し考えていた。

今朝起きてから感じる違和感についてだ。

桜花が部屋に来た直後までは、何か違和感の様なものがあつた。

何か大切なことを忘れているような。

そんな不安が胸に広がる。

「あの、大丈夫ですか、兄さん。今朝からずっと上の空ですが」

考え込んで黙っている俺を不思議に思つたのか。

桜花がこちらの顔を覗き込む。

「え…と、な、何でもないよ」

藍色の瞳に見つめられ一瞬言葉に躊躇してしまう。

それが良くなかった。

桜花は訝しげに、じつ…と見つめる。

えっと、なんて言えばいいんだろう？

「私には言えない事…ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。なんていうか、自分でもちゃんとわかってないっていうか。…悪い、上手く伝えることができないんだ」

自分ですらこの違和感の正体がわかっていない。

そんな今の状況を桜花に説明なんてできるはずもなく、ただ謝るしかできない。

「いえ、別に謝って欲しいわけでは…ただ、少し合わないうちに兄さんも妹に隠し事する人になってしまわれたんですね…くすん」

ヨヨヨと、ポケットから取り出した、ハンカチを目に当てて、悲しむ桜花。

これは…冗談半分。心配半分だろうな。

「えっと…」

「…なんて、ちよつとワガママな妹でしたね。すみません兄さん。」

…ですが忘れないください、兄さんだけの身体ではないんですから」

俺が困った顔をしていると、不承不承だが桜花の方から折れてくれた。

俺自身、今の感覚が何なのかよく分かっていない。

そんな今の状態を話しても、ただ桜花を心配させるだけになってしまう。

今はまだ、不要な発言は控えた方がいいだろう。

「ごめんな。桜花に心配はかけないよう。気を付けるよ。

ほら、早く行かないと遅刻するぞ」

桜花の頭をポツポツと軽く叩き、走り出す。

「あ、待ってください兄さん！」

先に行った俺を追いかけないように桜花も小走りになつて走る。

少々強引だったかもしれないが、今はこうした方がいいだろう。

「……ふっ」

奏華の後ろを追いかけながら、微かに笑う桜花。

そんな妹の小さな笑う声は奏華の耳に届くことはなかった。

〈教室〉

朝っぱらからランニングで二人校門を走り抜けたせいか。

教室に着くまでに周りからの視線がやけに多かった。

なんだか、いつもより、ヒソヒソ声が多かった気がする。

階段を上がり、桜花と共に教室へと入る。

教室にいた琥珀が読んでいた雑誌から目を離し、俺たちに視線を向ける。

「おう、奏華。おはよ……おおう！」

バターンツ!

琥珀が椅子ごと後ろに倒れる。

…頭からいったな。大丈夫か?

少しの悶絶をしたのち、すぐに起き上がる琥珀。

何やら慌てた様子でこつちに来た。

「そ、そそそ奏華くん!誰ですかその隣の美少女は?!」

俺の方を掴んだまま、琥珀の視線は隣にいる桜花へ向けられている。

いや、琥珀だけではない、俺たちに視線を向けているのはクラスメイト達も同じだった。

「あーなるほど」

その反応を見て、俺は納得した。

校門から感じた視線はやっぱり…

視線を隣に向けると、その張本人である桜花は「?」と、頭にハテナマークを浮かべている。

「(本人は自覚なし…か)」

奏華の想像通り、校門を通った時も、教室までの道のりで受けた視線は、彼の隣、可憐な美少女へと向けられていたのだ。

そして彼らは同時に思っただろう。

『(この美少女との関係は!!)(!!)』

そんな周りの視線を居心地悪そうに感じた俺は迅速に誤解を解くために先手を打つ。

「妹だ」

「いも…うと?」

復唱するように繰り返す琥珀に「ああ」と頷く。

視線を桜花に向け、アイコンタクトをする。

桜花もそれに気づいたようで、スカートの手端をつまみ、淑女の様にお辞儀をする。

「兄さんの妹で八神桜花といます。よろしくお願いします」

お辞儀さえも華やかに見える。

八神奏華の妹、その言葉を理解したクラスメイトは一斉にして驚く。

「「い、妹だつてー?!?!」」

俺と桜花と見比べて周囲にどよめきが起こる。

「まつじかよ、あんな綺麗な子が!?!」

「髪も肌も綺麗…」

「お兄様と呼ばせてください!」

あるものは見惚れ、あるものは感嘆の息を吐く。

この様子だとすぐに桜花の事は広まるだろうな。

つてか、おい誰だ！いきなり兄呼ばわりしたやつは！

「桜花こつち」

「…あつ」

とはいえ、いつまでも教室の入り口に立っている訳にはいかない。

桜花の手を引き、机の場所へと案内する。

桜花の席は俺の席の右隣になっているようだ。

桜花が座ると、クラスメイトたちがドツと押し寄せてくる。さながら荒波のようだ。転校生ということに加え、美少女がやってきたのだ、気になるのも仕方がないか。

彼女彼らは、桜花の周りに集まり、質問を始める。

なんでこのタイムミングに来たのか。

魔法知識はどんなものか。

中には実力について聞いてくる者もいたが

桜花本人は嫌な顔ひとつせず、ひとつひとつ答え、対処していく。

この様子なら、すぐにクラスメイト達と打ち解けるだろう。

「すごい人気だな、桜花ちゃん」

いつの間にか、そばに来ていた琥珀に話しかけられる。

桜花ちゃんって…お前。

「お前と同じ苗字なんだから区別しておいた方がいいだろ。これは休み時間まで続くかもな。お兄様」

「…ふあゝゝつ」

色々ツツコミたいことはあるが、今は眠い。

その衝動に耐えることなく、俺は腕を枕にして寝ることに…。

「うおい！無視して寝るなって！」

このまま無視したいのは山々だが、そうしたら、こいつの場合、もつと騒いだりして眠れなくなるだろうな。

睡眠は諦めて身体を起こし、さっきの発言に返事を返す。

「ん、お前に兄呼ばれされると寒気がやばいな」

「もうちよつと言葉とか選んでくれませんかねえ！奏華さん!!」

「桜花はしつかりしてるからな。心配ないだろう」

そんな俺の言葉を聞いて、琥珀は苦笑いを浮かべる。

「しつかし、なんでこのタイミングで登校したんだ？」

「ああ、昔から身体が弱くてな。入院のせいでまともに通えなかったんだ」

この学園では実技、座学、出席を大事にしている。

桜花は俺の様に魔法が使えないではないし、魔力量も技術もそれなりに培っている。ただ、身体が弱いため出席日数が足りなかった。その為、このランクのクラス入りになつたのだ」と琥珀へ簡易的に説明する。

「…そんな重いのか？」

先ほどまでのふざけた様子はなりを潜め、真面目な顔になる琥珀。

こういつた切り替えの良さは琥珀の長所なんだろう。

「そこまで重いわけじゃないさ。それに退院する位には良くなっているんだ」

「はい、ようやく兄さん達と同じ教室で授業を受けられます」

俺と同じような質問を受けたのだろう、自分の事を律儀に答える桜花。

小さく微笑むその笑顔に少しだけ心が痛んだ。

力のある者だけが上に行くことができるこの学園は桜花にとって苦痛ではないのか、と。

兄への信頼してる、その言葉に何やら感心したように琥珀が頷く。

「そっか、まあ何かあれば言えよ。手伝ってやるからさー！」

親指をグツと立てて、二カツと笑う。

琥珀は基本善人だ。

困っている人がいれば手を伸ばせる。

まるで物語のヒーローのような奴だ。

「ああ、ありがとう」

「…それにしても、こんな可愛い妹がいたなんてな。それに愛されやがる、幸せもんだな」

ツンツンと肘で小突く琥珀。

割と痛いので顔をしかめるが、桜花のいる日常が幸せなのは、あながち間違っていないので

「……（ドスツッ）」

仕方なく、肘で勘弁した。

「脇腹がもの凄くいつてえ!」

悶絶する琥珀を放置。机にうつぶせになって眠る体勢をとる。

瞼を閉じ、視界が暗くなる。

その時、一瞬だけ浮かぶ情景。

桜の木だ。

「（…また、これか）」

眼を閉じるたびに映る桜の木。

今朝からこの調子だ。

まるで瞼の裏に焼き付いたかのように、忘れることを許さないように消えることのない映像。

「(…一体なんなんだ)」

俺自身、桜の木なんて写真でしか見たことがない。

春に咲き、夏になる頃には散っている。

知っているといてもその程度。

そもそも、この島に桜の木なんて存在していない。

元より、異世界からの漂流島。

この世界にあつた元々の植物がここで育つことはない。

本土のいた頃も見er機会はなかった。

周りはコンクリートの壁ばかりで、植物なんて観葉植物ぐらいだった。

だからこそ、俺には分からなかった。

「(もしかしたらこれも記憶の鍵なのか?)」

そんな考えも一瞬。寝不足の頭ではそれ以上の考えは浮かばなかった。

近くでクラスメイトと談笑する桜花の声を聞いているうちに眠りへと…。

「あ、そう言えは奏華。『狂い桜』って知ってるか?」

「…なんだって?」

琥珀の言った『桜』というキーワードが気になり、眠りを中断。眼を開けて琥珀に視線を向ける。

さつきまで悶絶していたはずだが、ケロッとしている。思つた以上にタフな奴だ。

「ああ、最近もっぱら噂になつているやつだな」

「……」

噂…それは外部からの情報が一切取ることができないこの学園生徒が娯楽として楽しんでいるものの一つだ。

根も葉もないデタラメな噂が大半を占めているが、中には本当にあつたものも存在している。

それは希沙羅の手伝いをしている関係上、そう言つたものが嘘か本当か、ある程度見てきたからだ。

その結果、流れた噂を調査し、修正する事が俺の主な仕事になつていた。

その為、事前にトラブルを防げるよう変わった噂を聞いて集めるようにしている。

集めた後は希沙羅へ報告、出来るならその噂の出所も見付け、解決するようにしている。

その活動自体は非公認だから希沙羅以外、知らない為、あまり大きな行動はとれない

が。

その為、俺はある程度、『噂』に対して、反応することがある。

だが今回はそれだけではない。

桜の木、今気になってるキーワード、聞かずにはいられない。

噂という言葉に俺が反応するのはいつもの事なので、琥珀は大して驚かず、話をつづけた。

「ああ『狂い桜』ってのは——」

……………

琥珀の話によると『狂い桜』というのは、今この学園で流行っている、都市伝説みたいなもの一つらしい。

内容としては、春夏秋冬枯れることなく咲き続ける不思議な桜の木で

夜にしか見ることができない……という話だ。

なんでも触れば魔力の向上がみられるだとか、何でも願いが叶うだとか

はたまた見ると呪われて一週間以内に死んでしまう……だとか。

どれも一貫性が無く、バラバラでいかにも適当に作られた話のように思えた。

だが、嘘にしろ、真実にしろ、何人かの生徒が興味本位で夜、森に入って探しているらしい。

「でもまあ、今んとこ信憑性の無い、噂程度なんだけどな」

琥珀の話に耳を傾けながら、携帯を取り出し、一通のメールを打つ。

それは希沙羅宛に送るために先ほどの噂の内容をまとめたものだ。

実際に学生が森に行っているなら希沙羅にすぐ報告した方がいいと判断した。

「まあでも噂にしる本当にしる、この話が流れているなら今日あたり教師たちも動くかもな」

冗談交じりに言う琥珀。

その言葉に若干の不安がよぎる。

「(学園側も森の強化をすぐに行えるわけじゃない。もしかしたら今日にでも…)」

メール送付を確認しながら奏華は今夜起きるであろう可能性を考えた。

## 第八話

<トレーニンングルーム>

二時限目の授業は実技。

場所は校舎の地下にあるトレーニンングルームで行われる。

基本的に内容は個人の自由。

他の連中は魔法の練度上げや持続時間の向上、対象物を狙う練習。

中には模擬戦をする者もいる。

それに対し、八神奏華は現在、隅の方で練習中。

やっているのは魔法発動における基礎になる。

といっても、やっていることは魔力の循環をイメージしたりするくらいだ。

魔法を発動できない奏華は実技でやれるのはこれくらいしかない。

もつといえは奏華は実技の授業でこれ以外をやったことがない。

「わー、桜花さんすごくいい！」

一人練習する奏華の近くで賞賛の声上がる。

桜花が魔法を放ち、的を連続で当てているようだ。

その後、桜花はクラスの男女から引っぱりだこ。

その見た目や性格も合わさり、直ぐに人気者になった。

桜花は俺と違い、十分な魔力があり、魔法も使える。

兄としては妹が同じ境遇にならずに安心しているが

逆に兄としての立場が無い気がして悲しいような。

いや、よくない方に考えるのはよそう。

マイナスな考えを振り払い、再び魔法の基礎練習を始める。

「やあ、成果はどうだい？」

と、すぐ近くに誰か来ていた。

その方向へ視線を向ける。

くせつ毛のついたボサボサの髪に分厚いメガネ。

常に白衣を羽織っている奇抜な服装。

クラス担任の柳先生だった。

その手にはバインダーが持たれている。

おそらく生徒の状況を聞いて回っているのだろう。

「…見ての通りです」

その質問に対し、肩をすくめる。

この学園に入ってから何度もこの授業を行っているが、いまだ魔法を使えた試しがない。

その為、成績は常に下位。

希沙羅の面目のためにと初めは頑張っていたが成果は未だ実らない。

そんな奏華に対し、彼は興味深そうに眺める。

「…君は常人より魔力量が多いが魔力回路が存在せず、魔法を使うことができないんだったね。僕も魔法については色々調べているけど、君のようなケースは初めて見る。」

先ほどまでの軽口は変わらないが、その表情が一瞬真剣な顔になる。

その別人のような変わりように少し驚く。

「単に宝も持ち腐れか、もしくはそれを補うだけの別の力があつたりして…ね」

「…っ」

別の力…そう言われた時、全てを見透かされているような、底知れぬ寒気を感じた。背中に嫌な汗が伝う。

彼の発言にどう返せばいいのか上手く思いつかない。

「…なーんちゃって！先生そういう話とか結構好きなんだよ」

さつきまでの表情から一転、おちやらけた様に笑う柳先生。

そのいきなりの変化に面食らい、驚く。

こちらが発言するより先に柳先生は踵を返す。

「それじゃあ、練習頑張つてね」

手をヒラヒラとさせ、最後にそう言い残して、柳先生は他の生徒のいる場所へ行つた。

「頑張つてね……か」

さつきは急にあんなこと言われ、動揺したが、冷静に考えてみれば、

この眼について知っているのは希沙羅だけ、彼が知っているはずもない。

それに知られれば、学園は大騒ぎだろう。

それだけの代物なのだ……この眼は。

俺は雑念を振り払うように練習を再開することにした。

しかし、いつも通り、何の変化も起きなかった。

---

「おーい、奏華！模擬戦やろーぜ」

授業も残り数十分というところで琥珀から声をかけられる。

「……お前なあ、なんでよりによつて魔法の模擬戦で魔法が使えない俺を誘うんだよ」

「いいだろ別に。すぐに終わるんだし。他の奴とバトつてるより、奏華とバトつた方が

面白いしな！」

琥珀は実技になると、こうして勝負を挑んで来る。

最初に誘われた頃から断っていたんだが。

ある時、俺が挑発に乗ったのがまずかった。

引つ込みがつかず、そのまま戦うことになった。

その時の結果は…まあこれからわかる。

「お、柏木と八神の対決か」

「あの人たち、いつもやってるわね」

周りのクラスメイトも、もはや慣例行事のように

呆れ半分、好奇心半分といったところ。

「よし、そろそろやるかあ」

琥珀は身体を動かしながら準備態勢に入る。

いつもの事だけど俺、やるとは一言も言っていないんだけどなあ。

そんな二人の様子を見ていた桜花は心配そうにする。

「あの、兄さんと柏木さんは一体何をするつもりなんですか？」

この状況を知らない桜花にクラスメイトの一人が説明する。

「ああ、あの二人…というか柏木が勝手に始めるんだけど。授業終わり数分前に、ああ

やって戦うのよ。でも八神くんって魔法が使えないじゃない？ 私たちも最初は危ないって思ってたんだけど…」

話していた女生徒に続くように、もう一人の女生徒代わりに説明を加える。

「まあ実際に見ていれば分かるわよ。それに先生もいるんだし。危ないことはないわ」  
若干苦笑いする女生徒。

確かに、柳教師も二人には気付いているようだが、止める様子はない。

桜花は不安の色を含めた目で奏華へ視線を向ける。

模擬戦は今にも始まろうとしていた。

「うっしー！ そんじゃ始めるか！ 奏華ー！」

「…なあ、本当にするのか？」

身体を動かしながら、準備を整えている琥珀に対し、俺はあまり乗り気ではない。

「安心しろ、もちろん手加減なしの全力でやるさー！」

「おい！ 普通逆じゃないのかっ！」

全力…といっているが、ある程度は手加減をしてくれると思うが

それでも当たれば痛いことに変わりはない。

できることならこの模擬戦自体拒否したい。

そんなことを思っている間に琥珀の魔力回路に魔力が通るのを感じた。

「そうー…ここで奏華を華麗に倒し、女子に俺の強さをアピールして好感度を！」  
「おい、人を何だと思ってる！」

あと、俺を倒しても大して評価は上がらないと思うぞ。

そんな俺の言葉を無視して、琥珀は掌に魔力の塊を練り始める。

魔力はすぐに一つの塊のなつて、俺へと放たれる。

希沙羅が使ったような魔力による遠距離攻撃だ。

「うおおおおりゃああああああああつ！」

脂汗をかきながら、魔力を放つ。

俺は横へ飛ぶために姿勢を低くする。

その時、琥珀の口元がニヤッと笑ったのを見逃さなかった。

「…ッ!？」

一直線に放たれた魔力は弾け、いくつもの球体となり、俺を囲むように襲い掛かる。

「避けきれないっ！」

そう判断した俺は無駄だと分かっても諦めきれず。

無駄なジャンプを試みた。

「…え？」

クラス全員が啞然とする。

琥珀の放った攻撃は間違いなく、命中するものと思われた。

四方から襲い掛かる弾に人間のジャンプ力ではとてもじゃないが避けきれない。

だが、結果的に奏華は避けることができた。

ただその場をジャンプしただけで、彼は弾の当たる範囲から逃げることはできたのだ。

それに驚いたのは他でもない奏華自身だった。

「（これは魔法…なのか？）」

結果的に弾は奏華に当たらなかった。

そのまま何事もなく着地に成功。

そして…

バタンツ

奏華が着地したと同時に誰かの倒れる音が聞こえた。

「…」

琥珀のいる場所へ視線を向ける。

そこには

「ぐっ…無念…だ」

うつ伏せに倒れ伏していた、琥珀の姿があった。

あー、うん、これは…

「勝ったー!」

両手を天高く挙げ、勝利の宣言する。

「おおおおお!」

観戦していた者たちによる怒号はトレーニングルームにこだました。

いわく、『柏木 琥珀』は能力だけなら上位クラスに入れるだけの實力を持っている。

しかし、その魔力量は一般の数値よりかなり少ない。

今回倒れたのも、魔力弾を撃つたことによる魔力切れだ。

数発打っただけでこの有様である。

とてもじゃないが上位クラスに入れることができず、底辺クラスへと入れられたのだ。

「そ、そうだったんですね…」

その話を聞いた桜花は驚き半分、どこかで聞いたような話だと思った。

「まあ、天は二物を与えないって言うか、ホント似たもの同士よね。あの二人」

常人以上の魔力を持つが魔法を全く使えない奏華。

常人以上の魔法の才能を秘めていながら、魔力が全くない琥珀。

確かに似ている。

そんな二人が仲良くなるのは道理なのかもしれない。

苦笑する彼女たちの話を聞きながら、桜花はその藍色の瞳で彼を見つめる。琥珀を担ぎ上げ、運んでいる奏華へと。

琥珀を保健室へ運び終わつた後、携帯を確認する。

朝送つた、希沙羅からメールが返つていた。

内容としては、『分かつた。すぐに対処する』とのことだつた。

『それと、お主は勝手に動くなよ』

釘を刺されてしまった。

それと今日は俺にできる仕事が無いらしく、帰つていいそうだ。

午前の部が終了。

お昼休みになつたが、いまだ桜花はクラスメイト達から解放されていない。  
「……ん」

携帯が振動した。

誰かからメールが来た。

差出人は……桜花だつた。

『今日のお昼は一緒に食べられそうにありません。すみません兄さん』

視線を桜花へと向けると、申し訳なさそうな顔をしていた。

俺は大丈夫だよ、と手を上げる。

琥珀はまだ、保健室だったので弁当箱を手に教室を出る。

屋上に行けば、白百合がいるかもしれない。

だが今日は、一人でゆっくり考えたかった。

そう思った俺は、屋上へは行かず、中庭で食べることにした。

<中庭>

流石にまだ肌寒いためか、他の生徒は食堂や教室で食べているのだろう。

屋上ほどではないが、中庭の気はあまりなかった。

俺はちょうどいい木陰を探し、腰を下ろす。

少し肌寒いが、我慢できないほどではない。

木に寄りかかり、桜花の作ってくれたお弁当を食べ始めた。

うん、どれも美味しい。

冷めても美味しく食べられるよう、よく考えられている。

正直、嬉しいと思う。

こんな俺に懐いて、兄と呼んでくれて。

だが、同時にぬぐいきれない違和感の様なものがまとわりついている。

「俺に…妹なんていたのか？」

いや、いるはずだ、そうでなければ桜花は何だというのだ。

幼い頃から一緒にいて、本当の兄妹として過ごしたあの日々が…。

「なんだ…これ…」

思い出そうとしても、霧のかかった様にはつきりと思い出すことができな。

言われることで、ようやく、そう言えばそんなことあったな、と思いつく程度。

本当にそんなことあるのか？

記憶は間違いないと常に言っている。

だが、感情がどこかの現実を受け入れられずにいる。

思えばクラスでの俺も少しおかしかった気がする。

「俺はこんなに明るかったか…」

いや、それだけじゃない。

琥珀とはいつも通りだったと思う。

だが、琥珀 以外のクラス連中との距離が近すぎないか？

「なんだよこれ…これじゃ、まるで…」

まるで全部が書き換えられたような…。

——ザザッ——

「…あれ、なんだったっけ」

何か考えていたと思っただが、上手く思い出せない。

やけに頭がボーッとしている。

それに頭の奥が妙にチリチリする感覚がある。

「…寝るか」

痛む頭を休めるために、考えることを止めた。

そのまま、瞼を閉じ、眠ることにした。

「…ぱいつ、…んぱいつ！」

まどろみの中、誰かが呼ぶ声が聞こえた。

「ん…」

瞼を開けると、そこには心配そうに俺の顔を覗き込む美少女がいた。

「あ、起きました！大丈夫ですか、先輩？」

整った顔立ち。

長く綺麗な髪はストレートに背丈は桜花より、やや低め。

ただこちらは木に寄り掛かっているため少女を見上げる形になっている。服装はこの学園制服、ネクタイの色は青、つまり一年生になる。なるほど、それで先輩か。

「…君は？」

「あーご、ごめんなさい。私ったらつい！」

俺の質問に少女はワタワタと慌てたように離れる。

その瞬間

「…ッ、きゃあッ!？」

少女は一瞬にして視界から消えた。

「…あれ？」

さっきまでいたはずの少女が一瞬にして目の前から消えてしまった。

瞬間移動？

透明人間？

…幻？

「…夢か」

寝起きの奏華は、そう結論付けた。

「あのーすみませーん」

どこか遠慮がちに聞こえてくる少女の声。

「…どこだ？」

声は聞こえど姿は見えず。

キョロキョロと辺りを見回すが、人影もなく

あるのは大きな木と茂みが少々あるくらいで。

「木の上にいまーす。助けてくださーい！」

木の上…？

言われた通り、上を見上げると…黒い塊が宙に浮いていた。

「なんだ、あれ？」

発見した黒い塊はもぞもぞ動いている。

いや、よく見ると黒いのは制服だ。

吊るされた網の中にさっきの少女らしき人が入っている。

網は木に括り付けられそれなりの高さのある木に繋がっている。

「あ、でも上は見なくてください！見えちゃいます！見えちゃつてますから！」

確かに制服のスカートから何かが見えている。

「あ、もう昼休み終わるな。教室に戻らないと」

遅刻は成績に響くからな。

名も知らぬ少女には強く生きてもらおう。

面倒ごとを避けるため、くるりと踵を返し、その場を去ろうとする。

「まさかの興味なしですか!!次に人が来る保証なんてないんです!!まって!まってください、先輩。行かないで!!パンツを見ても構いませんからあ!」

「やめえい!!大きな声で叫ぶな!俺を変態にするつもりか!!」

軽くパニツクになってしているのか、とんでもないことを口走ってきた少女。

流石にこのまま放置するのは、いろんな意味で危ない、俺にあらぬ噂が立つ可能性がある。  
ある。

諦めた奏華は木に登り網を解くために木を登る。

木の枝は思ったよりしつかりしているようで、俺の体重でも折れずに支えることができた。

網は固く、素手ではとてもじゃないが、解くことはできない。

仕方なく、ブーツに仕込んである小型のナイフを取り出した。

それでも時間は掛かったが、何とか外すことができた。

「た、助かりました…ありがとうございます!まず先輩!」

地面に降り立つと同時に、ペタンツと尻餅をつく少女。

服についた葉っぱを手で落としながら、頭を下げる。

「てか、この網って…」

道理で硬いと思ったら、魔物用に設置された捕獲網じゃねえか。

対象物は魔物限定にされており、魔物が通った時のみ作動するはずなんだが…。

「あ、私って生まれつき運が無くて、たぶんそのせいで誤作動が起きたんだと思います」

たはは、と苦笑いする少女。

その言葉を信じるなら、生まれつきの不幸体質ってことか。

「木に寄り掛かっている先輩を見つけてまして、体調でも悪いのかと思って声を掛けさせてもらったんですが」

なるほど、だから目が覚めた時、心配そうにしていたのか。

「でも、結局先輩に迷惑かけちゃいましたね。すみません」

「いや、おかげで俺も起きれたんだ。こっちこそありがとう」

そう言うてから、頭を下げる。

顔を上げると、少女は少し驚いていた。

「いえ、その、予想と違った反応だったので驚いたというか…もつと怒られると思ったので」

確かに、人によつては授業に遅刻した、面倒ごとに巻き込まれた、と言つて迷惑がる奴もいるかもしれない。

だけど、まあ、今回に至つては

「君が起こしてくれなかつたら、寝坊で遅れてたんだし、俺が遅れても自業自得だ。だから君が気にすることじゃないさ」

桜花にいつも言われている。笑顔に気を付けながら笑つて見せる。

だけど、言つたことも正直な気持ちである。

「クスツ…あつすみません。先輩つて優しいんですね。ありがとうございます」  
立ち上がった少女は再び頭を下げた。

「私、『宝条 莉絵（ほうじょう りえ）』つていいいます」

手を差し出し、微笑む、少女―宝条。

「八神 奏華だ」

答えるように手を差し出し、握る。

「八神先輩ですね。ありがとうございます」

名前を聞いて満足したのか笑顔を浮かべる宝条。

「あまりお引き留めするわけにはいきませぬね。それでは先輩、また！」

そう言つて宝条は駆け出して行く。

不幸體質…か。いろんな意味で面白い娘だったな。

時間を見ると今ならギリギリ授業に間に合いー

「Σ(。▽。ノ)ノキヤー——」

ボシュツと捕獲網が発動する音が聞こえた。

「…はあ」

訂正、午後の授業は遅刻することになりそうだ。

## 第九話

〈森—奥〉

深い森の奥。

そこを歩く、一人の影。

木々が夕日の光を遮り、辺りは真っ暗。

暗闇に目が慣れれば、辛うじて輪郭が見えるくらいのものだ。

足元さえ見えないはずだが、影は慣れたようにスルスルと歩く。

目的地に到着したのか影の足が止まる。

「…さあ御飯の時間だ。バケモノはバケモノらしく、本能のままに貪り尽くすと良い」  
そう言つて影は懐から一つの小瓶を取り出す。

小瓶の中にはキラキラと輝く、宝石のような物が入っていた。

それは『結晶』と呼ばれる魔力を固体化したもので、まだ一般には出回っていない。

コレの使い道を分かりやすく言うなら、携帯の充電器のようなものだ。

結晶を手に取り、強く握れば、結晶に込められた魔力の分だけ、魔力を回復することができる。

といつても簡単に作れるものではなく、貴重なものだ。

影はおもむろに小瓶の蓋を開け、貴重なはずの結晶を辺り一面へばら撒いた。

大小さまざまな結晶が地面にちりばめられ、暗闇でキラキラと一層輝く光を放つていった。

すると――

ズズズツ

ズズズズズズズツ

変化はすぐに訪れた。

辺り一面の地面が黒く染まっていく。

いや、それは地面を這うようにして近づいている黒い泥だった。

溢れでる泉の様に現れる、黒い泥。

やがて、泥は地面からはい出るようにして姿を現す。

『『GRRRRRRRRRRROOOOOOOOOOO!!』』

獣のような唸り声を上げて、泥は我先へと結晶に群がる。

泥に飲み込まれた結晶はゆっくりとその形、輝きを失い、消えていった。

この泥こそ、異世界より現れた異種族のひとつ『魔物』。

魔物はわずかな魔力でも嗅ぎ取り、襲いかかってくる。

しかし、影は小瓶を放った位置から動かない。その場にいれば魔物は問答無用に襲い掛かる。

しかし、魔物が影を襲うことはなかった。

いや、影の存在すら気付いていないのかもしれない。

魔力に誘われた魔物は更なる魔力を求め、更なる獲物がいることを察知する。

そして、再び魔物はその輪郭を失い、溶けるように地面へと吸われる。

地面を這いずり、移動を開始する。

美味しそうな餌のいる方角へと……。

### 〈数時間前〉

その日、帰りのホームルームで担任の柳先生から注意事項が話された。

「えーつ、最近『森』に関して変な噂とかあるみたいだけど、今日から一定期間、許可なく立ち入らないように。もし許可なく入ったら、それなりの罰が待っているから、みんなも守るように」

おそらく希沙羅から教師全員に伝えられたのだろう。

各クラスの教師たちから一定期間、森への立ち入りが禁止について話された。

森への警備も厳重になり、簡単に入ることもできないだろう。

「これで噂につられて面白半分で森に行くやつがいなければ良いんだけど……」

その後、滞りなく学園が終わり、俺は桜花と共に街へと繰り出した。

「わあ！凄いです！」

今回向かったのは、最近できたという大きなショッピングモール。

桜花は初めて見るショッピングモールに驚きを隠せないように、

幼い子供の様にはしゃいでいる。

俺も実際に行くのは初めてで、少々緊張していたが、

桜花の反応を見ていたら幾らか落ち着いた。

この島に新しく出来たショッピングモールはその物珍しさからか

いまだ人であふれかえっている。

俺たちは、はぐれないよう気を付けながら、いくつかの店を回った。

桜花にとって目に見るもの全てが新鮮の様ではしゃいでいた。

俺もそんな妹の姿を見てどこか安心していた。

買い物に夢中で、時間が立ち、やがて夕方になっていた。

夕日の佇む商店街を二人並んで歩く。

「買い物に付き合ってくれて、ありがとうございます、兄さん」

買い込んだ袋を持ち上げ、桜花が嬉しそうに笑う。

今の時間は仕事帰り、学園を終えた学生で溢れている。

しかし、もうすぐ外出禁止時間。

この賑やかさも、あと数分経てば、静かになるだろう。

「今日の夕飯、何か食べたい物がありますか？」

「んー、そうだな」

夕飯の希望を話しながら食材を買っていく。

今まで一人だった帰り道。

これからは妹と一緒に帰ることになる。

その事に不思議な幸福感に満たされる。

「(案外、こういうのも悪く無いな)」

そう思いながら、寮へと帰る途中、奇妙な感覚を覚えた。

誰かに見られているような、首のあたりがチクチクする感じ。

とても不快だった。

辺りを見回すが、ここはもう第七寮の近く、人の気配はない。

気のせいかな、そう思い再び歩こうとした時…。

「…ッ!? 兄さん!」

桜花の大きな声に驚き、振り返る。

眼の前にあったのは鋭い牙の生えた大きな口だった。

ガキンッ

鋭い音が辺りに響き渡る。

それは歯同士が噛みあう音だった。

俺は噛みつかれる瞬間、桜花に突き飛ばされ、その一撃から逃れることができたのだ。

『GRRRROOOOOO!』

眼の前にいたのはオオカミだった。

いや、少し違う。

見た目は確かにオオカミだが、その身体は赤黒い泥で覆われており、

とてもじゃないが生きている物には見えなかった。

「…魔物」

自然と口に出る。

異種族の一つである魔物。

人類にとっての敵が目の前に現れたのだ。

桜花の息をのむ声が聞こえる。

怪我は無いようだが、おそらく初めて見る魔物に怯えているのだろう。

「…桜花、俺が時間を稼ぐから寮まで逃げろ！」

「で、でも兄さん…」

「魔物の姿はオオカミだ。二人で走っても追いつかれる。早く！寮まで逃げっ!!」

視線は魔物へ向けたまま、大きな声をあげ、桜花の背中を押す。

魔法の発動には冷静さも必要だ。

今の桜花は目に見えて、混乱している。

この状態では上手く使うことはできないだろう。

「…ッ、は、はいっ！」

良かった、腰は抜けていなかったようだ。

桜花はふらふらと立ち上がると、寮のある方角へと走って行った。

魔物が桜花へ向かって行かないよう注意していたが、奴は追いかけてなかった。

その野獣のような眼光は俺一人へと向けられていた。

「やっぱり、狙いは俺か」

魔物は本能に従い、魔力の匂いでやってくるらしい。

そして俺の魔力はそこらの魔法使いより膨大。

エサとしては十分すぎるほどの御馳走だろう。

ブーツに仕込んだナイフを取り出し、構える。

幸い、魔物は一匹、時間を稼いで逃げるチャンスを窺う。

「……いよっ！」

『GGYAAAAAAAAAAAA!!』

魔物がその大きな口を開く、よっぼど俺が喰いたいのか  
ダラダラと黒い涎を垂らしながら、飛び掛かってくる。

その攻撃をかわしながら、ナイフでその腹部を切り裂く。

『GGYAAAAAAAAAAAA!!』

痛覚はあるのか、悲鳴のような叫び声を上げながら、のたうち回る魔物。

だが腹部の傷もシウシウと音を立てながら塞がっていく。

全くダメージが無いわけではない、と思う。

再びナイフを構え、臨戦態勢をとる。

『GGYAAAAAAAAAAAA!!』

寒気がする程の叫び声をあげ、再び飛び掛かってくる魔物。

俺を引き裂こうとその鋭い爪で攻撃を仕掛ける。

その攻撃を紙一重でかわし、再びナイフを……

ブオンッ

「があっ……！」

魔物の尻尾によって腹部を勢いよく殴られ、地面を転がる。

「い……っう……！」

痛む腹部を抑えながら、何とか立ち上が——

「……ッ——」

右足に鋭い痛みが走り、耐えきれず体勢を崩す。

痛みのある足を見てみると、深い切り傷からドクドクと血が流れていた。

俺が吹き飛ばされる瞬間、魔物の爪によって切り裂かれたのだろう。

痛みなのにたうち回りがなくなる。

俺が動けないことが分かったのか、魔物がチャンスとばかりに、襲い掛かる。

「それなら……!!」

俺は手に持ったナイフを構え、狙いを定める。

魔物は一直線にこちらへ向かっている。

「……フツ!!」

魔物の頭部へ向けて投擲する。

魔物は避けることが出来ず、その頭部に深くナイフが刺さる。

ズブリツという、音が聞こえた。

——が魔物の勢いは止まらない。

ナイフ一本、脳天に当たった程度では魔物は止まらないのか!?  
魔物の牙は俺の喉元を狙っている。

「(まずいっ!)」

命の危険を感じた、死すら感じた。

頭を過るのは：桜花の顔だった。

「(ああ：悲しませちやうな：ごめん)」

最後に浮かんだ言葉は。

一人にしてしまう妹への謝罪だった。

時が止まった様に魔物の牙がゆっくりと近づいてくる。

せめて、少しでも桜花が遠くへ逃げられるよう、拳を強く握る。

——その瞬間

俺と魔物の間に一つの黒い壁ができた。

いや、それは壁ではなかった。

「(黒い：剣?)」

それは陽炎の様にゆらゆらと揺れ、実体のないように見えた。

黒い剣はその刀身の半分を俺から延びる影に埋まっていた。

勢いを殺さず、鋭い牙を構えたまま、黒い剣に衝突した魔物は弾き飛ばされた。

「……………」

感情は未だ戸惑っている。

だが、本能は理解していた。

これは掴むことができる。

奴を…魔物を斬ることができる武器なのだ。

「…ツ…はあああああつ!!」

考えたのは一瞬、両手で柄を掴み、一気に引き抜く。

陽炎の剣は思っていたより、あっさり抜ける。

その勢いのまま左足を軸に身体をひねり、迫りくる魔物へと斬りつける。

『GRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR!!』

剣によってその身体を真つ二つにされた魔物は

唸り声をあげ、重い音を立てながらゆっくりと倒れる。

崩れ落ちたその身体は再生することなく、ドロドロの液体となって地面に広がる。

「か、勝った…のか」

気が抜けたのか、失血によるものか、ふらつく身体を剣で支えなんとか態勢を整える。

だけど、いくら寮が森に近いからと言って、こんな所に魔物が現れるなんて。

それに…無我夢中で使っていたが、この剣はいつたい？

「とにかく、早く寮に戻らない…と」

一体、いつの間にそこにいたのだろう。

夕暮れの道、俺を取り囲むようにして、森から見える野獣の眼光。

まだ終わってなどいなかったのだ。

『GGYAAAAA!!』

一体、二体、三体四体、その数はどんどん増えていく。

「あ、はは、ここはパーティー会場か何かかよ」

勿論メインの料理は俺だろう。

周りには無数の魔物、足を負傷している俺では逃げることはできない。

さつきまで使っていたナイフも魔物の体液を浴びて使い物にならない。

魔眼を使おうにも魔物は魔法を使わない。

あるのは正体不明の剣が一本。

状況は圧倒的に不利、だろうな。

この状況に俺は力なく笑う。

「だけどな。簡単に飯にありつけるなんて思うなよ」

痛む右足を引きずりながら、剣を構え、魔物たちへ向ける。

怪我をした右足では逃げることも叶わないだろう。

それでも少しでも桜花の逃げる時間を稼いで見せる。

「そうすれば、きつと希沙羅が何とかしてくれる」

希沙羅は怒るだろうか、それとも悲しんでくれるだろうか。

希沙羅の性格なら、両方かな。

魔物達が少しずつ距離を詰める。

あと少しで第二ラウンドが始まる。

その刹那——何かが碎ける音がした

「ふう、やっと壊せました」

凜とした声が辺りに響く。

どこか聞きなれた声。

しかし、記憶に新しい彼女の雰囲気と少し違う。

「…だから言ったじゃありませんか、貴方一人の身体じゃないんですよ？」

呆れており、どこか叱るような声。

と、同時に俺の立っている場所から広がるように影が伸びる。

魔物たちの足元へと広がった影、その中からいくつもの杭が飛び出す。

「…影遊び」

『『『GYAAAAA!!!』』』

杭は魔物の皮膚を割き、貫通させる。

魔物の断末魔が響き渡る。

魔物は抵抗するが、無数の杭によって宙に吊るされたままでは大して身動きが出来ず、やがてその動きを止めた。

無数の杭からは魔物の液体がしたり落ちる。

俺の周りは直ぐに魔物の黒い泥でいっぱいになった。

巻き散らされる泥の先に一人の少女が立っていた。

「生きていますか？って聞くまでもないですね」

さっきまで命の危険を感じていた俺だが、眼の前の光景に啞然とした。

学園指定の黒の制服。

風に流れる銀色の美しい髪。

闇夜に照らされる、輝くような藍色の瞳。

眼の前にいるのは間違いなく、寮まで逃がしたはずの妹『八神 桜花』だった。

## 第十話

先ほどまでいた多くの魔物たちは全て息絶え、泥が広がるばかり。

辺りは妙な静けさが支配していた。

「おう……か……？」

「はい、どうしましたか。兄さん？」

桜花の見た目は変わっていない。

何一つ、おかしいところはない。

だが、先ほどまでの言動に違和感を覚える。

——ドクンッ

まるで初めてその姿を見たように。

——ドクンッ

その声に、その姿に、その存在に。

——ドクンッ

綻びはすぐに広がる。

頭の中で何かにヒビが入った。

—— ザザザッ

ノイズがひどい、頭が痛い。

テレビの砂嵐の様に頭の中がグチャグチャになりそうだ。

「あ……う……」

上手く言葉が出てこない。

出てくる言葉はノイズによってかき消され、その意味を失う。

「……」

桜花は何も言わない。

苦しむ俺を見ても何も反応を示さない。

あるいは何かを待っているのか。

その藍色の瞳にはどこか期待が込められているように感じられた。

「……う……ぐ……お……まえ……」

まるでその先を言うのを妨害するように、ノイズは更に激しく痛む。

「お前は……だ……れだ……?」

お前は誰だ?

そう言った瞬間、自分の中で何か音が立てて割れるのが分かった。

ノイズが止み、痛みも徐々に引いていく。

それと同時に力が抜け、膝をつく。

すると、辺りに響く、パチパチと手を叩く音。

頭を押さえながら視線を向けると目の前の少女―桜花が手を叩いていた。

「おめでとうございませす。八神奏華さん」

妙に頭がすつきりしている。

そして嫌でも分かる。

分かってしまった、目の前の少女は『妹などではない』と。

「…お前は誰だ」

「…思っていたより元気ですね。安心しました」

「答えろ!!お前は誰だ!!」

手に持った黒い剣を目の前の少女に突きつける。

思えば朝、俺がおかしくなったのは、この少女にあつてからだ。

方法は分からないが、あの時、この少女が自分の事を妹と言ったのがきつかけだったはず。

何らかの暗示か、催眠術か、理屈は分からない。

だが少女は、『何か』を使って、自分の…八神奏華の妹だと、俺を含めた周囲の人間に信じ込ませた。

もし眼の前の存在がそれを行ったのなら、それは脅威でしかない。

剣を突き付けられても、目の前の少女は怯えひとつ見せない。

「…私（妹）に剣を向けない方がいいですよ」

「どういう…なっ…」

少女がパチンツと指を鳴らした途端。

手に持っていた影の剣がゆらゆらと揺らめき、その輪郭を失い始めた。

柄の感触も次第になくなっていき、最後は空気に溶けるよう消えてしまった。

「サービスはここまでです」

「（まさか…さっきの影の剣…こいつの力？）」

「ここで話すのもなんですから、まずは寮へ戻りましょう。肩貸しましょうか？」

俺はその返答に首を横に振った。

桜花は肩をすくめると寮の方角へと歩き出した。

負傷しているとはいえ、俺に対し、無防備な背中を見せることに面食らう。

警戒を解くつもりはないが、向こうが話すと云っているのだ。

俺は痛む足を気遣いながら、大人しくついていくことにした。

<第七学生寮>

俺が足に怪我している事もあり、少女の言う話し合いは俺の部屋で行われることになった。

俺はベッドに座り、桜花は椅子に座る。

「そうですね。まず、昨日の夜の出来事は覚えていますか？」

朝とは違い、どこか雰囲気が変わった桜花が質問する。

昨日の夜…考えてみるが特に思い出せない。

「希沙羅の手伝いをして、寮に帰って寝た…と思う」

桜花はそれを聞いて溜息一つ。

「…そうですか。では単刀直入に言います。貴方は昨日、天使の襲撃に合いました」

「…ッ!？」

天使の…襲撃!？」

「まて、天使の襲撃ってこの島で…なのか？」

「はい」

「俺が…襲撃されたのか？」

「貴方も善戦したようですが、そこは人間と天使の差。貴方は重傷を負いました」

桜花の言っていることはにはわかには信じられないことだった。

RUBICに天使が来れる訳がない。

この島には結界が張られている。

簡単に入る事なんて…。

「申し訳ありませんが、そこを考えるのは後にしてください。今重要なのは貴方が天使の襲撃に合い、負傷した。納得はしなくてもいいですが、ここまでいいですか？」

有無を言わさない桜花に俺は天使侵入の思考を止めて、しぶしぶ領いた。

「そして瀕死の貴方を私が助けた…みたいです」

助けた…みたい？

桜花の言った、その言葉に少し違和感を覚える。

「…みたいです？」

「はい、私は事実として知っているだけです。貴方を助けたのは『前の私』」

「さてさて！なんだ前の私って」

天使だとか、前の私だとか、予想外の言葉ばかりで頭が混乱してきた。

「まあ、隠しても意味が無いので正直に言いますが、今の私、記憶がひどく曖昧なんです」

「は…はあ!？」

記憶が曖昧？

それってどういう…。

「順を追って説明します。重症だった貴方は私に触れたことで、コンタクトを取ること

ができました。そして貴方は一つの願望を持った。私はそれを叶えるために貴方と仮契約を果たしました」

「俺の…願ひ？」

「ええ、貴方の“生きたい”という願ひの為、私の魂と貴方の魂を接続しました。その影響のせいには分かりませんが、私は記憶の大半を失いつつ貴方の身体に入りました」

「ちよ、ちよつと待て！触れた？魂の接続？それに俺の身体に入った？」

「はい、触れた、というのは桜の木です。私はそこで眠っていましたから」

「桜の木って…」

脳裏に浮かぶのはあの噂だった。

『狂い桜って知ってるか？』

「(あの噂の木の事か?)」

「次に今貴方の中には二つの魂が入っています。あなた自身の魂と、私の魂です。と言つても今私は外に出ているわけですが」

「……」

正直、話がぶつ飛んでいて付いていけない。

だが、彼女の話に不思議と納得している自分がある。

桜花は視線で話を続けても？と訴える。

俺は頷き、再び話を聞く。

「私が記憶を失う直前、前の私は何やら細工をしたみたいですよ。その一つが今の私のポジション」

「八神 奏華の妹…か？」

俺の質問に桜花はゆっくりと頷く。

「私が知っているのは私に与えられた役割、それと目的です」

「役割と目的？」

「はい、まず役割は貴方の回復です。貴方は天使との戦いで重傷を負いました。はつきり言つて死に掛けでした」

死に掛け…という言葉に背筋に寒気が走る。

無意識に自分の身体を動かしてみるのが、先ほどの怪我以外、特に痛みはない。

とても重傷には見えなかった。

しかし、俺の考えを読むかのように、桜花はその疑問に対し、答える。

「それは当然です。今の貴方は私の魂によつて一時的に健康になつていらっしゃるんですから」

桜花は言つた。

俺は天使との戦場で肉体は勿論、魂に至るまでボロボロになつた。

それは、そう簡単に修復するものではないらしい。

しかし、肉体と魂は均衡を保っているらしく。

ボロボロの俺の魂に変わり、桜花の健康で強い魂が入ることで傷ついた肉体もそれに伴い修復することができるらしい。

だが、その修復は一時的な物らしく、例えば桜花の魂がなくなれば

弱った俺の魂に合わせ、肉体は再び、ボロボロとなり、修復が不可能となる。

ある程度の時間が立てば、魂は修復されるようだ。

「以上が、私の知る限りの情報です。何か質問はありますか？」

「質問……ねえ」

正直、桜花の言っている事はどれも予想の斜め上すぎて

何を言っているのか正直分かっていない。

ただ、今の話を聞いて思ったことがある。

「じゃあ、まさか授業中のあの跳躍力は……」

「ええ、アレは貴方の身体が強化されたことで出来たものです、昨日までの身体では絶対に無理でしたよ？」

俺自身、あの時は無意識に魔眼でも使ってしまったのかと焦ってたが、そう言うことだったのか。

「……お前は俺の過去、身辺について知っていたよな。あれはどういったカラクリだ？」

桜花の話の話を信じるなら、彼女が目覚めてから一日も経っていない。

それなのに彼女は俺の過去についてある程度知っているようだった。

俺の質問に対し、桜花は、「ああそのことですか」と言う。

「私の魂が貴方の身体に入った時、記憶も共有したんですよ。だから朝の時点で貴方について、ある程度は把握していました」

「…は？」

「ああ、大丈夫ですよ。記憶を見たのは共有した時なので今は見えません」

「…それ、どこまで見たんだ？」

「…ポツ」

「ポツ、じゃねえよ!!なに人のプライベート暴いてんだよ!!」

「大丈夫ですよ、眼とか知りません。眼とか。あと学園長に対するセクハラまがいのラッキースケベとか」

「結構、知ってんじゃない!!」

「冗談はさておき、他に質問はありますか？」

「スルー!?!冗談って言ったからって、なかったことになると思うなよ!!」

とても疲れた。

無駄に体力を使ってしまった。

だが、分かった事もある。

どうやらこの少女は俺の秘密を含め知られているらしい。

「あの影の剣もお前が？」

「ええ、それが私の持つている能力。簡単に言うと言語と影を操る能力ですかね？まあそれなりに魔力消費は伴いますが」

なるほど、あの時の剣は俺が戦えるよう桜花が“貸した”わけか。

それが死神の力と言われたらそれ以上の回答は期待できないだろう。

「じゃあ、最後の質問だ」

「ええ、どうぞ」

「お前は…誰だ」

「妹ですよ、貴方の」

「誤魔化すな。それくらいは知っているんだろ？」

本気ではなかったのだろう、桜花はそれ以上茶化すことなく、視線をこちらへ向けた。藍色の瞳が真つ直ぐ俺をとらえる。

「人間か…それとも…」

「ええ、貴方の予想通り、私は人間ではありません」

あつさり、言い放つ桜花に、思わず面食らう。

この少女の事だ、また煙に巻かれると思ったからだ。

「…やっぱり、そうなのか」

魔法にしては人間が使っている魔法とは根本的に違っている。

人の記憶や感情に干渉する魔法なんて聞いたことが無かったからだ。

あくまで魔法とは第一世代と第二世代この二つしかない。

桜花の干渉した力はこのどちらにもかみ合わない。

「もう一度聞くぞ…お前は…誰だ？」

「私は…『死神』です」

「な…に…」

夜も更ける魔法使い育成機関『RUBIC』。

その学生たちが住む第七寮で今、時が動き出す。

## 第十一話

「しに…がみ…？」

「はい、貴方たち人類からはそう呼ばれています」

動揺する俺に対し、桜花は表情一つ変えていない。

眼の前の少女が…しにがみ…死神だって？

クラクラする頭を押さえ、渴いた笑いが出る。

「は、ははは、冗談…だろ？」

悪い冗談…そう思う反面、頭のどこかでは桜花の言葉が嘘ではないと思っていた。

自分を含めた周囲の人間への記憶の改変。

先ほどの魔物を仕留めた影の杭。

属性武装を使った第二世代魔法は自然界のエレメントを元に使用できる。

彼女の使った影は火、水、雷、地、風、どれにも当てはまるようには思えない。

あり得ない、と口で言うのは簡単だ。

だけど…それは…

「仮に…仮にだ。お前の話を信じるとして、死神は…滅んでいないのか？」

死神は既に滅んだ、そう何度も聞いていた。

授業でも聞いたし、周りの人達も、みんなそう言っていた。

異種族との戦いの中、死神は人類が初めて勝ち取った勝利だと。

「…」

奏華の言葉を聞いても桜花は顔色一つ変えない。

動揺する奏華をバカにするでもなく、憐れむでもなく。

深い藍色の瞳で目の前の少年を見据える。

殺気の無い瞳…だが奏華に言い知れぬ、不安を感じた。

「貴方たちの世界でニュースや新聞の報道で絶滅危惧種が別の島で生きていた…なんて

ありませんでしたか？」

「…この島のこことか？」

俺の質問に対し、眼の前の少女は静かにうなずいた。

「私あの木の中でずっと…ずっと眠っていました。それ以外の事は…なにも」

足を椅子に乗せ、腕を回す。それによって、サラサラとした銀の髪が流れる。

「ーッ!？」

——ザザッ

頭に走るノイズ、チカチカと映る情景。

月明りの中、白の髪、黒の斬撃、散らばる破片。  
あれは…

「なにか、思い出しましたか？」

頭を抑える俺を見て桜花が身を乗り出す。

「…いや、あまり」

喉まで出かかっている何らかの記憶。

だがそれは途中で止まり、霧の様に霧散していった。

後に残るのは上手く言い表せない不快感だった。

「そうですね。その様子ではすぐに思い出すことは難しそうですね」

皮肉っぽく唇を歪め笑う桜花。

その言い方に違和感を覚える。

これじゃまるで…。

「ちよつと待て、お前が俺の記憶を弄って忘れさせたんじゃないのか？」

「…その回答は正しくありません。原因は私ですが、正しくは、別の魂が身体に入った事へのショックでしょうね」

記憶を取り戻すまでに、そこまで時間は掛からないとは思いますが。

と桜花は言葉をつづけた。



「おい！開かないぞ、何した!!」

扉をドンドンツツと叩きながら、叫ぶと扉の向こうから返事が返ってきた。

「誰にも整理する時間が必要です。ゆっくり休んでください」

「これって監禁じゃないのか!!なあ!!」

その後、どんなに叫んでも返事は帰ってこなかった。

自分の部屋に行ってしまっただろうか。

開かない扉の事は諦め、窓へ向かう。

「……」

そこには外からしつかり木の板でバツ印に留められた窓があった。

いつの間に…。

俺は脱出を諦めると、ベットに倒れる。

スプリングのギシツと軋む音が聞こえた。

「色々あり過ぎだろ…」

ポフツという音と共に俺は枕へと顔を押し付ける。

死神と名乗る少女に助けられた？

それで俺自身、半分死神？

悪い冗談だ、そうでないのならバツトエンドまっしぐらだ。

この島で魔法使いになり切れなかった俺が、さらに遠のいた。  
「何がどうなってるんだよ……」

俺の疑問に答えてくれるものなどいなかった。

次の日、眼を覚ましたすべて夢だった。

…なんてこともなく状況は何一つ変わっていなかった。

「おはようございませす。兄さん」

朝になって、開いていた部屋を出て台所へ行くと、桜花がいた。

おそらく朝食を作っていたのだろう。

その姿はエプロンを身に着けていた。

美味しそうな匂いが食欲をそそる。

「…兄さんは止めろ」

挨拶をする桜花に対し、奏華は不愛想な顔で返した。

昨夜の一件から桜花に対する、態度が180°変わっていた。

油断すると、眼の前の少女の事を妹と捉えそうになってしまいが、昨日の様に兄として接することはなくなつた。

解いていないと本人は言っていたが、俺が認識したことで、前ほどの強制力がなくなつたのだろうか。

「朝御飯はできています。食べますよね？」

「…あ、ああ」

最初は躊躇した奏華だったが、美味しそうな匂いと昨日の夜から何も食べていない為、空腹に負けて、食卓に座る。

そして朝食が始まつた。

奏華たち二人は、同じテーブルに向かい合つて座っているが、最初の挨拶以降、これと言つた会話はない。

桜花はエプロンを外し、学園指定の女子生徒用シャツにスカートをはいた姿。対する奏華も、同じように男子生徒用のシャツにズボンをはいた姿。

食卓の上には桜花が作つた朝食が二人分並んでいる。

昨日と同じように、食欲をそそるいい匂いだった。

早く食べさせろ、と言わんばかりに、ぐぐ、と俺の腹が自己主張してきた。

「クスッ…」

「ッッッ！」

恥ずかしくなった俺は、お腹の鳴る音を誤魔化すように卵焼きへと箸を伸ばす。ふわり、とした卵焼きを口に運び、ぱくり、と一口。

「…うまい」

桜花の作るものは今まで自分が食べてきたどれよりも美味しかった。

そのまま箸が止まることはなく、進み続けた。

奏華は食べることに夢中で気が付かなかつたが、その様子を見る桜花の表情は微笑んでいた。

気が付けば、俺の前に出されていた食事は全て空になっていた。

マズイ。

マズイマズイ。

不覚にも思ってしまった。

こんな生活も悪くない…と。

受け入れそうになっていた。

彼女の存在を：

「(だけど：)」

桜花の方をチラリと見る。

日差しを受け、輝きを放つ、銀色の髪。

少しだけ、色素の薄い綺麗な肌。

一度見たら忘れることなどないだろう、綺麗な少女。

桜花は俺の雰囲気など、気にした様子はなく、あくまで『妹である八神 桜花』として接してくる。

彼女は言った。

自分は『死神』であると。

死神は人類の敵のはずだ、それがなぜ奏華を助けたのか。

なぜ、妹としてここにいるのか。

質問をしても帰ってくるのは同じ回答だった。

『覚えていません。記憶喪失なもので』

半分以上は嘘だろう。なんとなくだが彼女は俺をからかっているのだと思われる。

オマケに俺自身、桜花の魂が入っている影響で半分死神になっているらしい。

「死神…死神かあ」

ついにバケモノデビューしてしまったかもしれない自分の境遇に心底呆れかえる。

だが、その言葉通り、奏華の運動能力は見違えるほど変わっていた。

例えば、跳躍力…これは二メートル程の扉でも簡単に飛び越えられるようになっていた。

反射神経も、握力も同様に上がっていた。

魔物との戦いで生きていられたのもこの力の影響が大きいのだろう。

「良く考えると、昨日の魔物に襲われた時、二度も助けられたんだよな」

魔物の最初の一撃から、そして大量の魔物に襲われそうになった時。

そう言った意味では彼女の事を信じていいのかもしれない。

「どうしたんですか、先ほどからチラチラと視線を感じますよ」

俺の視線に気づいていたようで、振り返った桜花が俺を見る。

「…少し意外だったんだ」

「意外…ですか？」

「アンタの話を信じるなら、死神ってか異種族だろ？異種族って言ったら、もっと凶暴な奴とか、理性が無いとか、そもそも人間を下に見えていると思ってた」

「…ああ、『この下等生物がっ!!』とか想像してましたか？」

悪役の言うセリフを真似て、昨日まで見せなかった、不敵な笑みを見せる桜花。その姿は、昨日までのお淑やかな彼女の印象とはだいぶ違っていた。

やはり昨日までの演技だったのか。

「私自身、記憶が曖昧なので、今は割と人に近いのかもしれない」

小さく言った桜花の一言は俺の耳には良く聞こえていた。

彼女の言った言葉を信じるのなら、人から死神になりかけている俺と、死神から人になりかけている桜花。

シーソーの様に傾くこの状況に、思わず苦笑してしまった。

学園に近づくにつれて人が多くなっていく。

と、通学路の外れから何やら、騒がしい声が聞こえる。

「オラツさつさと出せよ」

一人はガラの悪そうな男1。

「ちやあんと、俺たちの分の課題、終わらせたんだらうなあ」

もう一人もガラの悪そうな男2。

「う、うん、やってきたよ」

対して、二人に囲まれているのは、気弱そうな男だった。

「あ？何タメ口で話してんだ？敬語だろ？」

気弱な男の態度が気に入らなかつたのか。

ゴスツという、鈍い音と共に気弱な男子が腹を蹴られ倒れ込む。

明らかに魔法で強化された一撃に気弱な男子は苦痛に歪む。

「ゴフウツ！ごめん…なさい…」

蹴つて満足したのか、男たちはノートを取つて、その場を後にしようとする。

「つたく、自分の立場くらい理解しろよ、下位クラスの癖に」

「…僕たち同じ魔法使いで、同じ年なのに…なんでこんな扱い…」

気弱な男の蚊の鳴くような、小さな声で言つた言葉。

だが、そう言つた途端、男たちは足を止め、再び気弱な男子生徒に近付いた。

「あれえ、もしかしてえ、文句？」

「ヒツ、な、何も言つてないよ!？」

「ちやあんと、聞こえてるんだよお。俺、聴覚を強化してるし」

トントンと自分の耳を軽くたたき、ガラの悪い男2。

その仕事でサアツと顔を青ざめる気弱な男。

男たちはニヤニヤと笑いながら、手を振り被る。

恐らく、魔法によって強化された拳だろう。

痛みに耐えるため、ギョツと目を瞑る。

.....

しかし、痛みはいつまでたっても来なかった。

「なんだ？ テメエ」

恐る恐る目を開けると、そこには…。

「いい加減止めろよ。お前らみたいなのがいると魔法使いの品性が疑われる。学園長の迷惑だ」

拳を振りかぶる男の腕をつかみ、止めたのは奏華だった。

「ああん？ テメエは…ハハハハッ！ 誰かと思ったら、ブランクじゃねえか」

不機嫌そうに振り返った男は奏華の顔を見た途端、笑い出した。

奏華にとつて、いつもの事なので慣れている光景。

だが、今日はいつてもより虫の居所が悪いようだ。

無意識に男をつかんだ手に力が入る。

「そいつ、お前と同じクラスなんだろ、プレート見ればわかるよ。差別してんのか？」

「痛つてえな!! 離せよッ！」

男は奏華のつかむ腕を振り払う。

「別にいいだろ？ テメエ含め下位の雑魚の有効利用だよ」

「それが同じ立場の魔法使いに言うセリフか」

自分でも分かるくらい怒気が強くなっている。

だが、相手は魔法使い、こんなことで引き下がるはずがない。

「ハンツ文句があんなら力づくでやってみろ…おお!?」

セリフの途中で男が体勢を崩し、倒れ込む。

理由は簡単、男が話している間に奏華が足払いを掛けたのだ。

「テメエ、ふざけやがってえ!」

激高したもう一人の男が手をこちらへ向ける。

魔法を使うつもりだろう。

俺はそれより早く、男に近付いて。

「ワーツ?!」

「ギャー?!?!」

男の耳へ向かって大きな声を出す。

先ほどの会話からこいつの聴覚が強化されているのは知っていた。

耳を抑えながらフラフラと尻餅をついた男。

「て…めえ、ブランクの癖に調子に乗りやがって!!」

足払いした男が顔を真っ赤にして、立ち上がり、こちらへ手を向ける。

「…魔弾か」

属性武装を出していないことから、第一世代魔法と考え、俺は…。

「先生!!こつちです!!」

俺が動こうとした時、大きな声で教師を呼ぶ桜花の声が辺りへ響く。

「ツチ、おい、行くぞ」

「あ、ああ」

教師を呼ぶ声に、男たちは舌打ちをすると、その場から離れていった。

それと同時に、自分の中で激しく燃えていた何かが少しずつ熱を下げていく。

声のした方から桜花が歩いてきた、と。

ぎゅむう

「…いひゃい(痛い)」

俺は両頬を抓られた。

「痛くしているんです。何ですか貴方は、トラブルに自分から突っ込もうとして」

「…わひゅい(悪い)」

流石に今のは自分がどうかしていた。

今の桜花との状況も忘れ、素直に謝った。

俺の謝罪を聞いて、桜花は手を離してくれた。

「そう言えば、教師は？」

「?嘘に決まっていまするじゃないですか?そんなタイミングよく先生なんて呼べませんよ。大体ああいう人は自分より上の人を避ける傾向があると思っただので」

「そ、そうなのか…」

人の心を理解する、知恵の回る死神だ。

つと、そういえば、蹴られた生徒がいたんだった。

「おい、アンタ、大丈夫か…。つていねえし」

「まあ、あれだけ騒げば逃げるでしょうね、行きましよう兄さん」

「ああ、あと兄さんは止めろ」

「兄さんは兄さんですよ?もう学園ですし、今更ですし」

「昨日に比べて、違和感しかねえ」

「諦めてください、兄さん」

「はあ…」

悪態をつきながらも、俺たち二人は再び学園へと向かった。

<Another view>

「畜生…ちくしょう!!アイツら!!」

森の中をがむしやらに走り続ける。

目的があつたわけじゃない。

何かをしようと思つたわけじゃない。

ただ、鬱憤を晴らすために少年は走り続けた。

途中、木の根に引っかかり、地面を転がった。

溢れるのは止まらない涙。

悔しさだけが心に残る。

「魔力が低いからなんだ!魔法がうまく使えないからなんだ!僕は魔法使いなんだ、な

のになんでこんな扱いなんだよ!!」

拳を握り、地面に思い切り叩き付ける。

「アイツら、僕の事バカにしゃがつて!!」

実力が上の者が下の者を支配する。

先ほどの不良に絡まれている少年は下の者だった。

それがRUBICの少年の立場だった。

「そうだ…僕に力があれば、アイツらに…アイツらなんか！」

ひたすら地面へ拳をふるった少年は落ち着きを取り戻す。

そろそろ学園が始まる。

今から向かったところで遅刻確定だろう。

土ぼこりを払い。歩き出す。

「…あ、そういえば」

思い出すのは学園の噂。

「…狂い桜」

噂は色々あるだろうけど、その中に少年の求めるものがあつた。

『魔力の向上』『何でも願いが叶う』

「…やってやる。やってやるぞ!!」

手に持っていた鞆を放り出し、少年は森の奥へと向かう。

その先にいるモノが彼の求めるものだと思つて。

## 第十二話

教室に入り、授業を受ける。

たったそれだけの事にとても、とても疲れた。

自分と他の人の間にある壁、それがある日突然、壊されていたのだから無理もない。桜花の仕業か、それとも“妹がいたら”俺はそうなっていたのか。

クラス連中との距離が今までの俺が知っているものと180。変わっている。今まで何かされていたわけではないが、いきなり親しくされても上手く適応できないのが俺こと八神奏華だ。

今までは琥珀と軽く話す程度だったのに今朝来たら、普通に何度も話しかけられた。昨日通りと言われたら、そのままなのだが。

それに、それだけではない。桜花の噂はすべに学園中に広まっており、各クラス、各学年から桜花を見に人がやってくる。

ついでに俺も見られる。

そんな変わってしまった環境に適応しきれず、

結局、俺は昼になると逃げるように屋上へ避難した。

「で、ここにいるんだ」

「…ああ」

今俺の隣には示し合わせたかのように屋上に来ていた白百合が座っている。

勿論、馬鹿正直に話したわけじゃない。

簡単に、桜花が来たことで周りとの接することが増えて大変という話にした。

「まあ、半分はソーカ妹が目当てで仲良くなるうとしているんだから、ソーカが気負う必要はないと思うけど」

「なんというか、疲れたわ」

当の本人は飲み物を買いに行っている。

桜花自身、この状況を気にした様子はなく、寧ろ俺の困っている様子を見て楽しそうだった。

アイツ、実は悪魔なんじゃ…。

「とりあえず、お疲れさまだね」

劳いの言葉を言つて、肩をポンポンと叩かれた。

聞き上手の白百合と話して少し気分が落ち着いた。

落ち着いたからこそ、ついポロツと口に出してしまった。

「ああ、そう言えば、今朝の不良またやらなきやいいけど」  
「何か…:されたの?」

白百合の目が鋭くなる。

先ほどまでの柔らかさはなく、氷のように冷たい瞳だった。

マズイ、俺は慌てて言い直す。

「い、いや、俺じゃなくて絡まれてた学生がいたからさ」

「…:そうなんだ」

幾分か冷たさの消えた目になったのを見てホツとする。

いつだったか、不良に絡まれたことを白百合に話したら、次の日からその不良は俺を見るとそそくさと逃げるようになった。

なんてことがあった。

おそらく白百合の仕業だと思っただが、本人は。

『ソーカの凄さが分かったんだよ』

としか言わなかった。

以来、俺は白百合には言わない様、気を付けていた。

「(俺のせいで白百合が暴力事件とかシャレにならないからな…:)」

「ただいま戻りました!」

タイミング良く、桜花が屋上の扉を開ける。

その手には飲み物が何個かあった。

「皆さんの分も買ってきました。どれがいいですか？」

「ああ、ありがと……う」

飲み物を見た白百合の顔色が明らかに悪い。

つて若干放心している!!

その理由は飲み物のパッケージにあった。

「どうかしましたか？」

「い、いや、コレ……」

「面白そうですね！こんな一杯“変”な飲み物があるなんて、やっぱりこの学園はすごいですね」

「いや、変な飲み物って……」

幾つか見てみた。

『納豆かき氷味』

『“けもちよるび”サイダー』

『どっこい羊羹水』

『深淵の“けもちよるび”』

あまりのラインナップに、途中で考えるのを止めてしまった。

「さあ、兄さん、一本ぐいっと！」

「い、いや、俺は、なあ白百合…って、いねえ!!」

隣で顔を悪くしていた白百合はいつの間にかその姿を消していた。

「今！今ヘルプなんだけど！白百合ッー」

「さあ、兄さん私達兄妹の絆を深めましょう!!」

二本のジュースを両手にジリジリと近づいてくる桜花。

「お前は阿呆か!?こんな飲まされたら、悪化するわ!!」

その手のラインナップには

『〃けもちよるび〃サイダー』

『深淵の〃けもちよるび』』

よりによってそれかー!!

なんだよ！〃けもちよるび〃って、意味わかんねーよ!!

「や、やm…。」

その後、屋上から響く謎の叫び声が聞こえた。

<Another view>

辺りが夕焼けに照らされる森の中。

一人の少年が歩いていった。

「はあ、はあ！やった、ついにここまで来たぞ！情報通りなら狂い桜はすぐそこだ。

これでもうバカにされることなんてない。上級のやつら、今に見てるよ。

僕を散々バカにしやがって、狂い桜の力が手に入ったら思い知らせてやる！」

少年は乱れる呼吸をそのままに、辺りを散策し始めた。

「はあ……はあ……無い。どこにも無い！何で……なんでえ！くそお、クソオ!!」

あれから一時間たっただろうか、いくら探しても普通の木ばかりで桜の木なんて見当たらなかった。

苛立ちは諦めに変わり、少年は肩を落とした。

その背後にソレはいた。

『……』

「ん？うわあ!?!なんだお前！」

背後に人がいた。

そのことに少年は驚き、尻餅をついてしまった。

頭の中から足の先まで、真つ黒な布によって全身を覆っている者。

少年に向かって、黒フードは声を掛ける。

『力が欲しいか?』

変成器を使っているのか、機械的な声がこだまする。

だがそれは少年が望んだものだった。

「…っ!!」

『もう一度聞こう。力が欲しいか?』

少年にとつてその言葉は藁にもすがる思いだった。

「…欲しい、欲しいき! アイツらをぶっ潰せる力が!」

この学園で最強になれる力が! 僕達だって夢見ていいはずだ!

同じ魔法使いなのにこんな優劣がつくなんて!

間違ってるんだから!! 僕達は…選ばれたんだから!!」

『…』

黒フードは何も言わない、だが笑っているのだと少年は思った。

「アンタ狂い桜を知ってるのか? なら頼む! 教えてくれ!」

それはどこにある？僕は欲しいんだ!!圧倒的な力を!!

狂い桜を見つければ、手に入るんだろ!!」

『…いいだろう、持っていけ』

黒フードが一つの物体を取り出した。

キューブ上のそれを少年は見たことがあった。

「…これは…」

『それを使えば、お前は強くなれる。この学園で最強にだってなることができる』

受け取ったものをしげしげと見つめる。

それは黒いサイコロ形状をしたものだった。

少年の持つ知識でその物体がなにか分かった。

「(これQ—b i c jやないか!資格を持つ者だけが持てる。上位魔法使いの証!)」

自然と口が吊り上がり、笑いが止まらない。

ついに少年は笑い出した。

『…フッフ、上手く使え』

黒フードの言葉などもう少年には届いていなかった。

少年の目は既に“黒い”Q—b i cへと向けられていた。

<奏華 view>

「…」

「…… あ、あの、兄さん」

「……………」

「む、無視しないでください！何度も謝っているじゃないですかあ」

「……………」

桜花に無理やり飲まされた、あの飲み物。

美味しかったのだ… 最初は

最初に口の中に広がったのは爽やかな味だった。その味が段々と右下がり落ちていき、

最後には腐った牛乳のような気分の悪くなる味に変貌した。

おかげでその後の授業は集中できず、全く授業にならなかつた。

「まあ、明らかに顔色が悪かつたから、誰からも話しかけられなかつたのは良かったが、

その代償があれじゃ割に合わない)」

今でも思い出すと……うっぷ。

「口直しに美味しいもの作りますから、機嫌治してください」

実際は気分が悪く、何も言えないのだが。

桜花はそれを俺が怒っていると思っているようだ。

勿論、怒つてもいるが。

つと、ガサガサと茂みが揺れると、誰か出てきた。

「(あ、今朝の気弱な奴だ)」

「ん？ ああ、君か」

今朝見た時はオドオドしていた少年はどこか自信を持つている雰囲気。

それに制服の所々が、土で汚れている。

まるで地面に倒れたみたいだ。

「(アイツらの仕業か?)」

だがそれにしては少年には悲壮感はない。

それに若干の違和感を覚えた。

「…ああ、君か。ふん、今朝の事は礼を言うよ。でももう必要ないよ」

少年の高圧的な態度に桜花が眉をひそめる。

「何か、あつたんですか？」

「僕はね、生まれ変わったんだ、だから…おっとこれ以上は言えないんだ。じゃあね」  
そう言うと、スタスタと歩いて行ってしまった。

「…今の人」

俺も桜花もあの少年に対し、底知れない違和感を持った。

出来るなら今すぐ確かめに行きたいが…ダメだ。

「…うっぶ」

今俺は限界を迎えようとしていた。

「あ、兄さん！大丈夫ですか!!兄さん!!」

「に…いさん…つて…よぶな…」

その後、俺は別の意味で眠れない夜だった。

## 第十三話

<Another view>

暗い室内、微かな明かりが灯る部屋。

『ア……アア……ミタサレル……ミタサレル……』

『モット……モットダ……モット……クイタイ』

「ああ、ああ、いいぞ。たくさん食べる。もつと……もつと大きく……そして……」

——ズズツズズズツ

何かがゆつくりと沈む気味の悪い水音。

微かな明かりで照らされる、水面から生えているのは……人の手だった。

苦しいのか、その手は誰かへ助けを求めるように必死にもがいている。

しかし、その手は何も掴むことなく、ゆつくりと飲み込まれていった。

——ズズツズズズツ

やがて水音は止み、静寂に包まれた。

「次は……誰にしようか？ 沢山魔力のある人がいいな」

口元を歪め、笑うその姿は、人ではなく『怪物』そのものだった。

<奏華 view>

未だ寒さの収まることのない魔法学園RUBICの朝。

二人の男女が一緒に登校していた。

「…」

「…」

一人は少しくせつ毛のある黒髪の少年『八神奏華』

もう一人は銀色の髪をもつ、死神少女『八神桜花』

朝はいつも一緒に登校する二人だが、その中に会話は無く、アスファルトを歩く二人分の足音だけが聞こえる。

ジューズ事件から数日経つがその間にも桜花からの様々なアクションがあった。

ある時は一日中、買い物につき合わせ翌日、全身筋肉痛。

またある時は第七寮の大掃除を二人でやることになったりと。

最近は振り回されてばかりの毎日だ。

『分かっていませんね、兄さん。妹たるもの常にインパクトを残さないといけません!!』  
協力に関して、ゆっくり考える時間云々はどこ行っただよ、というツツコミを何度

したとか。

奏華は心の中で何度目かの溜息をつく。

ここ数日、何かと桜花に振り回さる事が多かったが、正直な話、嫌ではなかった。

誰かと長時間、買い物するなんてなかったし、掃除なんて簡易的にしかしていなかった。

今だってそうだ。

登校中、二人に会話なんてない。

無言で誰かと歩いてるなんて、普段ならそれは苦痛でしかない…ないのだが、なぜかそうはならない。

「…まずい、まずいなあ」

今の状況を受け入れつつあるこの状況。

そのことに奏華は頭を悩ませていた。

いつもの様に教室に入ると、何やら騒がしい。

教室を見回すと、誰も彼もがザワザワと騒がしくお喋りに夢中のようだ。

「お？奏華、はよーっす！」

話し合っているグループから見知った奴が挨拶をしてきた。琥珀だ。

「なあなあ、聞いたか？例の噂」

琥珀はグループから抜けると桜花と共に席に着いた俺に話しかけてくる。

「噂？いや聞いてないが。それでみんな騒がしいのか」

昨日今日でまた新しい噂が出てくるとは、本当にこの学園は噂が尽きないな。

俺が呆れて溜息をつくとき、桜花が小首をかしげながら琥珀へ質問した。

「噂……ですか？一体どんなものがあるんですか？」

「ああ、何でも実験生物の被験体が逃げだして人を襲っているとかなんとか」

「実験生物う？」

胡散臭さ100%の話に眉をひそめる。

RUBICにそんな施設は存在するなんて聞いたことが無い。

「いや、真偽はともかく、この噂が出るのはマジだって！実際、学園生がここ数日で5人も行方不明なんだとさ」

「……はあ？」

「外泊届も出てないって言うし、翌日になっても帰ってきてない。それでおかしいと

思った寮長が学園に連絡したんだと。んで、実験生物が行方不明者をさらっているんじゃないかって、もっぱらの噂だ」

まだ琥珀の話しか聞いていないから、信憑性には欠けるが。

確かにここの学園生なら簡単に誘拐されるとは思えない。

それなら？

奏華はそれに対する候補をいくつか考える。

例えば、森に行った可能性。

夜間の外出を企む生徒は偶に現れるが、直ぐに見回りに見つかるか寮の脱出で失敗する。

それに加えて、森に近付くことが禁止されている今、更に警備は強化されているはずだ。

簡単に抜け出せるはずがない。

方法があるとするれば教員の手伝いなどで遅くまで手伝った生徒。

それに加え、警備の目を掻い潜れるほど隠密技術のある者。

様々な考えが脳裏をよぎるが、どれも現実味が無い。

「…さん、はい…」

「(それとも…魔物にやられたのか?)」

奏華を襲ったあの魔物のように、この学園の生徒を襲ったという考えもできる。

「…えいつ!」

「わひゃあ!?!」

首筋にひんやりとしたものを当てられ、思わず情けない声を上げてしまった。

「何してんだツ!!」

「あ、首を触ると温かいですね」

俺の首筋に手を入れた犯人（桜花）は呑気に話しかけてきた。

周りに視線を巡らせるが、みんな噂に夢中で俺達の方には気付いていない様だった。

さつきまでいたはずの琥珀も既に席を立って話の輪の中にいた。

「琥珀さんなら兄さんが考え込んだ辺りから、諦めて行っちゃいましたよ」

「そうか」

「私はさつきから話しかけてましたが、全然聞こえていないようだったので強硬手段に出ました」

そう言うと、雪のように白い手を持ち上げた。

「丁寧な解説ドウモ」

悪目立ちしそうになつたので、最初は怒ろうと思つたが、

考え込んで、無視してしまったのなら、少しばかりバツが悪い。

「悪かったよ、ちよつと考え込んでた」

「…貴方つて変な所で律儀ですね」

驚き半分、呆れ半分の顔で口元を緩める桜花。

その表情は照れているのか、少し赤くなっていた。

「茶化すなよ。それで何の用だ？」

「ええ、実は…」

ガラツ

桜花が話そうと口を開いた時、教室の扉が開き、柳教員が入ってきた。

騒がしかった教室も教員が来たことで、みんな席へと戻って行く。

「おい、先生が来たから、お前も席に…てえ!？」

視線を教卓から桜花の方へ向けると、いきなりしなだれかかってきた。

二の腕あたりが形の良い胸にむぎゅつと挟まれた。

顔がカツと熱くなるのが分かる。

「お、おい!？」

急いで胸から抜け出し、肩をつかんで離そうとするが、どうも様子がおかしい。

桜花の顔は熱っぽく、呼吸は荒い。

その表情は辛そうで、今まさに倒れてきたようだった。

「おい！大丈夫か!!」

「はい、何とか…大丈夫です」

はあはあ、と荒い息で辛そうに話す桜花。

おでこに手を当てると、熱い。

「お前、熱があるじゃないか!」

倒れた桜花を見て教室がざわざわと騒がしくなる。

「どうかしたのかい?」

教員がこちらへやってくる。

「先生、こいつ熱があるみたいで、保健室に連れて行きます」

「あ、ああ、分かりました。一人で大丈夫ですか?」

教員の言葉に俺は頷くと、桜花の首の後ろと膝の裏に腕を回し、お姫さま抱っこをする。

予想通りというべきか、桜花は軽かった。

「に、にいさん、恥ずかし、です」

お姫さま抱っこという状況に熱とは別に顔を赤らめる桜花。

「今はそれどころじゃないだろ!行くぞ」

俺はそのまま桜花を運ぶため保健室へ向かった。

〈廊下〉

「に、さん、とま、つて」

「なんだ？」

教室を出てすぐ、桜花が静止の声を掛ける。

桜花は弱々しい手で上を指さした。

「屋上、へお願い、します」

「屋上？どう考えても保健室か病院だろ？」

「いい、ですから、屋上に、その二つ、では解決しません。私は：：ですから」

桜花の小声で言った言葉、『私は死神ですから』その言葉に彼女が人とは違う存在だということを感じ出す。

「…わかった」

俺は桜花の言う通り、屋上へ続く階段へ進路を変えた。

<屋上>

この時間、屋上は無人だった。

流石の白百合も今はいなかった。

桜花は辛そうな顔で、ベンチへと腰を下ろす。

その顔は相変わらず、赤く、どこか焦点があつていないように見える。

「あはは、授業、休むことに、なっちゃいましたね」

誤魔化す様に笑う桜花に俺は単刀直入に切り出す。

「お前、他に何を隠してるんだ？」

「…えっと」

どこか歯切れの悪い桜花。それは少し言葉を選んでいるようだった。

「…当てようか？」

桜花の様子はどこか見覚えのあるものだった。

いや、正確には見覚えのあるものの更に悪化したもの、と言えいいのか。

「……」

桜花は答えない。

ならばと、俺は合っているであろう正解を突き付ける。

「魔力切れ……だろ」

桜花の症状は魔力切れのものに近い、それは琥珀と何度も戦っている奏華だからこそ身近に感じるものだった。

だが、琥珀の場合は、顔色が悪くなる、貧血のようなもの。

恐らく今の桜花の状態はそれ以上悪化した場合に起こるものだろう。

「……はあ、ばれちゃいましたか」

桜花はバツが悪そうに視線を逸らすと、溜息をついた。

「何で、何でそんなことになってるんだよ」

「……私の身体は、魔力で出来ています」

「ま、魔力!?!」

「ええ、そして人としての肉体を持たない私では魔力を作ることはいけません。この身体はあくまで魔力をため込む容器でしかありません」

魔法を使えばその分減るだけの器。

ではその溜め方は？

それは奏華からの魔力供給が必要になってくる。

「ですが、今は貴方とのパスは繋がっていません。今私に流れている魔力は最初に貴方の魂に同化したとき貰った魔力のみなのです。必要な分を回収したつもりでしたが、まあ予想外の事態で余分に魔力を消費してしまいました」

思い出すのは魔物との戦闘。

あの時、桜花は予想外に多くの魔力を消費してしまったのだろう。

「どうすれば、回復するんだ」

俺の言葉を聞いて、桜花は目を丸くする。

「えっと、貰えるんですか？」

「お前の魔力が無くなると俺まで危険なんだろう。だったらしょうがないじゃないか」

「いえ、てつきり信用されないかと…：思いました」

「病人みたいに苦しそうなんだから、信じるだろう、普通。逆にそれが演技だったら大したもんだよ、俺の負けだ」

「…」

イマイチ要領を得ないという顔の桜花。

少し逡巡したが、一度首を振ると、右手を俺へ差し出した。

「握ってください」

「?…分かった」

よく分からなかったが、言われた通り、差し出された右手を左手で添えるように掴む。桜花の白い手はその見た目通り、ひんやりしていたが、女の子の柔らかさがあった。

「では、いきませうね」

「…ツ!!」

桜花の言葉と共に、左手から流れるように魔力が抜けていく感覚。

少し採血をされる感覚に似ている。

手の先がビリビリと痺れ、脚の感覚が不安定になる。

「…はい、終わりました」

長く感じていた時間は、ほんの数分で終わった。

桜花の顔色も先ほどよりずいぶんマシになっていた。

「今のが…魔力供給か?」

「いえ、少し違います。貴方、辛そうでしたね。本来なら違和感すらなく終わるものです。だって契約していれば貴方の身体は私の身体でもあるのですから。今は貴方の魔力が別の個体へ移動したので、採血の様に、貴方の魔力残量が減ったんです」

左手を見る。

先ほど感じた痺れはもうない。  
足にも違和感はない。

自分の中にある魔力が幾分か減っていただけ。

「それで…話…です…が…」

桜花の瞼が次第に下がっていく。

ベンチに腰掛けている身体もふらふらと左右に揺れる。

「おい…大丈夫か？」

倒れないよう直ぐに支える。

顔にかかる、銀色の髪が日に照られて、キラキラと輝く。

「平気…です…魔力が馴染んでいないので…眠く…なっただけです。それより…気を付けて…下さい…貴方が襲った魔物…は意図的な…注意してください…さい」

やがて瞼は完全に下がってしまい、すうすうと規則正しい寝息が聞こえてくる。  
眠ってしまったようだ。

「…ありがとう」

桜花の言ったことはよく分かっていない。

だが、眼の前の少女は俺の心配をしてくれていた。

俺は桜花に小さく礼を言うと、彼女を抱き上げ、保健室へ向かった。

## 第十四話

あの後、桜花を保健室に運んだ俺は希沙羅へ連絡を入れた。

内容は噂について話がしたいというものだ。

休み時間を利用して、何度が保健室に立ち寄ったが、桜花は眠ったままだった。それでも顔色はだいぶ良くなっていた。

## 〈資料室〉

俺は昼休みを利用して、噂について希沙羅へ聞きに来た。

今、資料室には希沙羅と俺の二人だけ。

希沙羅は二人分の紅茶をいれりと椅子に腰かける。

「ああ、行方不明者が出たことは真実だ。まあ、生物実験なんてものはやっていないがな」

「…」

…流石に生物実験の方はただの噂だったようだが。

行方不明の方は本当だった。

しかし、希沙羅にしては思ったより、あっさりと言ったものだ。

いつもなら話をはぐらかされると思っていた。

「お主に黙っていても、勝手に動くであろう。事が事であるからな、前もって手綱を握っておった方が面倒なことにならないからな」

「…」

め、面倒か。

確かに希沙羅にはぐらかされたら独自に動こうとは考えていたが。

なぜバレたのだろうか？

そんなことを考えていると、希沙羅はやや大きめの溜息について。

「はあ、その顔、なんでバレたんだろう、と言った所か。まあ、お主は昔からそうだから。よくトラブルに突っ込もうとする、バレバレだ」

「(バレバレなのか…)」

言われてみれば、思い当たる節がチラホラと出てくるな。

希沙羅はコホンつと咳を一つ付くと、紅の髪を指先でクルクルいじりながら。

「なあ奏華、お主はいつも無茶ばかりをしようとするが、そこまで頑張らずとも良いのだぞ」

希沙羅の心配していることは分かっている…つもりだ。

だけど、その言葉に対し、俺は首を横に振る。

「俺は希沙羅に救われた身だ。だから俺は希沙羅の役に立ちたいんだ」

俺の言葉に希沙羅はあまり良い顔をしない。

これが矛盾していることだってわかっている。

希沙羅だって本当は俺に危険な事をしてほしくないのだろう。

それでも…俺は…。

「…はあ。関わるなど言っても、お主は聞かないだろうし。そうさな、情報収集とか、どうだ？」

「情報収集？」

「ああ、学園生達から行方不明者の前日の行動や、おかしなものを見ていないか、など同じ生徒のお主なら教員が聞くより話しやすかろう？もちろんちゃんと本人と会話をし…て…な」

ニマニマと意地悪そうに笑う希沙羅。

これは分かかって言っているのだろう。

俺の立場的に他クラスへ聞くことが、かなり面倒だという事が。

勿論こちらでも調べるが、と希沙羅は付け加える。

「あ、ああ、分かったよ。任せてくれ」

要はいつももやっていること（盗み聞き）はするなよ、ということだ。俺は直ぐに放課後の作戦を頭の中で考える。

と、希沙羅から笑みが消え、辛そうな、悲しそうな表情へと変わる。

「…お主も分かっていると思うが、その眼は万能ではない。決して無茶をするなよ」

「ああ、わかっているよ」

「…左様か」

希沙羅はそれだけ言うと、再び仕事に戻った。

これ以上邪魔をしてはいけなれないと思い、俺は部屋を出ようと扉に向かう。

「…そう言えば」

ノブへ手を回したところで、希沙羅から声がかかる。

振り返ると、作業を中断した希沙羅がペンを片手に、こちらへ顔を向けていた。

「そう言えば、桜花の様子はどうか？ 倒れたと聞いたが、大事ないか？」

「…ああ、今は保健室で寝てるよ」

「身体の弱い妹をあまり心配させるでないぞ？」

穏やかにほほ笑む希沙羅を見て、

一瞬、すべて話してしまえば…そんな考えが頭を過る。

だがそれも、桜花の事を思い出すと、直ぐに霧散した。

死神、人類の敵のはずなのに、彼女は奏華を助けた。

その意図が分からないにしても、敵になんて：見れるはずがない。

結局、希沙羅に本当のことも言えず、バツの悪い俺は、そのまま足早に資料室を出た。希沙羅はそんな奏華を何も言わず見送った。

<廊下>

話をした限り、希沙羅も他の人と同様、桜花については妹として理解しているようで心配しているようだった。

「(本当にみんな桜花の事を当たり前のように受け入れているのか)」

教室へ戻る途中、桜花の様子を気にかけて奏華は何度目かの保健室へ向かうことになった。

あれだけ苦しんでいたのだ、心配するのは仕方がない。

そう心に言い聞かせていたが。

「はあ…いい加減、決断しないとな」  
死神との協力…その覚悟を。

〈放課後〉

俺は放課後から行動を開始した。

取り敢えず、同じDクラスから聞き込みをすることにした。

「なあ、君は知らないか。行方不明の話」

「いや、知らないな」

「そっか。なあ、君は知らないか。行方不明の話」

男子生徒、女子生徒、と次々に質問をしていく。

前より、少しだけ話しやすくなったおかげで、スムーズに話が運ぶ。

「(これも死神のおかげ…なんてな)」

冗談交じりに思った言葉だが、案外外れていないのだろう。

実際、桜花の影響か、社交性が上がった気がする。

しかし、幾ら話を聞いても噂についてはそれほど得るものはなかった。

やはり、クラスが違うからか、Dクラスでは何も情報は得られなかった。

希沙羅の話を聞いた限りだと、行方不明になっている学生は2-Cの人間らしい。

「なら、2-Cの生徒に聞くのが一番か」

……

…

結果は空振り。

そのほとんどが話を聞いてくれない者だった。

「ま、当然か」

学園のお荷物、『ブランク』では碌に相手もされない。

しかし、他の方法も思いつかない。

俺はいったん中庭へ移動し、ベンチへ腰を下ろす。

これから、どうしたらいいか考える。

「…（考え中）」

「…あれ？先輩じゃないですか？」

「…（考え中）」

「お久しぶり？ですな先輩！」

「…（考え中）」

「え、あれ？私無視されちゃってます？あのー先輩？」

クイクイと裾を引っ張られたことで、俺はようやく目の前に人が立っている事に気が付いた。

眼の前にいたのは、数日前に出会った少女『宝条 莉絵』だった。

宝条は人懐っこい笑顔を浮かべると、ペコリと頭を下げた。

「お久しぶりです先輩！」

宝条の姿は初めて会った時と同じ、この学園の制服を身に着けていた。

ここで何をしていたのか聞かれたので、俺の状況について、掻い摘んで話した。

その行方不明事件について学園長から調べる許可を得ている事。

学生に聞いて、行方不明者の目撃情報を調べている旨を伝える。

なぜ彼女に話したかと言うと、主な理由は、何か彼女からアイデアを

得られることはないかと思うのと、気分転換が欲しかったという二つだ。

宝条は俺の話に興味深そうに聞くと、何度か頷く。

「そういう事なら私に任せてください!」

宝条は勢いよく、ドンツと胸を叩く。

「ゴホツ!!ゴホゴホツ!!」

強く叩き過ぎたのか涙目でせき込む宝条。

手伝ってくれるのは嬉しい限りなのだが…。

今までの彼女の言動と行動を鑑みると

ああ…激しく不安だ

「ゴホツ。と、とにかく先輩はそこで大人しく私の成果を待っていてください!」

未だ涙目の宝条は、グツと親指を立てると、学園の方へ走って行く。

「Σ(。▽。ノ)ノキヤー——」

ものの数秒でボシユツと捕獲網が発動する音が聞こえた。

「(速攻で罠にかかった!!)」

前回同様に宝条は魔物捕獲用の網に宙ぶらりん吊るし上げられた。

「うう、先輩だずげでくださいい〜」

先ほどまでの自信に満ちた声はどこへ行ったのか。

情けない声で助けを求める宝条。

俺は軽い頭痛を感じながら、酷いトラブルメーカーと関わってしまったものだと嘆いた。

結局、前回に引き続き、また捕獲網をダメにしてしまった。

このことを、また希沙羅に報告しなければ。

「(やっぱ怒られるの：俺になるのかな?)」

気分が重くなるのを感じながら宝条を助けると、俺たちは？クラスへと向かった。

その後、宝条を含め、聞き込みを開始した。

予想外と言うべきか、宝条のコミュ力は非常に高かった。

年下後輩と言う事を前面に押し出し、上手く取り入って学生に質問をしてみた。

男子なら魔法の先輩として、尊敬云々。

女子なら最近の流行から入り、そのまま噂へ話を取り付けた。

結果、気を良くした学生から噂話について、話を聞くことが出来た。

「大体こんな所ですね」

腰に手を当て、誇らしげに胸を張る宝条。

突きつけられたメモ用紙には今回の行方不明についての話がびっしり書いてある。

塵も積もればなんとやら。

一人一人に聞いた情報はちつぽけな物でも集まれば大きな成果となった。

「どうです、先輩。私お役に立てましたか？」

「…そうだな、ありがとな。宝条。おかげで助かったよ」

俺の言葉に宝条は嬉しそうに、ピョンピョンとジャンプする。

その姿に何となく、犬のように感じた俺は宝条の頭へ手を置くとゆっくりと撫でた。

触り心地の良い、さらさらとした髪を撫でると、彼女は驚いた顔をしたが、直ぐにそ

の顔がほころび、えへへくと満足げに頬をゆるませた。

「ん、それでは先輩。私はこれで！お仕事、頑張ってください！」

宝条は左手で敬礼のポーズをすると元氣いっぱいに手を振りながら、走って行った。

先ほどまで撫でていた掌を無意識に見つめる。

「こんなので良かったのか？まあ今度会ったら飯でも奢るか」

宝条が畏にかかる音が聞こえないことを確認すると、俺は近くにあったベンチに腰掛

け、宝条が紙にまとめたメモを読み進める。

行方不明者を最後に見たのは下校時。

彼ら5人に直接的な繋がりはないようだ。

つまり、彼らは行方不明になった原因は“放課後から早朝の間”、そして“一人で行動していた”という可能性が高い。

「つつても、そんなことわかった所で意味なんて…」

そう思いつつも、メモに眼を通し続ける。

…と気になることが書かれていた。

「(行方不明者から着信があった?)」

そのとき電話に出ることが出来なかったようだが、

一度だけ、しかも着信5秒しか掛けていなかったようで、気付いた者は大した用ではない。

また掛けてくるかと思いきのまま放置した、と。

「5秒…か」

結局、それ以降電話がかかることはなく、翌朝、行方不明になった。

やはり、行方不明者たちは何者かに襲われた可能性が高い。

それも魔法使いを無力化する程の、ただ者ではないナニか。

「ちよつといいかな?」

「ん？」

メモに落としていた視線を上へと上げる。

眼の前に一人の男子生徒が立っていた。

一見したところ、これと言った特徴もない普通の男子生徒だ。

しかし、なぜだろう。

男子生徒のその顔にはどこかで見覚えがあつた。

「(あつ…あの時のイジメられていた生徒か?)」

思い出すのは昨日の朝に見かけた、課題を押し付けられていた男子生徒。

確か、昨日の夕方頃にも会っていたはずだ。

あの時はやけに強気な態度を取っていた気がしたのだが、今の彼はあの時とはまた少し雰囲気違っていた。

と言つても、俺自身あの時は気分が悪さが勝り、正確には覚えていないのだが。

「僕は君嶋(きみしま)。2-Cの生徒なんだけど」

そう言つて差し出された手。

握手だという事を理解するのに数秒かかった。

「あ、ああ、どうも」

「みんなから聞いたんだ。君が行方不明者について調べてるつて。どうかな成果の方は

「？」

「まあ、ボチボチだな」

君嶋は周りを気にするような素振りを見せると、声をひそめて話す。

「…実は僕も君に聞いてほしいことがあるんだ」

「…聞いてほしいこと？」

「うん、確証はないけど、今回の行方不明事件に関わっているかもしれない。」

「その話ってのは？」

君嶋は笑顔のまま、校舎を指さす。

「この寒空の下で話と言うのもなんだから、校舎の中で話そうか」

そう言うと、こちらの有無を聞かず、校舎へ向かって歩く君嶋。

こちらの意見を聞かず、先に行ってしまったが、断る理由はない。

その跡を追うためベンチから立ち上がる。

その時、ほんの一瞬、君嶋の口元がニタリと歪むのが見えた。

瞬間、奏華の背後から一人一人を覆い隠すような大きな半円状の檻が音もなく現れ、覆い被さる。

大きな音を立てて、地面に衝突する檻。

巻き起こる砂煙。

「……ふふふッ、アハハハハ!!」

砂煙の中、辛うじて檻の隙間から壊れたベンチの木材と奏華の着ていた制服の端が見える。

それを見て堪え切れず、笑い出す君嶋。

奏華を一人を捕らえようとする、その行動には一切の躊躇など無かった。

「これで6人目。もうすぐ、もうす……ッ!?!」

人の気配を感じ、反射的に身を翻し、君嶋はその場から距離を取る。

その表情は驚きだった。

彼の目の前にいた人物はたった今捕らえたはずの、人間——八神奏華だった。

君嶋は直ぐに奏華を捕らえたはずの檻へ視線を向ける。

それに応えるように、檻は瞬時に溶けだし、地面へと吸収される。

そこには魔物捕獲用のワイヤーネットを適当に絡めた塊に奏華の着ていた制服の上着をかぶせた、即席で不格好な、一つの身代わり人形があった。

「……まるで忍者みたいないなことをするね」

感心するように褒める君嶋。

その様子に奏華は怒りすら感じていた。

「お前、これはどういうつもりだ」

「どうも何も、こうなったからには嫌でも分かるでしょ？」

「…どうやらお前が行方不明事件に関係しているようだな」

よく見ると君嶋の手には一つのQ—b i cが握られていた。

本来は金色の輝きを放つQ—b i cだが、その色は黒く濁っていた。

先ほどの様にQ—b i cを使った捕獲方法。それに加え人通りの少ない場所での

不意打ちならで、魔法使い相手でも誘拐することは可能だろう。

「魔法が使えないっていうから、てつきりこれで終わりだと思っただけど」

眼の前の男は余裕を崩さない。

それどころか、笑ってさえいる。

自分の状況が分かっていないのか。

「ここは校舎のすぐ近くだ。今の騒ぎを聞きつけて、直ぐに教師たちが」

「無駄だよ！誰も僕たちに気づきはしない！」

奏華の渓谷に対し、君嶋は被せる様に否定の言葉を言うと、俺へ右手を向ける。

『『魔弾』』

瞬間、奏華の頬を何かがかすめた。

遅れて、それが君嶋の放った魔弾という事に気づいた。

「外れちゃったかあ。でもまあ、この威力も使っていれば慣れてくるよね」

「これが第一魔法だど!? 速さも威力も属性攻撃並みじゃないか!?!」

驚きを隠せない奏華を見ると、君嶋は嬉しそうに喜び始めた。

まるで子供が新しく買って貰ったおもちゃを自慢するように。

「すごいでしょう? すごいでしょう? これが Q—b—i—c の力! 僕の一力だよ!!」

再び野球ボールほどの弾を作り、俺へと向け、照射する。

俺は足に力を込めて、その場からジャンプする。

死神によって、強化された脚力により、今までの俺では決してできないようなジャン

プで魔弾を避ける。

動きの制限された、場所ならともかく、この広い中庭でなら動き続ければ、当たるこ

とはない。

「(後は、この騒ぎに気づいた誰かが、教師を呼んでくれれば!)」

「ツチ、ブランクって言われてる割りに、すごい身体能力だね。それ第一魔法の身体強化

じゃないの?」

「(学生相手に魔眼を使うと後々面倒なことになる…なら!)」

着地と同時に身体能力だけで、一気に距離を詰める。

今までの自分では到底真似できないようなスピード。

改めて自分の身体能力の変化に驚いた。

「だがすぐに思考を切り替えると、君嶋へ向けて、突き上げる様に蹴りを放つ。」  
「おっとー！」

君嶋は身軽に身体を動かし、奏華の蹴りを躲す。

「ツフー！」

地面についた足を軸にして、回転を加え放つ追撃の拳を振るうも、それすら躲される。明らかかな身体強化。

恐らく奏華に合う前に既に自身に魔法による強化を掛けていたのだろう。

「ちよこまか動かれるのは面倒だ」

君嶋は手をかざす。

その魔力が急速に高まっていくのを感じる。

「捕らえろ！『A b y s s (アビス)』!!」

「(ツ何?!)」

君嶋が叫ぶと同時に突如として地面から飛び出してきた黒い『ナニカ』。咄嗟に奏華は後方へ飛び、『ナニカ』から離れる。

着地すると、今まで立っていた所には複数の触手がうねうねと蠢いていた。

その触手は先ほど奏華を捕らえようとした檻と同じ色をしていた。

「(変幻自在のQ—b i c…なのか?)」

対魔法使い戦に置いてQ | b i cの有無は大きな戦力差となる。

第一世代の魔法に加え、属性による攻撃のバリエーション。

属性武装による、戦闘の強化。

実際、奏華の勝てる可能性はかなり低いものだろう。

だが、勝算はあった。

それは少しでも多くの時間を稼ぐこと。

そうすれば、この騒ぎを聞きつけた教師たちが集まって：

「…？」

いや、どこかおかしい。

そもそもここは校舎付近の中庭。

幾ら下校時間と言っても、誰一人として、ここへ来ないのはおかしい。

「…まさかッ!？」

奏華は足元の石を掴むと、校舎の壁へ向けて勢い良く投げつける。

しかし、石は校舎の壁に当たることなく、何も無い空間で弾かれる。

その光景を見たことがあった。

それは魔物に襲われた時だ。

「…見えない壁か！」

もし、この見えない壁が、視覚情報や音も消しているのだとしたら、恐らく救援は来ないだろう。

だからこそ、君嶋はあれだけの事をしても余裕でいられたのだ。  
この現状を知るものは…いない。

退路を断たれたと知った奏華はその一瞬、動きを止めてしまった。

「油断大敵だね」

一瞬の油断。

地面から生えた触手は俺の四肢を蔓の様に巻き付きながら、動きを封じる。

磔のようにされた俺は身動きが取れなくなった。

千切ろうと力を込めるが、拘束はゴムの様にぶよぶよしていて、外れそうもない。

どこか覚えのあるその感触に違和感を持ち、君嶋の属性武装と思われるものを視覚する。

泥のような見た眼に、嫌悪感すら…。

「(いや…違う!これは…これは属性武装なんかじゃない!これは…)」

「ガハッ!」

四肢を固定された状態で、強化された拳が腹に叩き込まれ。奏華の身体がくの字に曲がる。

次いで、顎に拳が飛びチカチカと視界が点滅する。

バチバチと脳が痺れる感覚と共に奏華は力なく、うな垂れる。

朦朧とする意識、頭がクラクラして手足の痺れがひどく、まともに動かす事が出来ない。

その様を、君嶋は表情を変えることなく見ていた。

その光景を最後に、奏華の意識は闇に飲み込まれていった。

## 第十五話

八神奏華は身体がダルイことを感じながらゆつくりと瞼を上げる。

「う……あ……」

頭がクラクラする。

無意識に手で頭に触れようとしたが、できなかった。

それもそのはず、奏華の両手、両足はガムテープでグルグル巻きにされており、まともにも動かすことが出来ない。

首を動かし、未だぼんやりとする頭で、状況を確認する。

辺りに生い茂る無数の木々。

それは空を覆い尽くし、日の光を遮り、唯一の灯りは、無造作に置かれた、仄かに灯るランタンだけだった。

ランタンの灯りを除くと、辺りは薄暗く、まるで建物の中にいるような気分だ。

そんな所に俺は両手足を縛られ、転がされていた。

「(どう考えても、やばいよなあ)」

なんとか移動できないかと、後ろ手に拘束された腕に力を込めてみるが、ガムテープ

は破けることはなく、ビクともしない。

やがて暗闇に眼が慣れ始め、近くに人がいることが分かった。

奏華から斜め左右に、三角形の位置に同じ様に両手足を縛られた、男子生徒が一名いた。

「…痛つてえ、あん？」

男子生徒が目を覚まし、その目線が奏華へと向けられる。

「あ!! テメエ、ブランク!!」

奏華を見るや否や、食い掛かる様に身を乗り出したが、両手足が縛られた状態でもともに動くことが出来ず、顔から地面に倒れ込む。

「痛つてえ!!」

「(ああ、コイツは)」

君嶋という男子生徒に課題をやらせてた、不良の一人だ。

彼は暗がりで俺の状況が分かっていないのか、拘束を外せと抗議してきた。

「はあー」

「なに溜め息ついてんだよ! テメエこれを早くほどけよ!」

「あのなあ、よく見て見ろ、俺もアンタと同じ状況なんだよ!」

男の言動に呆れながら、奏華は縛られた両手足を持ち上げる。

それを見た男は舌打ちをすると、拘束を外すために腕に力を込め始めた。  
「ふんツ！このツ!!やろおツ!!」

だが、奏華と同じようにどんなに力を込めても、破くことはできない。  
やがて男は疲れ果て、はあはあと肩で息をする。

「クソツ何なんだよこれ!!」

自分より慌てている者を見ていたら、幾分か冷静になれた。

「少しは落ち着け、俺のブーツにー」

ナイフが入っているから、そう言おうとした奏華を遮る様に、暗い森に草を踏みしめる足音が聞こえる。

誰かがこちらに向かってくる。

「やれやれ、縛っていても騒がしいな。口も押えていた方が良かったかな?」

俺でも彼でもない声が、段々と近づいてくる。

男と俺は声のした方へ視線を向ける。

そこには俺と、恐らくこの男子生徒をここへ連れてきた張本人——君嶋が立っていた。

「おいーてめえ!!君嶋あー!さっさとほどきやがれ!」

男は現れた者が、自分のよく知っているのだと分かると声を荒げ、再び暴れ始めた。

「…ある意味驚きだよ。君はこんな状況になっても、そんな生意気な事が言えるなんて

ねえ」

君嶋は呆れたような声でそう言うと、男へと近づき。

「あ？ テメエ何言つて…ぶっ!？」

言葉の途中で男の顔が蹴り飛ばされ、地面に倒れる。

「僕が上だ。黙つてろよ」

君嶋は倒れた男の顔に足を置いて体重を掛ける。

抵抗できない男は苦悶の表情を浮かべるが、それでも君嶋を睨み続ける。

「テ…メエ…」

「つまりこれはアレか。いじめられた復讐つてどこか？ それにしては随分やることが過

激すぎないか？」

奏華の質問に、君嶋は男に向けていた視線をこちらに向ける。

「まあ、全くないと言ったら、嘘になるけど、それが全てじゃない。僕はね強くなりた

んだよ」

子供が自分の夢を話す様に、楽しげに話す君嶋。

それに対し、男が先ほどの仕返しとばかりに、吐き捨てる様に言い放つ。

「ハンッ、テメエみたいな不意打ちの卑怯者でCクラス如きが強くなれる訳ねえだろ」

「(バカッ挑発するな!!)」

「…五月蠅いな」

スツと君嶋の目が細められる。

それに合わせ周りの空気が重くなるのが分かる。

その手には黒い『Q—b i c』

「出てこい『A b y s s (アビス)』!!」

君嶋の声にこたえる様に、手のひらの『Q—b i c』がドロリと溶け出し、地面へと零れ落ちていく。

一面に広がる黒いモノ。

それは少しずつ動きを変える。

まるで鼓動するように、生きているように。

「う、あ…」

それは俺と男、どちらから出た声だろう。

もしかしたら、両方から出た声なのかもしれない。

湧き出るのは抗いようなない恐怖と嫌悪。

ズズツ…ズズツ

黒いモノはゆつくりとこちらへと近づいて来る。

「あ、ああ…」

俺と同じように両手足を拘束された男はその存在に恐怖し、カタカタと震え出す。

「何を…するつもりだ？」

それは奏華の口から無意識に出た言葉。

これから起こるであろう未来を予測できるからこそ漏れた言葉。知っていても決して受け入れることが出来ないだろう。

君嶋はそれに対し、ニヤツと口角を上げると…

「…ゴミの有効活用」

君嶋が男へ手を向けた瞬間、黒いモノは一瞬にして距離を詰める。

男の横たわる地面が黒く染まる。

「ひっ…なんだよこれ！おい君嶋！君嶋あ!!」

男の身体が少しずつ、地面へと沈んでいく。

少しずつ飲み込まれる恐怖に耐えきれず、その目に涙を浮かべ、必死にもがいて抵抗する。

しかし、そんな抵抗も虚しく、黒い地面へとゆっくりと飲み込ませる。

耳を塞ぎたくなるような絶叫。

男は恥も外聞も捨て去り、子供のようには喚き散らす。

「ハハハ、安心しなよ。殺しはしない。けど君には電池になつてもらおう。僕の力を底上

げする電池にね」

奏華はそんな状況に耐えきれず、塞がない耳の代わりにギョツと眼を瞑る。

それでもこの状況を何とかする為に君嶋にばれないように

震える指でブーツへ隠したナイフを取る為に手だけは動かした。

「(落ち着け…落ち着け)」

そう言つて恐怖にでおかしくなりそうな自分を無理やり奮い立たせ、手を動かす。

どのくらい経つたのだろう。

飲み込まれるコプコプいう音も、男の叫び声も、いつしか聞こえなくなつていた。

「(もう少し…で)」

ナイフが最後の箇所を切り終える。

手足が自由になつた、奏華はゆっくりと眼を開ける。

黒いモノはまだそこにいた。

波打つ波紋は、まるで味わつているように見えた。

そして君嶋もその光景をじつと見つめていた。

その光景に耐えられるはずもなく、奏華は音を立てないようにゆっくりと後ろへ下が

る。

助けると言う選択肢なんて出るはずがない。

奏華の頭にある選択はただ一つ。

一刻も早く、この場から逃げる事だった。

「ハッ……ハッ……ハッ……」

呼吸を忘れるほどの圧迫感。

それでも動かない足を必死に動かす。

足場の悪い木々の根を飛び越え、かき分け、必死に走る。

少しでもあの黒いモノから離れるために。

「あっ?!」

足に何かが絡みつき、俺は盛大に転んでしまった。

見ると地面から生えた黒いモノが俺の足に絡みつくようにしていた。

「アハハハハッ！ダメだよ、だーめ！逃げるなんて許さないよ。君にやることは沢山あるんだ。だって君は……貴重な栄養なんだから。」

暗い森の奥から君嶋が、ゆっくりと近づいてくる。

あの黒いモノを引き連れて。

「ぐっとう……っのっ!!」

ナイフを絡みついた黒いモノへ向かって斬りつけるが解ける様子はなく、ビクともしない。

黒いモノは俺の手足をそれぞれ木に縛り付けると俺の身体はXのように磔にされる。

手足に感じるブヨブヨした気持ちの悪い感触。

そうだ、この感触には覚えがあった。

「お前！それが何かわかってるのか！」

「…何とは？」

奏華は早金のように鳴る心臓を抑え、考える。

君嶋は先ほどから、黒いQ—b i cの事を属性武装と呼んでいた。

奏華自身も体験した、認識障害。

もしかしたら君嶋にもそれに似たことが起きているのではないのか。

だとすれば、それを利用すれば、奴を動揺させて、隙を付けるかもしれない。

奏華は手に持ったナイフに力を込める。

「お前の使っている、それは…そのQ—b i cは…魔物なんだぞ！」

魔物、その言葉に僅かに目を見開く君嶋。

だがそれはすぐに嘲笑へと変わった。

「バカか君は。魔物を従えられるわけないだろ？」

「おかしいとは思わないのか？属性武装が人を飲むなんて、その特徴はまるで魔物じゃないか！」

「属性武装は多種多様、理由にならないなあ」

君嶋はうすら笑いを浮かべながら、泥へ指示を出そうと手を上げる。

「だが!!もし魔物が人の魔力を食らうためにお前を利用しているとしたら？」

ピタリツと君嶋が動きを止めると俺の顔をじつと見る。

続けるという事だろうか。

俺は乾いた唇と舐めると言葉を選びながら話を進める。

「俺は数日前、学生寮の前で獣の姿をした魔物の群れに襲われた。もし、その魔物が使役されていたのだとしたら？」

少しでも多く、君嶋が違和感を持つものを指摘し、説得する。

最悪の場合、その隙をついて、このナイフで足を狙う。

暗闇に眼が慣れた今なら、殺さずに動きを封ずることも出来る筈。

「お前も何かしらの能力が使われて、認識障害を持つていたら？俺にはお前のQ—bicは黒く見えるし、俺を拘束しているコレは魔物の泥にしか見えない。お前は違うモノに見えているんじゃないのか？少しでも違和感があるのなら」

「もういいよ、君の言いたことは分かった。だから…」

もう嘘はいいよ。

君嶋がそう言うと同時に、ぐちゃりと何かお腹を挟り中へ入ってきた。視線を下に向けると冷たいソレは、あの黒いモノだった。

「これはあ、僕のお、属性武装だあ！」

「あ、あああああああああ!!!」

耐え難い痛みに、俺は喉が潰れるほどに叫んだ。

同時に身体から血と共に魔力が体外へと流れていくのがわかる。

「アハハハハ!!即興で作ったにしては面白い話だったよ!!でも残念そんな嘘に騙される僕じゃない」

俺の魔力を吸い取って、魔物が喜ぶように波打っているように見える。

「君は他とは魔力量がケア違いだ。確実にレベルアップできるよ！」

そうしたら、そうだなあ。まずはこの学園を潰す。人を差別をする学園なんて潰れちやえばいいんだよお!!」

キーンと耳鳴りがする中、君嶋の声が微かに聞こえる。

潰す?この学園を?

そんなことをすれば…希沙羅が…悲しむ。

こいつは、希沙羅の障害となる存在なんだ。

そんな…そんなこと…ユルセナイ。

「させ…ない！」

左眼が燃える様に熱い。

力の入らない手で黒いモノを掴む。

俺の抵抗に、魔物は怯まない。

それどころか、更に肉を抉り、俺に悲鳴をあげさせようとする。

俺は必死に痛みを耐える。

前にもあつた、死と隣り合わせの戦い。

いや、“前”も今も戦いなんて呼べるものではない。

どちらも一方的な蹂躪。

弱い者が強い者に喰われるだけの弱肉強食の世界。

それは、不平等の世界。

頭の中がチリチリ痛む。

相当な魔力を溜め込んだ魔物に対し、こちらの武器はナイフ一本と

死神としての身体能力、そして魔眼。

ナイフではビクともしない。

捕まる前にコピーした魔法は既に時間切れ。

今はもう使えない。

足りない、モット、もっと別の力が…。

段々と意識が薄れていく。

ああ…なに…やってんだろな…俺は…

浮かぶのは妹の…桜花の顔。

『兄さん一人の命ではないんですよ?!』

「あ…あ、そう…だ。俺は…死ね…ない。この身体は…もう俺一人のものじゃないんだ

！」

「はあ?なに言ってるの?あまりの痛みに壊れちゃった?」

俺を人のみにするように、泥が膨れ上がり、口を大きくを開ける。

俺は喰われるだろう。

そして…希沙羅は?桜花は?

ああ、そうだ俺は大事な所でいつも失敗する。

悪い癖だ。

「ちく…しよ…」

だがその刹那、絶体絶命の中、一筋の希望がその場に現れた。

俺を飲み込もうとする泥より先に、俺の身体を覆った黒い影。

「…誰か忘れているのではないですか？」

泥は貫かれた箇所を切り捨て、残りの身体を縮こませながら後退する。切り落とされた箇所はシユウシユウと炭酸のような音を立てて地面に溶けていく。

「デビュー戦にしてはいささか、華のない方ですが…まあいいでしょう」  
ここ数日聞いていた声が、今は妙に懐かしい。

君嶋が驚きの声を上げる。

「っ!?!君は?」

黒の制服を彩る、銀色の絹のような美しい髪。

最後に見た顔色の悪さはなく、力強く輝く瞳。

モノクロだった世界に、色彩が蘇る。

この世のものとは思えない、どこか儂く、それでいて美しい。

それほどまでに、彼女は美しかった。

あの暗い森を止まることなく、一直線に駆け抜けてきたのか。

制服には無数の葉が付いていたが、彼女は気にした様子はない。

スカートの端をつまみ、さながら舞台上に立った役者のように、優雅にお辞儀をする。

「お待たせいたしました。兄さん。貴方の妹が、今到着いたしました」

「絶好の見せb…コホン、間一髪。流石の悪運です。兄さん」

『影遊び』

桜花がそつと言うと、俺の手足を拘束していた泥を削る様に影が円を描く。

流れる血と共に力なく奏華が倒れる。

その光景を見ながら君嶋が泥を集合させる。

「君のことは知ってるよ。噂の転校生さん。魔法使いとしては優秀…でも身体の弱い学生。八神桜花さん」

「有名で何よりです。特に光栄でもありませんが」

桜花の変わらぬ対応に、君嶋は眉をひそめる。ボロボロに兄に、君嶋の持つ変幻自在の泥。

この状況を見ても態度が変わらない桜花に疑問を持っているようだった。

「君、身体弱いんでしょ？僕と戦ったら死んじゃうかもよ？大丈夫？」

挑発する君嶋。

彼の足元で泥が渦巻く。

まるで君嶋に同調して桜花を嘲笑うように

しかし、桜花の態度は変わらない。

「問題ありません。私はほんの少し手伝うだけ。だって貴方と戦うのは兄さんなんですから」

桜花の発言を聞いて、君嶋はポカーンと口を開け、呆気にとられる。

そしてそれは嘲笑へと変わる。

「あはは！ひどい妹だな！こんなポロポロの兄を見て、それでも戦えって！やつぱりそうさ。魔法使いつてのは強ければ強くなるほど偉そうな奴ばかりだ！弱者の気持ちを考えてこともないんだ。だから僕が変えてやる！こんな世界を変えてやる!!」

大笑いする君嶋に対し、桜花は何も言い返さない。

その目は、目の前の少年を憐れむように見ていた。

「…なんだよその目は？」

桜花は人差し指を君嶋へ突きつけ、自信満々に堂々と宣言する。

「あなたの物差しで彼を計らないでもらえますか？」

少なくとも、この人は馬鹿みたいに他人に頼ることなく、よく死にかける人です。

彼も馬鹿ですが、貴方は大馬鹿です。

己の未熟さを認めず、全て周りのせいにして。これまで積み重ねてきた努力を捨ててまで

禁忌の力に手を出した愚か者なのですから」

「…何だと」

君嶋はぎりつと奥歯を噛みしめる。

その目に宿る感情のは怒り。

「力を求めてなにが悪い!!」

「力そのものを求めることに善も悪もありません。問題はその使い道。

ですが貴方は、その力を手に入れた後、一体何をしましたか？」

「そ、れは…」

君嶋が見せる、初めての動揺。

桜花は構わず続きを話す。

「己の力を手にした途端。あなたが初めに行った事。他者を襲い、さらなる力を求めようとした。

そのどこに正しさがあるのでしょうか？

力を求めることに、限界なんてありません。

自分で定めなければ、もっと、もっとと求めていく。

他人を犠牲にして得た力で、更に力を求める。

貴方のやっていることはただの悪であるということが、貴方自身、分かっているのではないですか？」

「う、うるさい！うるさいっ！！僕は強いんだ！もうあんな惨めな自分になりたくないんだ！！」

「言葉ではもう届きませんか、兄さん！いつまで寝ているんですか！もう十分回復しましたよね？」

桜花の呼びかけに対し、君嶋は鼻で笑い飛ばす。

「何を言っているだ。こいつはもう重症。立ち上がることだつて……」

「え？アレ？……立てる」

「はあ?!?!あれだけポロポロだったのに？あんなに血が出ていたのに？」

「なんで立ち上がれるんだよ!!腹に穴だつて！」

驚く君嶋が目にした奏華は、無傷だった。

いや、制服の所々はポロポロであり、泥が刺した箇所の制服部には穴が開いていた。

だが、その身体にはかすり傷すら無くなっていた。

「肉体的な損傷など、魔力があればいくらでも塞ぐことができます。」

私がいる限り、魔力を血液に代替えし、破れた皮膚の代わりとして、その穴を魔力で

塞ぎましょう」

よく見ると、先ほどまで余裕そうだった、桜花の呼吸は荒く、額には汗をかいていた。だが、君嶋は彼女のそんな変化に気づくことはなく、その発言に対し、嘲笑ではなく、驚愕の表情を浮かべる。

「なんだよそれ！あり得ない！治療なんてもんじゃない。魔力の変換をそんなことに使えるはずがない！人間の脳にそれだけの情報処理ができるはずがない！！」

「貴方たちの尺度で私の限界を計らないでもらえますか？まあ、今も頭の奥がチリチリと痛みますが、まだ耐えられます」

「ツーこの！！」

君嶋は泥を桜花へと向けるが、俺は桜花を引つ張り、その攻撃を躲す。

二人の視線は真つ直ぐ、敵を捉える。

「た、立ち上がったからなんだよ。僕にはこれが、この属性武装が！！」

「ほんつと、お前つて良いとここで現れるんだな。なんだよその登場シーン。カツコよすぎだろ」

「悔しかつたら、次は貴方がしてみして下さい」

「はっ！たかが傷がふさがったくらいで！最初に戻っただけじゃないか！！」

「(いいえ、最初に戻ったわけではありません。私が来たことで、既に決まりました。兄

さんの勝利が、ね)」

不敵に笑う桜花。

その瞳には自信と確信に満ちていた。

「さあ、兄さん。思う存分使ってください。あなたの力になるかもしれないもの。二度目のお試しサービスです。使い方、分かりますよね？」

俺が死んだら桜花も死ぬ。

それでも眼の前の少女は命を懸けて俺にチャンスをくれた。

彼女の覚悟に、応えなければいけない!!

「…影遊び!!」

そう叫ぶ彼の前に、影の剣がその姿を現す。

どこかひんやりとした柄を握り、一気に引き抜く。

「覚悟しろ君嶋。お前の罪、償ってもらおうぞ！」

## 第十六話

「うおおおおおおお!!!」

影の剣を両手に握り、君嶋の場所へと一気に距離を詰める為、地面を蹴って駆ける。

「ツ!!アビス!!」

向かってくる奏華を迎撃するために、君嶋は泥へと指示を飛ばす。

それに合わせ、泥はいくつもの鋭利な形を作り出す。

そして…

ーガガガガガガガツツツ

銃弾のように発射され、容赦なく奏華へと襲い掛かる。

「…ツ」

身体を捻り、その射線から避ける。

だが、泥は直ぐに軌道修正をすると、奏華を捉える。

「ツおお!!」

視界のすぐ近くにあった木の後ろに入り込む。

ーガガガガガガガツツ

だが一息つく間もなく、轟音と共に木が抉れ、木屑が散らばっていく。

ココも長くは持たない。

ーガガガガガガガガガツツ

休むことなく打ち続けられる泥の雨によって、徐々に木の面積が失われていく。

削られた箇所から泥が容赦なく、奏華を貫く。

肩を掠め、脇腹を抉る。

「くそっ、これじゃまともにも近づけない！」

与えられた身体能力をもってしても、この攻撃すべてを避けることは難しい。

ならばと、奏華は木の陰から飛び出し、再び君嶋へ向かって駆けだす。

奏華は致命傷となる箇所を最小限の動きで避ける、または剣で叩き斬る。

それ以外の箇所を容赦なく貫く泥の雨。

切り裂かれた皮膚はすぐに修復されるが、終わらない泥の攻撃によって、また新たな傷を作り出す。

辺りには出血死してもおかしくないほどのおびただしい血が飛び散り、血だまりを作る。

それでも奏華は止まることはない。

ひたすらに斬撃を繰り返す。

なぐように、両断するように、かわし、削る、かわし、削る。何度傷つこうとも、何度弾き飛ばされようとも、決してその足は止まらない。

傷がふさがつても、痛みは残る。

出血死はしなくとも、血の匂いで吐き気がする。

頭がくらくなる。

それでも少し、また少しと、君嶋へと近づいていく。

「なんだよ、なんなんだよ!!君はあ?!

かすむ視界の中で、君嶋の顔が焦り始めたのが見える。

その影響か、少しずつだが魔物の勢いが弱りつつある。

「痛いだろう?辛いだろう?だったら退けよ!!向かってくるなよ!!」

先ほどまでであった余裕の表情は既に消え失せ、君嶋は目の前の光景に戦慄していた。

ありえない、だつてそうだろう?

そうまでして、『今』君嶋を追いかける理由はないはずだ。

学園に戻って、教師にでも頼ればいい。

背中を丸めて、逃げればいい。

なのに、奏華は向かってくる。

傷が出来る度、その表情を歪めているのに、痛みを苦しんでいるのに。

こちらの方が有利のはず、なのに…。

「(なんで僕は、負けそうだと思ってる!? 圧されていると思っただけ!?)」

この属性武装によって、君嶋はどこまでも強くなれるはずだった。

その為により多くの魔力を必要とした。

少しでもリスクの少ない相手を選び、魔力を溜めた。

今回も同じはずだった、いや、今までの奴らより簡単に済むはずだった…なのに。

何故だ…どこで間違えた？

奏華はすぐそこまで近づいていた。

「僕が…負けるはずがないんだあ!!」

追い込まれた君嶋はその両手に強化の魔法を掛け、肉弾戦を挑む。

その拳を奏華へ向けて、叩き込む。

何人もの人を取り込み、魔力を溜め込んだ君嶋の一撃を受ければ、奏華の身体は砕け、

沈むだろう。

だが…。

「アクセスツ!!」

俺は、その千載一遇のチャンスを逃さない。

左眼に手を当て、魔眼を使う。

世界は反転し、視界は赤く染まる。

そして六つの空白を残し、巨大な歯車は回り出す。

奏華の左眼は紅く染まり、魔眼が起動した。

「(この暗がりなら、見られる心配はない。写させてもらうぞ、お前の魔法)」

八神奏華の持つ能力：魔眼。

その眼で見た魔法を一定時間コピーし、自由に使用する能力。

その特性から、希沙羅からは『鏡の魔眼』と呼ばれている。

魔法をコピーすると言えば、聞こえはいいが、魔法自体は魔法使いであれば誰でも出来る当たり前の事。

相手が強力な魔法を使えば、こちらもそれを使うことが出来る。

しかし結局これは、じゃんけんで言えば、相手がチョキを出すことで、ようやくチョキが出せるという事だ。

これを使って、ようやく魔法使いと同じ場所に立つことが出来る。

そして今、君嶋の使用している強化魔法を見ることで、読み取り、自分の物にしていく。

直ぐに強化の魔法を発動し、自身に掛ける。

奏華の膨大な魔力が腕、足へと流し込まれる。  
温かい膜に包まれる感覚。

剣を手放し、腕を大きく振りかぶる。

「希沙羅の学園を…壊して…たまるかあ!!」

渾身の力を込め、君嶋の拳より先に叩き付ける。

「ぎゃふっ!?!」

その一撃を顔面に受けた、君嶋はゴロゴロと地面を転がり、やがてその動きを止めた。

「はあ…はあ…」

それを見届け、ようやく奏華の緊張が解ける。

肩で息をしながら、全身から疲れがにじみ出る。

「全く、無茶し過ぎです」

背中から落ち着き払った声で、桜花が近づいてくる。

そつとハンカチを取り出すと、血に汚れた俺の顔へと当てる。

そこにあるはずの傷はなく、それ以上血が流れることはない。

あつという間にハンカチは血で汚れてしまった。

「見届けましたよ、貴方の覚悟」

最初にあつた時は信用できなかつた。

だがこの数日の間で彼女ならと思うようになった。  
奏華のためにここまでしてくれて彼女のことを信じようと。

「桜花…俺は…」

「…ッ!?八神君!!」

桜花が息を飲んだ後、直ぐに叫ぶ。

そして…それは奏華の背後から、聞こえた。

誰かの立ち上がる音。

直ぐに後ろを振り向く。

そこでは君嶋がヨロヨロと立ち上がっていた。

その目には光が無く、まるで操り人形のように虚空を見つめていた。

その手には黒いQ | b i c 。

―ズズズズズズズツ!!

黒いQ | b i c から泥状の魔物が溢れ返る。

これだけの量、まだ隠し持っていたのか!!

あふれ出た泥は、君嶋の近くで、渦巻く。

やがて魔物はその形状を変化させ、3 m前後の大きな口へと形作る…そして。

―バツツツツクン!!



「直ぐに、ここから離れましょう」

「…」

「八神君！八神君！！」

桜花に肩を叩かれ、ようやくハツとする。

彼女の顔は焦りが視るが、それでも藍色の瞳に絶望の色はなかった。

桜花は俺を支える様に腰に手を回し、脚に強化を加えると、一気に距離を離す。

そんな動きは、獲物を前にしたTレックスの前では緩慢に等しい動きだった。

「なっ！！」

その巨体とは裏腹に、Tレックスは咆哮を上げると、突進してきた。

周りにある木などお構いなく、なぎ倒しながら、迫ってくる。

風圧の起る俊敏な動きで、直ぐに距離を詰められる。

その身体を回転させ、ヒュンと薙いだ尾が重い風切り音となって、二人の身体を捉えた。

咄嗟の判断で、桜花を庇う。

奏華達の身体が風圧と共に吹き飛ばされ、何度も地面を転がり、10m先まで飛ばされた。

「ぐあっ…」



そして、壁ができると同時に、Tレックスが壁に激突する。

Tレックスは泥の瞳をギョロリと動かし、自らの進行を阻む壁を睨みつける。

桜花の出した影の壁は、ギリギリの状態でTレックスの突進を押し留めている。

それを理解しているのか、Tレックスは何度も壁に突進を繰り返す。

その度に、壁も少しずつダメージを蓄積していく。

所々ヒビ割れていく。

このままでは、破壊されるのも時間の問題だろう。

先ほどから、身体の痛みが引いていかない。

魔物に奪われ、度重なる魔力の消費により、奏華達の魔力も尽きかけているのだ。

恐らく、これ以上傷の回復は望めないだろう。

それに例え逃げたとしても魔物の速さは俺達を凌駕する。

先ほどの様に追いつかれるだろう。

「(それに……)」

背中に当たる何かの感触。

確かに俺は今何かによる掛かっているはずなのに、自分の背中には何も無い。

見えない壁。

あれを壊したのは桜花。

そして彼女も今は防御で手一杯。

逃げ道はない。

どうすればこの状況を打開できる？

考えろ…考えろ。

…君嶋の持つていたあのQ—b i cに似たモノ。

魔物はあの中から出てきた。

恐らく、あのQ—b i cから自在に出し入れできていたのだろう。

それなら、また閉じ込めることも出来るんじゃないのか。

あれは君嶋が持つていた。そして…そのまま。

つまり、今は奴の腹の中に。

「桜花ツ!!もう一度使わせてくれ、あの剣を!!」

魔物を必死に食い止める、桜花へ声を飛ばす。

片膝をつき、肩で息をしている桜花。

その息は荒く、無茶をしているのがよく分かる。

それでも今あるものを全て使わないと、この状況を打破できない。

俺の考えを察したのか、それは分からない。

だが桜花はその首をしつかり頷かせると、右手を俺へ向ける。

「影遊び！」

地面からゆつくりとその姿を現す、影の剣。

滑らかな刀身が闇夜に光る。

奏華は剣を引き抜き、構えると、眼を閉じ、魔力を集中させる。

「(落ち着け…落ち着け…)」

君嶋から写し取った魔法はまだ使える。

その魔法で残った魔力を全て、強化へ割り当てる。

脚力…向上。

腕力…向上。

視力…向上。

頭の中がビリビリと痺れる。

これ以上は止めると、脳が警告する。

それでも、奏華は強化を続ける。

聴力…向上。

反射神経…向上。

ピシッと何かが碎ける音が耳に聞こえる。

「八神君!!」

最後の守り、壁が破壊された。  
刹那。

魔物の巨大な尾が俺達のいる場所へと薙ぐ様に叩き付けられる。  
地面を揺らす轟音。

その衝撃によつて、地面がひび割れ、辺りには粉塵が舞い視界が悪くなる。  
そんな粉塵を利用し、魔物へ向かう影。

桜花を片手で抱えた奏華だ。

更に強化した身体で、間一髪、桜花を連れて回避することが出来た。  
強化された視界によつて粉塵の中でも魔物を視界に入れる。

狙うはその足。

魔物もすぐに奏華達を発見し、咆哮と共に尻尾で薙ぐ。

奏華はその攻撃に当たる前に、素早く踏み込み、一気に跳躍する。  
激しく動いたたび、身体がバラバラになりそうなくらい痛む。

それでも決して止まらない。

手に抱いた桜花を決して離したりしない。

魔物の足元に着地した奏華は、剣を振りかぶり。

「おおおおおおおおおっ!!」

魔物の足へ刃を突き立てる。

ズブズブという耳障りな音を出しながら、影の剣が切り裂いた。

『GRRROOOOOOOOOOOOOOOOAAA AAA AAA AAA!!!』

片足を失った魔物はバランスを崩し、咆哮を上げながら衝撃と共に倒れる。

「もういっちょおおおおおッ!!」

その腹に突き刺し、縦一線に切り裂く。

切り裂かれた鱗が、肉が、泥へと変化し、ビチャビチャと音を立て地面に落ちる。

強化された視力によって、その中で鈍く光るものが見えた。

「…見つけた!」

地面に落ちた泥の中、鈍く光る黒いQ—b i c

それに手を伸ばす…が。

「なっ!?!」

手に取る前に、散らばっていた泥が、黒いQ—b i cを取り囲み、Tレックスへと集まっていく。

『GRRROOOOOOOOOOOOOOOOAAA AAA AAA AAA!!!』

咆哮を上げるTレックス、切り取った足も、徐々に修復されていく。

「これ、どうすんだよ。再生が尋常じゃない！」

回収しようにも、Q—b i cは散らばった魔物によって先に回収され再び取り込まれる。

落ちる場所がランダムな上、何度もTレックスの腹を搔つ捌く必要がある。

このままではQ—b i cを手にかかるとすらいけない。

ただこれで分かった事がある。

「ですが八神君の想像通り、あのQ—b i cモドキがアレにとって重要みたいですね」

「だが、これじゃ運良く近くに落ちてくれないと。こっちの魔力が先に尽きる」

Tレックスは、まだ動けないようだが、それも時間の問題。

直ぐに足の修復も終わるだろう。

先程の攻撃も、そう何度も出来ることじゃない。

どこか後ろめたそうに目を逸らす桜花。

「一つだけ、この状況を解決できるかもしれない方法があります…ですが」

桜花の歯切れが悪い。

「それは？もつたいぶらずに教えてくれよ！」

「私たちが…完全な死神となることです。」

「完全な…死神？」

「はい、今の私たちはいわば、肉体と魂が離れた状態。貴方の身体に私はおらず、不完全な融合なのです。それを完全体にする。そうすれば、あるいは…」

「あの魔物にも勝てる…」と

「私は嘘をつきました。今の貴方は死神ではありません。

ですが、融合すれば、貴方は完全な死神となる。

貴方の魂と身体は、もう人間ではなくなるのです」

人間ではなくなる…？

そっか、それなら。

「なんだ、そんなことか」

「そんな事って…貴方」

眉をひそめる桜花に対し、俺は自称気味に笑う。

「俺は元々、半分バケモノだったんだ。今更本物のバケモノになったからって、たいして変わらないさ」

そう、バケモノであることは変わらない。

後は俺自身の気持ちの問題だった。

希沙羅の学園を守るのなら、それも構わない。

「それよりも、お前はそれでいいのか？俺の事、信用できないとか言ってただろ」

「あの時はああ言いましたが、私は最初から契約を結んでも構いませんでした」  
ただ、と桜花は続ける。

「貴方…八神君自身で選んでほしかった。誰かに強制されることなく、八神君自身の意志で」

桜花は瞳を一度閉じ、再び開く。

今度は逸らすことなく。深い藍色の瞳で、真っ直ぐに俺を見つめる。

「改めて聞きましょう。八神奏華…貴方は人を捨てる覚悟がありますか？」

恐らく、これが最後のチャンスだろう。

引き返すなら今しかない。

それでも、俺は…。

「この学園を守りたい。たとえ俺が人で無くなっても。心は…人としての俺のままだから」

「…分かりました。貴方の覚悟…たしかに受け取りました。」

では、と続けると、急にその頬が赤く染まる。

「目を…閉じてもらっていいですか？」

「え？なんで？」

「いいから!!時間はありません!!」

「は、はい!!」

桜花のいきなりの剣幕に逆らえず、ギョツと眼を瞑る。

桜花の吐息が、直ぐ近くで聞こえる。

「ん…」

一瞬何が起こったのかわからなかった。

唇に触れる、柔らかい感触。

微かに香る、甘い匂い。

眼の前の光景に、脳が処理しきれず、何も考えられない。

そんな俺をよそに、桜花は腰に手を回し、抱きしめる。

唇で、匂いで、触感で、桜花を感じる。

優しい温もりを感じた。

自分がキスをされているのだと、理解するのに数十秒。

時が止まったような感覚。

「…」

桜花の吐息がすぐ近くで聞こえる。

やがてその唇が離れる。

それでも唇に残った感触は消えなかった。

「…外装形成」

桜花の眩きに合わせる様に、影が奏華達を取り囲み、覆い隠す。その形は、まるで黒く大きな卵。

そして変化は直ぐに起きた。

ミシミシと、ひび割れを起こし、弾け飛ぶ。

影のカケラが辺り一帯に衝撃と共に散らばる。

そこには一人の少女が立っていた。

黒でも銀でもない、漂白のように穢れない真っ白な髪。

細めの身体は華奢でどこか儂い印象を与える。

その外見とは裏腹に身に着けている服装は学園指定の男子服。

長いまつ毛をした眼がゆっくりと開かれる。

視界は先ほどと大して変わらない…が。

眼の前にいたはずの桜花がない。

『意識・思考共にリンク完了』

「…え？何？え？何この声？」

頭に響くアナウンスに驚いて出た声は、自分の知らない、聞き覚えの無い声だった。しかし、その声は今、自分が発している。



Tレックスは怒りを含んだ咆哮を上げ、一直線に突っ込んでくる。

その距離はすぐそこまで来ている。

背中に嫌な汗が流れる。

早く、早く早く早くはやくはやくはやく!!

「桜花!」

『ツいきます!!』

微かに光る刀身を両手に握り、力の限り降ろす。

『一刀両断!! 弾けとべえ!!』

放たれた黒の斬撃がTレックスへと直撃する。

『GRRRROOOOOOOOOOOOOOOOOOAAA AAA AAA AAA!!!』

その一撃さえも飲み込もうと、ぶつかり合う影と泥の奔流。

しかし、その泥の身体に限界は確実に訪れていた。

影の斬撃はTレックスを呑み込む。

『GRRRROOOOOOOOOOOOOOOOOOAAA AAA AAA AAA!!!』

響く断末魔を残し、その身体が徐々に崩れ落ちる。

その中にある黒いQ—b i cもパラインと音を立てて、砕け散った。

## エピソード

翌日、奏華は希沙羅に呼ばれ、資料室に来ていた。

希沙羅は椅子に座りながら、手に持った紙に視線を移す。

「報告書は読ませてもらった」

希沙羅は顔に手を当てて、頭が痛そうにしていた。

「学園生徒が…か」

苦虫をかみつぶしたような顔。

希沙羅なりに責任を感じているのだろう。

溜息を一つ吐くと、希沙羅は視線を奏華へ向ける。

「それで、彼の話だが…」

その時、希沙羅から聞いた話は、耳を疑うものだった。

「あ、お帰りなさい。八神君」

寮に戻った俺を出迎える桜花。

いつの間にか、『兄さん』が固定だったが、いつの間にか『八神君』になっていた。その事について聞くと。

『だって、その方が距離が縮んだ感じしません？もう協力者なんですし』  
とのことだ。

人前では『兄さん』二人の時は『八神君』と使い分けるらしい。

「…何かあったんですか？」

複雑な表情を浮かべる俺に何か感じ取ったのか。

単刀直入に質問をする。

「後で話すよ。少し整理したいし」

二人で食堂へ向かう。

席には既に二人分のティーセットが置かれていた。

準備のいいことだ。

「それで、詳しく話してもらおうぞ」

「詳しく…ですか？」

「お前は死神で、でも記憶が無くて、昨日のアレは何だ！女になったぞ！」

「質問が多いです」

…

「まずは昨日の状況整理ですね。攻撃を撃った後、八神君は直ぐに気絶してしまいましたし」

朝起きたら寮の自室で寝ていたから嫌でも分かる。

最近多くないか、こういうこと。

「その後ですが、砕けたQ—b i cから零れる様に行方不明者が出たんですよ。勿論、君嶋さんも含めてね」

希沙羅の話では全員命に別状はないらしい。

ただ、ひどく魔力が枯渇しており、当分入院する必要があるみたいだ。

「その後は、八神君の形態を使って学園長に連絡。その後の対応は早いものでした」

希沙羅は直ぐに医療班を送り、全員病院へ緊急搬送された。

その後は重要参考人として、桜花が希沙羅に事の顛末を話したそうだ。

「まあ多少はアレنجジしましたけどね。貴方の魔眼と私の魔力で君嶋さんを無力化したって」

「あんまり、魔眼使ったとか言わないで欲しいんだが…」

「はい、善処します」

ニツコリと笑う桜花。

これはあまり信用できないな。

「それにしても八神君はもう動けるんですね。魔力の回復が凄く早いんですね」

「ああ、そう言えば。てか、そもそもあんなに魔力使ったこと自体初めてだったからなあ」

「流石魔力タンクですね」

「不名誉な呼び名はやめろ！広めるなよ!!」

ただでさえブランクと言われているんだ。これ以上の呼び名は絶対勘弁。

「それで、学園長との話で何か気になる事でも」

「いや、そこまで大した話ではないと思うんだが…」

「聞かせてください。貴方の疑問は私の疑問。二人で考えれば解決するかもしれないかもしれません」

「…君嶋に襲われる前日。俺たちは様子のおかしい所を見たよな」

「ああ、あの時ですか。やけに泥だらけで、意味深な事を散々言っていましたね」

「あの時は気分が悪かったからそこまで考えてなかったが、アレのお陰で、君嶋に対して少しだけ、警戒心を持つことが出来たんだ」

「だけど…」

その先が、希沙羅から話された違和感。

『いや、君嶋 本人はずっと森にいたと言っておる』

…え？

『だから夕方にお主達と会ってなどいないと。嘘をついている様子はなかった』

『じゃあ、あの時のアイツは？』

『なあ、奏華。お主を疑うわけではないが。本当にそれは君嶋だったのか？』

「それは…単に記憶を失っているのでは？」

確かに桜花の言っていることも分かる。

だが、そもそも力を手に入れたからって、あんな行動と発言はリスクが高すぎる。

「…二人で考えればと言った手前、申し訳ありませんが、情報が足りませんね」

「そう…だな。考えすぎかもな」

完全に忘れるわけではないが、頭の隅に置いておこう。

「そう言えば聞きそびれたけど、お前の目的ってなんだよ」

「急に聞いてきましたね。私の目的…ですか？」

「ほら、お前が自分の正体言った時、言ってたろ。役割と目的って。契約も結んだんだ、教えてくれてもいいだろ？」

「ああ、私の目的……ですか。あくまで過程の話ですが」

そう言うと、カップの紅茶をグツと飲む。

あつという間に空になった。

『『狂い桜』の元に行くことです』

森の中を歩く小柄な人影。

「アハッ、もう終わっちゃった。ショージキ、興ざめ？」

手元の携帯をクルクル回す。

「まあ、ヒントもあげたし、トーゼンかなあ」

すると、手に持った携帯が振動する。

手慣れた手つきで操作を行い、電話に出る。

「はいはい、もしもし総帥？」

「うん、うん？ええ…本当に好き勝手にやらせるの？アイツにいい？今回も失敗したの  
にいい？」

「ふう〜ん、まあ総帥が良いっていうならアタシも反対はしないけどさあ」

電話を切った後、その携帯電話へ視線を向ける。

倒れる奏華と、ワタワタと慌てた様子の桜花が撮られた写真。

どう見ても隠し撮り。

しかも、その現場は昨日のTレックスとの死闘後の様子。

それを見て楽しそうに少女は笑う。

「頑張っつてね…八神奏華…いい」

最後の言葉は風にかき消され誰にも届くことはない。

華の少年の物語はここから始まる。

## 第一章・了

# 『幻影の刺客』

## 第一話

『永遠の愛など無い』と誰かが言った。

その言葉に衝撃を受けたのは、一体いつの頃だろうか？

誰かを想う気持ち、愛情も親愛も。

いつか消えてしまうというのなら。

ああ、だったら見つけよう。

自分自身の求める…永遠の愛と言うモノを。

だって僕らにとって、それこそがこの世で一番…欲するものなのだから。

ザワザワと風で木の葉が揺れる音が森全体から聞こえる。

まるで森がこれ以上奥へ進むことを拒んでいるようだ。

視界は相変わらず、木、木、木、木。

大して面白くない風景が延々と続く。

それでも前を歩いている銀の髪を持つ少女に付いていく。

目指す方向は分かっているのか、その足に迷いはなく、前へ進んでいく。

「…えつと確か、こつちだったような（小声）」

いや嘘だ。どうやら、おぼろげのようだ。

桜花は無意識に独り言のように呟いただけのようだが、奏華の聴覚は、その呟きを決して聞き逃さなかった。

無視できない状況だった、何故なら…

「…まさかとは思いますが、迷ったわけじゃないよな？」

ずんずん進む彼女についてきたは良いが、流星に歩き過ぎではと思っていた矢先に先ほどの発言。

まさか迷った？という思いと、いやあんなに自信満々に歩いていたのだからそんなことは。

と、俺の脳内で二つの意見がぶつかり合っていた。

だから、“一応”確認を取ってみる。

「…ッ!？」

桜花はビクツと震えた後、ゆっくりと振り向く。

まるで、錆びたおもちゃの様に。

効果音を付けるなら、ギギギだろうか。

「…(;。D。) ハイ、ダイジョウブデスヨ」

「おい、目を逸らすな。こっち見ろ」

「…(;。D。) ハイ、ダイジョウブデスヨ」

RP G に出てくる村人 A になってしまった。

そして、その目は相変わらず、俺へと向けられない。

視線は明後日の方を向いていた。

「(ダウトオ…)」

俺は思わず、頭を抱えなくなった。

既に森に入り始めて、一時間以上は経っている。

今から引き返しても、無事に出られるかどうか。

「てか、不安だったら最初から言えよ！」

「だって、一度通っている道ですから、何とかなると思ったんです!!」

「逆切れかつ！ かんっぜんに方向音痴の特徴じゃねえか!!」

森の中で言い合う八神兄妹。

騒いでも森の奥、喧騒は森へ吸い込まれていく。

俺たちがどうして森の奥へ向かっているのか。

それは少し前に遡る。

あの衝撃的な一日から一週間ほど経過した。

俺―『八神 奏華（やがみ そうか）』の生活は大きく変わったかの様に思われた。

しかし、実際はあまり変化という変化は起こっていない。

あの日から、魔物の姿を見ることは無くなり、今までの日常に戻りつつあった。

今日も今日とて、いつも通りの朝。

いつも通り、桜花に起こされ、朝食を取る。

俺たちは今、学園へと続く、通学路を歩いていた。

何も起きなさ過ぎて、あの日の出来事は夢だったのではないか。

そんな事を思う時もある。

「……」

横目でチラツと隣へ視線を向ける。

俺の視線に気づき、可愛らしく小首を傾げる。

それに合わせ、輝くような銀色の髪が揺れる。

自称 妹である死神の少女―『八神 桜花（やがみ おうか）』

まあ、どこまでが本当なのか、嘘なのか俺には判断することができない。

契約をしてから、桜花の体調が崩れることはなくなった。

よく分からないが、契約した事で、俺の魔力が常時送られる様で安定したようだ。

「…私の顔をジツと見ていますが、何ですか兄さん？」

ジーツと見つめ返す桜花。

俺は視線を外し、無視を決め込むと

桜花の目的を聞いた、あの日の出来事を改めて思い出す。

「狂い桜の所に行くって、何のために？」

「話したではありませんか、私はずっとそこで眠っていたと。目覚めた時は貴方を寮ま

で運ばなくてはいけなかったですし、その後は魔物の襲撃。とても行ける状況ではありませんでした」

つまり、魔物を操っていた君嶋を倒したことで、その余裕ができたってことか。俺の発言に桜花は眉をひそめる。

「その事ですが、まだ安心はできません」

桜花の懸念、それは寮の前で襲撃してきた『魔物』についてだ。

「寮の前で魔物に襲われた時ですが、あの魔物の群れは、普通ではありません。誰かが意図的に魔物を誘導したのだと思われれます」

自ら入れた紅茶を飲みながら優雅に話す桜花。

サラサラの髪が、夜の風によってなびく。

まるで一枚の絵画を映したような神秘的な光景だ。

「誰かって、それが君嶋だったんじゃないのか？」

俺の質問に桜花は少し考えるそぶりを見せるが肩をすくめ、ため息ひとつ。

「彼の発言を信じるわけではありませんが、八神君が襲われたのは君嶋さんが”黒いQ—bic”を手に入れる前です。そして彼にそれを渡した人物がいる。つまり…」

未だ、俺を襲った人物は捕まえられてないってわけか。

「君嶋さんの事も使い捨ての駒位にしか思っていないでしょう。ですがそうになると…」

そこまで来てようやく、桜花の言いたいことが分かった。

向こうにとつての使い捨ての駒に渡したつてことは“黒いQ—b i c”は。

「プロトタイプか…既に量産または、完成する目処が立っているのか、ですね」

重苦しい雰囲気、支配する。

まだ何も終わっていない。

それだけで、不安になる。

おもむろに桜花が口を開く。

「犯人は別にいると思つたもう一つの理由ですが、あの“不可視の壁”です」

どうやら俺が桜花を察に返した時、彼女は直ぐに戻ろうとしたらしい。

しかし、俺と魔物を囲うようにドーム状の見えない壁が出来ており、助けるまでに時間掛かった。

「私が壊せなかつたら、魔物に魔力も肉体も美味しくペロリッでしたねっ！」

笑顔でとんでもないことを言う。

あの鋭い歯で食られる事を想像するだけで寒気がする。

「おそらく、貴方の逃走と、魔物が移動しないよう張られたものでしょう」

「見えない壁…見えない壁かあ」

ますます分からない。

だが、それは恐竜型の魔物との戦闘中にもあった。

あの場に君嶋の協力者がいた？

そいつが“黒いQ—b i c”を君嶋に渡し、不可視の壁を作り、俺たちの妨害をした。「勿論、貴方の身体は私の身体同然です。誰が相手でも、貴方を死なせるつもりはありません」

曰く、俺の中には今二つの魂が宿っているらしい。

一つは八神 奏華の魂。

もう一つは眼の前の少女の魂。

本体—つまり俺が死ねば、肉体の無い桜花の魂は原型を保つことができなくなり、消えてしまうらしい。

「いずれの襲撃も被害は貴方へ向いています。警戒は十分してください。たとえ友人であつても、お菓子をくれても、警戒を怠らぬよう気をつけてください。知らない人や変な人に付いていっっちゃダメですよ」

「子供か、俺は！」

なんか途中からおかしくなってるし。

桜花は飲み終えたカップを水に浸し、片づけを始める。

「今の私たちはどうあつても後手に回るしかありません。敵さんが尻尾を出すまで……」

ね」

全てを疑え…か。

あまりいい気分ではないな。

「…回想シーンは終わりましたか？」

「回想言うな…って、おい。まさかお前…」

「見ていませんよ。と言いますか、もう見れませんか」

桜花は俺の身体に入るまでの記憶が無いらしく、今持っている記憶と知識、役割は本来の彼女に与えられたものと、俺の記憶から得ているらしい。

俺の記憶といつても、希沙羅に会う前の記憶までは知らないらしい。

『本人に引き出せないんです。貴方の身体 部外者の私には分かりませんよ』

そう言われ、少しだけ期待もしていたが、まあそうだよなあと、納得。

「…てか、なんだよ身体 部外者って」

鞆を持っていない手で左眼に軽く触れる。

「この眼も含めて……」

記憶を共有しているだけあって、桜花は眼についてもある程度知っているのだろう。つまりそれは、この世界での魔眼所持者が受ける境遇も含めて。

「……あ」

そう言えば、俺があの時、女になった件について聞きそびれたな。

「まあ今は元通りだし、また後で聞けばいいか」

そう思うと、奏華達は学園へと向かった。

<放課後―寮付近>

いつも通りの授業が終わり、桜花共に帰路へ着く。

さすがに一週間も経つと、桜花の質問責めは終息を終え、二人で行動しやすくなった。

…おかげで俺には『シスコン』という不名誉な烙印が押されることになったが、それは言わない約束だ。

今は、寮の裏にある森へと足を運んでいる。

森といっても、ほんの入り口付近で、魔物が来ることはない。  
なぜこんな所にいるかというところ。

「…影遊び」

桜花が右手を上げる。

それだけで、彼女の足元にある影が、彼女を中心に広がっていく。

そして、影の中から現れる物体…人形？

「兄さんの記憶にある、木人？ですか。それを参考に作ってみました」

木人…というより影人（かげびと）とでも言うのだろうか。

ゆらゆらと陽炎のように揺れる、いくつもの影。

「流石に簡易的に動かすことしかできませんが、練習相手としてはいいでしょう」

練習相手？

首を傾げる奏華に桜花は続ける。

「八神くんの持つ武器とその使い方を知る事が主な目的です」

「俺の…武器」

「流石に学園で剣を出すわけにはいきませんからね。こうして練習場所と相手を用意した訳です」

なるほど、そういうことか。

桜花の狙いとしては、正体不明の敵の襲撃に対し、即座に動けるよう戦い方を学ぶということだった。

確かに桜花の言う通り、この能力を学園内で使うわけにはいかない。

聞かれた時の説明ができないからだ。

「じゃあ、早速やろう。本当にやばくなった時、練習不足で死にましたじゃ、死んでも死にきれない」

俺は知る必要がある、戦い方を、生き残る為の術を。

俺の真っ直ぐな瞳を見て、桜花は頷く。

その顔は微笑んでいた。

「それでは練習を開始しましょう！まずは剣の使い方からです！」

「ああ!!」

## 第二話

右手を前に突き出す。

そして手のひらへ意識を集中させる。

木々のざわめき、肌を撫でる温かな風。

桜花から向けられる視線。

そして、ゆらゆらと揺らめく影人。

段々と感覚が鋭くなっていくのが分かる。

「今、兄さんと私の間にはパスが繋がっています。さあ、呼び出してください」

今まで使った時はいつも咄嗟の事で、こんな風に落ち着いてはできなかった。

だからだろうか、自分の中に新しい選択肢が存在するのが分かる。

『影』『魔眼』『魔法』

色のつかない、選択できない、『魔法』を除き、今の俺には二つの選択肢が存在している。

マウスのカーソルを合わせる様に、俺は『影』を選択する。

向けた手のひらが微かに熱を持ち始める。

俺は桜花の指示通り、影を呼び出す、その言葉を口にする。

「…ツ影遊びー」

瞬間、俺の周りにあった、木の影や岩の影、

さまざまな影が、ドロリツと、こぼれるように広がる。

零れた影は地面を伝い、手をかざした地面へと集まっていく。

墨汁の様に真つ黒な水たまりの様に広がった影。

その中心からゆっくりと剣の柄が現れる。

ゆらゆらと揺らめくその様は、実態のない、陽炎の様だった。

今まで体験したときと、同じように柄へと手を伸ばす。

ひんやりとした感触、柄はしっかりと掴むことができた。

「…ツ!!」

剣を引き抜くため、力を込める。

が、大した力はいらなかった。

地面にできた影に刀身を半分以上沈めているはずの剣は

片手で簡単に引き抜くことができた。

引き抜いた剣へ視線を向け、改めて確認する。

形は簡素な十字型。

影で作られているためか、その剣先から柄頭まで真っ黒に染まっている。初めて使った時から感じていたが、重さはほとんど感じられない。

陽炎の様にゆらゆらと揺らめくそれは、どこか曖昧に見える不確かな存在。

一見、武器として成り立つのか、見た目だけでは不安に思うが、手の質感、

そして魔物さえも一刀両断したのを眼にすれば、その考えも変わるだろう。

俺は桜花へと視線を向けると、俺のやりたいことを察したようにコクンと頷くと影人から距離を取る。

十分な距離を離れたことを確認すると、俺は影人に向かって剣を軽く振ってみた。

ヒュンという風を切る音と共に、風が吹き荒れ、土煙が上がる。

土煙が晴れた時、影人の姿は影も形もなかった。

「……すごい威力だな」

軽く振っただけでこの威力。

どこことなく属性武装に近いものだと感じた。

魔力を消費することで異能を使うことができる魔法。

属性武装を通して使うことが出来る属性魔法。

だが、この影は火、水、風、地、雷、五つあるどの属性にも合わない。

第六の属性とでもいうべきだろうか。

「流石に3回目、使いこなせているようですね」

「…お前が魔物相手に使った、あの杭も能力なのか?」

思いつくのは複数の魔物を串刺しにしていた、あの漆黒の杭だ。

思えばアレも、影から突き出たものだった。

俺の質問に桜花はコクリと頷く。

「はい、アレも原理は同じです」

試しに、と桜花は手をかざす。

さっきの俺が剣を出した時と同じように、周りの影が集まっていく。

そして

「影遊び…穿つ影の杭 (Shadow Needle)」

桜花が、手を上げると共に影の集まった所から何本もの杭が針山の様に飛び出していく。

「ムフンッ!ぎつとこんなものです」

腰に手を当て、誇らしげにこちらへ振り向く。

杭の方を見ると、空気に溶ける様に形が崩れ、何事もなかったかの様に消え去っていった。

「俺もそれができるのか？」

「できますよ。この能力自体は影を操る事。貴方が先ほど行った剣を出す動作を何本もの杭へ変え、広範囲へ押し出すだけです。寧ろ影を手持ち武器として引き抜き、固定化する方が魔力を消費するんです」

なるほど、そうなると桜花のやり方の方が低コストな攻撃方法なのか。

コレ（影）にもいろいろな使い方があるのな。

確か、第一世代の魔法にも似たようなものがあつた。

魔力に形を与えるというものだ。

しかし、あの魔法にはそこまでの攻撃性はない。

主な用途は簡易的な壁やロープなどのアイテム作りなのだ。

「……」

ただでさえよく分からない力だが、いつかの襲撃の事を考えると

今は少しでも、手札を増やした方が良いだろう。

俺は納得すると、桜花へ声を掛ける。

「じゃあ、練習のつづ……ッ！」

続きを、と言いかけたが、それ以上の言葉が出なかつた。

立ちくらみに似た症状が起こり、ふらり、と身体が傾くのが分かる。

「ツ、大丈夫ですか？」

地面に衝突する前に桜花に抱き留められ、倒れるのは回避した。身体がひどく寒く、桜花に抱き留められた箇所が暖かい。

「…まだ死神の身体が安定していないようですね。少し休んで下さい」

桜花が何か言っている様だが、上手く聞き取れることはできない。

だけど彼女からする桜の香りにどこか安心感を覚えながら、俺の意識は沈んでいった。

〈桜花 view〉

目の前で彼が急に倒れたので、少し驚いた。

それでも慌てて抱き留めたため、何とか地面に倒れるのは回避した。意識を失った人間の身体は重いもので、今は木陰に寝かせている。

寮まで運んでいくことも考えたが、その後の彼の表情を見るに複雑なのだろう。今回は起きるまで待つてみることにした。

そのついでに…膝枕と言いたい。

硬い地面では良くないだろうと思い、そうしている。

「…すう…すう」

顔色は悪いが、彼からは規則的な寝息が聞こえてくる。  
その様子に安堵を覚える。

「…私も厄介な人を助けたものですね」

初めて目を覚ました時、私は夜の森にいた。

そして私は、『私』についての記憶を失っていた。

それは事故なのか、それとも意図的だったのか、今の私には分からない。

ただ、目の前で死んだように倒れている少年。

彼を死なせてはいけないと、そう思ったのだ。

気付いたら、運んでいた。

彼を運んでいる途中、何も知らないはずの私は、知った。

この島の事、彼の住む学生寮の場所。

『私』は知らない。

でも『私』は知った。

正確には彼の記憶が流れてきたからだ。

世界を襲った異種族である、『死神』、『魔物』、『悪魔』、『天使』。

それらに対抗する事が出来る存在、進化した人類である

『魔法使い』で構成された組織『RUBIC（ルビック）』。

そして魔法使いの存在を危惧し、抑止として創設された  
人口的な技術で異能力を獲得した、いわば

RUBICのライバルといえる組織、『OSERO（オセロ）』等々。

時間が経つに連れて、私自身の役割と、彼についてある程度分かった。  
過去の記憶が無い事。

一般的な標準より、高い魔力を持っている事。

それなのに魔法が使えない事。

正体不明の夢に苦しんでいる事。

そして…『魔眼』の事。

私の役割は、『妹』という近い存在で彼を守護する事。

それに何の意味があるのか、私は知らない。

「……」

情報を整理している間に、彼の顔色はだいぶ良くなっていた。

私の相棒になった人は、かなりの色物らしい。

天使や魔物…彼を襲う何者か、様々な者に狙われている。

微かに口角が上がるのが分かる。

私は今、笑っているようだ。

「全く、手間のかかる兄さんですね」

少年の頬を軽くつねってみる。

眠る少年は未だ起きる気配はなかった。

まどろみの中、夢を見ていた。

それはいつかの誰か。

燃え盛る森の中、その『誰か』は怪我をした腕を庇い足を引きずりながら歩いている。

『憎い……※※※が……憎い……』

身体から流れる血など気にした様子はなく、

呪いの言葉を唱えるように呪詛を紡ぐ。

身体には火傷が多く、所々血が滲んでいる。

『例え、この身体を焼き尽くされても、僕は……アイツらに……』

その怨嗟に反応するかのように周りで燃えている炎の勢いがさらに強くなる。

それも気にせず、『誰か』は歩き続ける。

『誰か』の中には憎しみしかなく、その瞳は血の様に紅く染まっていた。俺はその『誰か』の眼に見覚えがあった。

それは…『魔眼』だった。

そしてそれは…。

「…暴走だ」

魔眼…それは特殊な能力を秘めている眼。

魔眼には七つの種類があり、それぞれが異なる能力を持つている。

そして魔眼はそれぞれ一種類に一人しかいない。

つまり同じ魔眼をもつ者はいない。

その能力すべてが人を超えた強大な力。

だが人々は魔眼を忌み嫌い、恐怖の対象としてみている。

その理由、それは魔眼所持者の精神状態が大きく揺れることで

(怒りや悲しみ、負の感情) 暴走することである。

いつ爆発するか分からない、爆弾を抱えているのと同じだ。

だから人々は魔眼を恐れ、討伐を繰り返した。

何度も…何度も…男でも女でも子供でも老人でも関係ない。

魔眼所持者というだけで殺された。

しかし、魔眼所持者が死ぬと魔眼は新たな所持者へと転写される。死に際の所持者の抱いた憎しみと共に。

決して終わることのない、憎しみの連鎖。

眼の前にいる『誰か』は怒り、そして憎しみに支配されている。

その対象は：おそらく人間。

きつとこの燃え盛る炎も、その怪我も全て…。

その感情によつて『魔眼』が暴走を始めている。

そして：『誰か』の周りには誰もいない。

その暴走を止めてくれる人はいない：いなくなつてしまつたのだ。

身体の震えが止まらない、眼の前の『誰か』の様に俺もいつかはこうなつてしまふの  
かもしれない。

『必ず…必ずお前たちを…』

力尽きたのか『誰か』は倒れる。

血が出るほど唇を噛みしめ、その手に爪を立てる。

身体を炎が燃やし尽くしたとしても、その怨念が消えることはない。

憎しみは次の転生者へと受け継がれる。

その憎しみが、怒りが、俺にも流れ込んでくるのが分かる。

「……ぐっ」

その憎悪に耐えきれず、視界がぼやける。

涙が溢れて止まらない。

頭がズキズキと痛む。

視界の端が段々と黒くなっていく。

『誰か』の夢はここで終わる。

この続きを知ることが今の俺にはできない。

『……ねえ、復讐したくない?』

火の森に聞こえた一つの声。

最後に聞いたその声は、その『誰か』へかけられた救済の言葉だった。

辺りが真つ暗になる。

世界は闇に包まれ、俺は『現実』へと戻っていった。

## 第三話

<第七寮―付近の森>

「……」

薄く開いた視界に映ったのは闇夜に輝く銀の月。

それと同じ輝く銀色の髪が頬に当たる感触。

小さく寝息を立てる桜花だった。

「(……って胸ちかつ!?後頭部柔らかかつ!?)」

仰向けに倒れる俺の顔の近くには大きめの柔らかかそうな果実が二つ。

桜花の呼吸に合わせ上下している。

そして、後頭部に感じる柔らかな感触。

見なくても分かる、これは…膝枕!!

「……とーう!!」

答えを導くと同時に重心を横に向け、身体を回転させる。

ゴロゴロと坂道を転がる様に桜花から距離を取る。

おぼろげだった夢の出来事が一気に塗り替わり、先ほどまでの光景と感触が焼き付いて離れない。

顔が熱い、心臓もバクバクとうるさい。

「(おおおおおお落ち着け俺。何を意識しているんだ!!)」

寝起きの頭で、この状況に戸惑い、ごちゃ混ぜになっっている感情に混乱する。

彼女は恩人でっ！死神でっ！偽妹でっ！

そこまで考えてから、スツと身体から熱が引いていくのが分かる。

うるさかった心臓の鼓動はゆっくりと大人しくなる。

「…相棒なんだよな」

「ん…」

可愛らしいクシヤマでハツとなる。

肌寒いのか僅かに身じろぎする桜花

静かに様子を見守るが、彼女は起きる気配がない。

「寝てる…のか」

転がった為、制服についた土ぼこりを払い立ち上がる。

その無防備な寝顔を改めて見てみる。

整った顔立ちに絹糸の様にサラサラとした綺麗な銀色の髪。

閉じられた瞳には長いまつ毛。

吐息を零す桜色の唇。

その幻想的な光景は一つの芸術作品を見ているような気分だ。

「(そうだよな。お前は：こんな俺を信頼してくれているんだよな)」

二度も彼女に命を救われた。

一度目はまだ思い出すことはできないが二度目の事は当然覚えている。

あの魔物との戦い。俺一人では何もできなかっただろう。

彼女と協力しなければ成し得なかつた勝利。

付き合いは短いものだったが、その中でも彼女の中にある深い優しさを感じた。

だからこそ、俺は彼女の事を信じることにした。

そして彼女もまた、俺の事を信頼してくれているのだろう。

だから、こんな無防備な姿を見せてくれるのだ。

「もつと：：しっかりしないとな」

ふと、目覚める前の記憶がフツと蘇る。

学園の放課後、森の入り口付近にて特訓。

その途中に倒れたことを思い出す。

影を使った特訓をして、直ぐ後に倒れ、桜花に支えてもらった所までバツチリと覚え

ている。

「(ッ、死なない為の特訓なのに、この体たらく…だっせえ!)」  
服に土が付くことも忘れ、再びゴロゴロと転がる。

自分の情けなさに涙が出そうだ。

地面に転がっている状態で、手で顔を覆い尽くし、悶絶する。

傍から見れば、頭でもおかしくなつた者に見えるだろう。

だがここは森の中、視線などあるはずがない。

五分ほどの時間を要したが何とか立ち直った。

「…こんなことしてる場合じゃねえな。おい桜花起きろ!」

肌寒さと、周りの暗さ。今は完全に夜だ。

寮の近くとはいえ、ここは森の中。

人目の付かない外に長居するわけにはいかない。

少しだけ重い身体を無理やり起こし、桜花に近付くと、その華奢な身体を軽く揺らした。

——ユサユサ

「…ん」

揺らすことで若干色っぽい反応を返す。

何度か揺らしていると桜花の瞳がゆっくりと開いていく。起き抜けだからか、ボーッと寝ぼけた目で俺を見つめる。

「…あ、起きたんですね」

「お陰様でな。あと、今はコッチのセリフな」

起きたことを確認すると、俺は立ち上がる。

俺を見て周りを見て、徐々に桜花の意識が覚醒し始める。

桜花も俺に合わせ、立ち上がろうとすると。

「あゝ」

ビターンッと力なくその場に仰向けで倒れ込む。

というか、頭から行った!?

「おい!?大丈夫か。まさかまた、魔力切れか?」

「い、いえ…それが」

急に倒れた桜花を起こそうと背中とひざ裏に手を通す。

担いで寮まで運ぶためだ。

しかし、その細い足に指先が触れた瞬間。

「み〃や〃ー〃ー〃!?!?!」

「ぐえっ!」

!?!?!

今までに聞いたことのない奇声を桜花が発すると、しゃがんでいた俺を突き飛ばす。予想外のリアクションに俺はバランスを取ることが出来ず、木に後頭部が激突。先ほどまでの感触は綺麗さっぱり消えるほどの木の固さ。

「~~~~いきなり何しやがる!!」

理不尽な攻撃に抗議の声を上げる……が。

「~~~~ッ!!」

突き飛ばした側の桜花が何かを耐える様にプルプルと震えていた。

「お、おい、ホントにどうしたんだよ」

桜花は涙を浮かべた顔でゆっくりと口を開く。

「あ、あしが……」

足が？

「……しびれましたあ」

Oh……そういう事ね。

死神でも足痺れるのか、とか思ったが口には出さないでおく。

この間の戦闘でのカッコいい姿はどこへ置いてきたのか。

涙目で必死に足の痺れを耐える桜花は……その……可愛らしいものだった。

とても人類と敵対している異種族には見えない。

眼の前にいるのは…そう、一人の女の子だった。

どこか親近感を覚える妹＋死神のために、その痺れが収まるまで待つことにした。

---

「い、い、迷惑をお掛けしました」

足の痺れが収まった桜花がまず初めにした事…それは謝罪だった。

それも三つ指を立てた丁寧なもの。

死神であるはずの彼女だが、人としての礼儀作法を良く知っている。

その丁寧な物腰には毎回舌を巻く思いだ。

しかし、今回の場合少しやり過ぎだろう。

奏華自身も痺れた足を触られるのがキツイというのは分からないでもない。

それに桜花は倒れた自分を介抱して、その結果足が痺れたのだ、それを理解している

奏華には怒る理由はないのだ。

「それに突き飛ばしてしまったので、大丈夫でしたか？」

「怪我もしてないし、そもそもぶっ倒れた俺が悪いんだし気にしないでいいって」  
「ですが！」

「ほら暗くなってきたし、そろそろ帰ろう」

直も食い下がる桜花の言葉を遮る様に彼女へ向けて手を差し出す。

「…？」

桜花は差し出された手の意図が分からないようにで

頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

奏華は頬を掻き、苦笑いを浮かべながら。

「仲直りの握手、しようぜ」

俺の顔を交互に見ると、

微かに口元をほころばせ、ギョツと両手で掴む。

元々の体温が引くのか彼女の手はひんやりと冷たい。

だが、手に触れる柔らかな感触で顔が少し熱くなる。

「…私、暗闇でも良く見えるんですよね」

「そうなのか？」

「ええ、何せ『し』の付くアレですから。夜目は利くのです」

自慢げに胸を張る桜花を見ていると頬が緩む。

知り合ってまだ数日。

人付き合いの苦手な俺も今ではこんな自然なやり取りをできるまでなった。これも一種の成長なのだろうか。

「…八神君の手は温かいですね」

握られた手をジツと見つめえる桜花がそとつぶやいた言葉。

繋がれた手が少しだけ強くなる。

今の俺たちなら仲の良い兄妹に見えるだろうか。

そんな事を考えながら、俺たちの住む第七寮へと歩き出した。

<第七寮>

あれから寮へと戻り夕食を取った後。

奏華は自室のベッドで横になっていた。

コンコンッ

扉を軽くノックする音。

上半身を起こし、扉へ視線を向ける。

どうぞと声を掛けると、扉が開く。

この寮に今現在、住んでいるのは自分を含め、二人。

当然ながら入ってきたのは桜花だった。

桜花は俺のいるベッド近くの椅子へ腰掛ける。

風呂上がりなのだろう。

濡れた銀の髪からシャンプーのいい香りがする。

寝間着から見える、火照った肌。

それが妙に色っぽい。

「気分はどうですか？」

「…ああ、だいぶマシになったよ」

「…八神君が寝ている間、時々苦しそうな声を出していました」

「まあ、夢の内容自体は全然覚えていないんだけどな」

左手が自然と眼に触れる。

この眼が痛むのは大抵、夢で何かを見た時だ。

そんな俺の様子を見ると、桜花は真剣な表情になる。

その藍色の瞳に見つめられると心の内を見透かされた気分になる。

「どうかしたか？」

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「…その左眼についてです」

「…」

いつかは来ると思っていた質問。

だが、いざ聞かれると動揺を隠せない。

少しだけ気まづくなり、無意識に桜花から眼を逸らす。

それでも彼女との関係を考えれば、話した方が良いでしょう。

『相棒』と自分で言った言葉を思い出す。

「この眼の事を…お前はどこまで知ってる？」

勿論、彼女がある程度知っていると分かっている。

記憶の共有、彼女は八神奏華の持つ記憶を同等のものを知っている。

それがどの程度の知識を彼女に与えているのか、俺にもわからない。

「貴方の事を100%知っているわけではありません。だからこそ、私の知らない事があつては危険です。今私たちは見えない敵の後手に回っています。情報は可能な限り

共有するべきと判断しました」

勿論あなたが拒否するのなら無理強いはしません。

と最後に付け加える。

その気遣いを感じ、改めて彼女に隠し事をするべきではないと思った。

だから…。

「少しだけ、待ってくれ」

胸に手を当て、気分を落ち着かせるために深呼吸を繰り返す。

身体の中の緊張をゆっくりと解きほぐす様に。

それを繰り返し行うことで、幾らかマシになった。

話そう、俺の知るこの魔眼について…可能な限り。

「俺の眼は…」

ゆっくりと語り出す。

己の内側を外気に晒す様にゆっくりと。

……

……

…

この話は希沙羅から教えてもらったこと。

この眼は、『魔眼』と呼ばれるもの。

魔眼には七つの種類があり、それぞれが異なる特殊能力を持っている。

また、同じ魔眼所持者は存在しない。

この眼は世界に七つしか存在しないのだ。

そして能力すべてが人を超えた強大な力。

強大な力ゆえか、魔眼所持者は精神状態が大きく揺れることで暴走を起こす場合がある。

それは一種の災害として扱われ、人々は魔眼を忌み嫌い、恐怖の対象としてみている。

時に捕獲し、実験し、時に殺す。

それが魔眼所持者への扱いだ。

しかし、魔眼が滅びることはない。

決して終わることはない。

何故なら、魔眼は転生を繰り返す。

所持者が死ねば、次の人間へ移り変わる。

俺の眼は生まれつきなのか、それとも後天的なのか。

それは分からない。

しかし、今の俺が病室で目覚めた時、それは既に俺の中に深く根付いていた。使いは、与えられた知識が教えてくれた。

希沙羅に聞いた所『鏡の魔眼』そう教えてもらった。

視覚によつて確認した魔法を一定時間コピーし、自由に発動する事が出来る。

この眼は、皮肉にも俺の魔法が使えない、という面をカバーするには適しているだろう。

全く嬉しくはないが。

マイナス面としてはこの眼はあくまで魔法をコピーするもの。

魔法を使わない者、つまり純粋な格闘戦や銃器に対しては無力という点だ。

……

……

……

「俺の知っている魔眼の知識は大体こんな感じだ」

一通り話し終えた俺は、ふう、と息を吐く。

希沙羅 以外に魔眼について話すなんて初めての経験でまだ心臓がドキドキしている。

俺の話は黙って聞いていた桜花は目を閉じて、俺の話を吟味しているようだ。

そして整理がついたのか、ゆっくりと目を開ける。

「八神君は、その眼の事をあまり良く思っていないんですね」

そのことも既に知っていたのだろう。

少し、寂しげな顔を浮かべる桜花に思わず、視線を逸らす。

「そう……だな。この眼には、あまり良い思い出はないな」

いつの間にか癖になっていた、左眼に触れる行為。

この眼は俺にとって、『怪物』である証みたいなものだから。

流石にこの場でそこまで言うのは躊躇した。

少しの沈黙が辺りに佇む。

それを破ったのは桜花だった。

彼女は椅子から立ち上がると、俺の元へと近づくと、そつと腕を回した。

俺は桜花に抱き締められたのだ。

「話してくれてありがとうございます」

風呂上がりの為、いつもより体温の高い桜花の身体。

サラサラな髪に仄かなシャンプーの香りと、顔を覆う柔らかな感触。

いきなりの事に戸惑いはしたが、邪な気持ちは湧かなかつた。

ドクン、ドクンと彼女の胸の奥、心臓の音が一定のリズムで聞こえる。

その音に安心を覚える。

「私には貴方の辛さを分かってあげることができません。でも…」

「これからは私も半分背負います。だから…ありがとうございます。話してくれて。私を…信じてくれて」

「あ…」

鼻にツンと来る感じ、込み上げる感情を必死に抑え込む。

「大丈夫。大丈夫ですからね。私が貴方を守ります」

知らないはずの言葉。

だけど、心の中にゆっくりと浸透していく、優しい言葉。

いつの間にか、一筋の涙が頬を伝う。

とめどなくあふれ出る涙を止める手段を知らない俺は

だたひたすらに、泣くことしか出来なかった。

……

……

……

「せつかなので紅茶でも飲みましよう！」

涙に濡れたパジャマを気にした様子はなく。

桜花は少し大きめの声で言いながら台所へと向かっていった。

去り際にその頬が赤くなっていたのは気にしないでおく。

声を掛ける暇はなく、俺は部屋に一人ポツンと残された。

「死神に…泣かされた」

先ほどまで涙と鼻水でグチャグチャだった顔をテツシユで拭う。

さつきまで重かった胸のつかえは、軽くなった気がする。

俺はベッドにうつ伏せに倒れ、枕に顔を埋める。

「…ああ〜！！恥ずかしい！！！」

まさか泣くなんて！

泣かされるなんて！！

メツツツチャ恥ずかしい！！

「…でも」

希沙羅 以外の誰かと共有するなんて、少し前の生活では考えもしなかった。

俺自身、兄という役割とやらで、どこか変わってしまったのだろうか。

「(でも、こんな生活も悪くない…かも)」

意味のない自問自答は、桜花からの呼びかけが来るまで、続いた。

その日の夜。

俺が自室で眠っていると、急に身体が重くなる感覚。

「う……ぐ……おも」

もしかしてこれは……金縛り!!

オカルト本に書いてあった通り、お腹の辺りに誰かが乗っているような感覚。

天使、魔物、死神と続き、幽霊とも遭遇するとは！

「(オカルトめ、強化されたこっちの筋力なめんな!!)」

そう思った俺は身体を動かそうと力を込める前に、耳元で聞きなれた声が囁かれた。

「重いつて何ですか！少し失礼じゃないですか！(小声)」

え？この声って…。

ギユツと瞑っていた瞼を開けるとそこには…桜花がいた。

深夜に俺の布団の上で馬乗りになっている桜花(しかも制服着用)。

…なんだこの状況。

「……夜這い？」

「…その方が、良かったですか？」

呆れる目で見られてしまった。

これ以上の失言はこれからの俺の威厳にかかわる。

そう思い口をつぐんだ。

「はあ…寝ぼけていないで、起きてください。早急に解決すべき案件があります」  
「案件？」

未だ現状を理解しき切れない俺。

しかし、そんな思考は桜花の次の一言で完全に吹き飛んだ。

「魔物です」

---

魔物、それは第七寮の周りに群れを成していた。

姿は前と同じ、獣である狼だった。

あの後、直ぐに制服へと着替えた俺は、桜花と共に魔物討伐を開始した。

「はあっ!!」

『GRAAAAAAAAAA!!』

剣による斬撃が魔物を切り裂き、絶命させる。

先の戦闘で、この剣もある程度扱えるようになった。

「さあ、串刺しです…よっ!」

『GRAAAAAAAAAA!!』

桜花によって繰り出された、影の杭によって周辺の魔物達が数を減らす。

「完全に消滅するまで、油断しないでください!」

「分かった!」

互いに背中を預ける。

俺は剣を構え直し、次の攻撃へと備えた。

……

……

……

桜花の協力もあって、対した怪我をすることなく、魔物を倒すことが出来た。

手に持った剣を手放すと空気に溶けるように消えていった。

地面に転がった魔物の身体も同様に空気に溶けるように消えていった。

そこまで確認し、ようやく桜花が視線をこちらへ向ける。

「ぶっつけ本番でしたが、八神君も魔物に対して、ある程度対処できるようになりまし  
ね」

俺自身、強くなったという実感が持つことが出来た。

勿論、桜花のサポートあっての勝利だが、今は高揚感が支配している。

「ですが、魔物が通じないと分かった敵が次にどんなことをするのか。あるいは今回の  
様に数で押ししてくるのか」

桜花は既に次の心配をしている。

魔物を倒したことに對して、達成感はまだあまり無いようだ。

「まあ魔法使いなら魔物を倒すこともできなくはないか」

俺の魔眼はあくまで魔法をコピーするもの。

魔法を使わない魔物に対して、俺はただの無力な人なのだ。

しかし、魔法使いなら話は別だ。

ある程度の魔法をかじったものなら、対処することが出来るだろう。

「それにしても…」

魔物が現れたのは第七寮の近く。

俺と桜花以外、他の学生はいない。

犯人はそれを狙っているのか、それとも他の生徒がいても、お構いなしに攻撃をして

くるのか。

だが、そうなれば学園長である希沙羅が出てくるのは明白だろう。

犯人もそれは避けるはずだ。

「…そう言えば、希沙羅に報告すれば解決じゃないのか？」

俺の考えに桜花は、首を横に振る。

「確かに学園長さんに報告すれば、魔物に襲われるという状況は解決に向かうのかもしれません。ですが、私達には犯人がいるという、確かな証拠がありません。

単に魔物がうろついている。と処理される可能性があります。その場合、安全のために私達、学生の行動すら制限される可能性があります」

「…つまり」

「つまり、行動制限された上での後手に回ります。そしてそれは犯人にとって良くなる一方です。だって、行動が手に取るように分かってしまうのですから。それに…誰が敵か分からない状況、下手に動くより現状維持に努めた方が良いかと」

桜花の言い分も分かる。だがそれだけではないのだと思った。

そして俺は、なぜかその先が分かってしまった。

その目が語っているのだ。

それに…私はまだ他の人を信用できない、と。

「……」

確かに全てを希沙羅に話したとしても、希沙羅は桜花を信じるだろうか。

俺にとっては恩人であつても、希沙羅にとっては記憶を弄った張本人なのだから。

「分かった、希沙羅に言うのは最終手段にしよう」

希沙羅への後ろめたさを思いつつ、俺はその場では頷くしかなかった。

…と俺は桜花の背後に光る何かを見た。

後は直感に任せて桜花を突き飛ばす。

「きゃっ!?何です…か」

目の前の光景に桜花は絶句した。

視線の先、自分を突き飛ばした彼の肩に一本のナイフが深々と刺さっていたからだ。

「ぐ…あ…」

苦悶に歪む奏華。ナイフは彼の左肩に深く刺さっている。

「抜くのは…まずいか」

無理に抜けば、傷口が広がり、血が止まらなくなるだろう。

「だ、大丈夫ですか!?!」

目に見えて狼狽している桜花に急いで声を掛ける。

今の状況を混乱しているようだ。

「落ち着け、致命傷じゃない。それより…」

俺の言葉の意味を理解し、桜花は冷静に今の状況を分析する。

そして視線を彼女の背後、森の奥へと向けた。

「…件の魔物使いですか」

『フフフフフ』

不気味な声が森にこだまする。

自然とは違う、明らかな人影の異物。

それはすぐ近くにいた。

『お初にお目にかかる、我が同胞』

表情のない真っ黒なお面、全身を黒い包帯で覆う人影。

明らかな殺気を持つ『敵』がそこにいた。

## 第四話

## 〈第七寮前〉

突然の襲撃に身構える二人。

現れたのは全身を真っ黒な布で覆い隠し、その顔には森の暗闇に溶け込むような真っ黒なお面が付けられていた。

お面には顔のパーツが一切見られない『カオナシの面』。

『お初にお目にかかる、我が同胞』

変声機を使っているのか、聞きなれない機械音が夜の森に響く。

声から性別の判断はできないが、背の高さ、体格からして男だと推測できる。

男―『カオナシ』に対し、警戒を取りながら桜花が問いかける。

「同胞…それはどういう意味ですか？」

『僕の贈ったささやかなプレゼントはお気に召したかな？』

カオナシは桜花の質問に答えない。

一方的にこちらに話しかけるのみ。

「プレゼント？ココ最近の事件も、魔物も貴方が？」

「…」

カオナシは答えない。

だが、こちらの反応を楽しむような微かな笑い声が機械越しに聞こえる。

そしてその殺気を含んだ視線はまっすぐに俺へと向けられていた。

「(桜花の予想していた通り、奴の狙いは俺)」

同胞：カオナシはそう口にした、俺に視線を向けながら。

その言葉にもしかしたら、と想像してしまう。

「…兄さん、私が隙を作ります。動けますか？」

桜花が身を寄せ、小声で俺に話しかける。

その視線が、俺の今考えている思考を中止するように訴えている気がした。

俺は頷くと、いつでも立ち上がれるよう足に力を込め、タイミングを窺う。

「(今は奴の言葉について深く考えている場合じゃない)」

眼の前の男は危険だ。

油断すれば死ぬ。そんな予感めいたものが俺の中にある。

その一挙手一投足を見逃さぬよう、カオナシに意識を集中させる。

カオナシは現れた場所から一步も動いていない。

しかし、その両手にはナイフが一本ずつ握られていた。

恐らく、俺の肩に刺さっているナイフと同じ、アイツが投げたものだろう。魔力で作ったナイフではなく、本物のようだ。

『……』

しかし、殺気とは裏腹に、カオナシは動かない。

その手に持っているナイフさえ、動かす様子はない。

漆黒の仮面で覆われた顔、だがその奥にある眼光に見られている感覚がある。

気味の悪い空気に息が詰まりそうだ。

「（…何が狙いだ？）」

だがいくら考えても、明確な答えは出てこない。

どちらにせよ、油断するわけにはいかない。

視線は常にカオナシへと向け、桜花の合図を待つ。

桜花は近くに落ちていた、手のひらサイズの石を一瞬のうちに回収すると。

「…ッ！」

カオナシへ向け、勢いを付けて投擲した。

ヒュンと風を切る音を立て、カオナシの顔を捉える投石。

それに対し、奴は驚くことなくナイフの腹で弾くだけの動作で躲す。

「…小石では物足りないですか？それならこれはどうです…かっ!!」  
そう叫ぶと同時に、男の足元に影が集中する。

瞬時に、それは男の身体を貫く杭となって地面から突き出る。

「…ッ!!」

その瞬間を狙い、俺たちは互いに走り出す。

両側からカオナシを挟み撃ちにするためだ。

しかし、それは数歩で終わりを迎えた。

ガンツという音を聞いた。

そして地面に倒れたのはカオナシではなく俺の身体。

「い…た…い…」

痛い？

どこが？

顔だ。

何故だ？

まるで壁に思い切り、ぶつかつたような衝撃。

衝撃にクラクラする頭で周りを見回すが、壁なんてどこにもなかつた。

「きやつ!!」

そしてそれは桜花も同じだった。

何かにつつかるように弾かれ、倒れ込む。

「これ……は」

衝撃で痛み出した肩を抑えつつ、眼の前の空間へと手を伸ばす。

伸ばした掌は……何もない空間で静止した。

掌に感じる硬い感触。

何かに触れているのだ。

まるで透明な壁が行く手を阻むように、そこには『何か』があった。

そして俺はその存在を知っている。

『クククッ』

背中越しに機械音声の笑いが響く。

振り返ると、カオナシが笑っていた。

面に手を当て、俺たちの行動が滑稽だと嘲笑うように。

避けたのか、防いだのか、その身体には杭によるダメージはなかった。

「(コイツが見えない壁を作ったのか!!)」

『既に……は僕の迷宮(ラビリンス)、果たして逃げられるかな? 君たちは……っ!』

カオナシはナイフを構え、シュツと風を切る音を出し、投擲を繰り返す。

その方向は…未だ座り込んだままの俺！

「…ツ！！」

痛みには耐えながら、身体を回転させて、飛んでくるナイフを紙一重でかわす。速い、もう少し遅ければ今頃、眉間にナイフが深く刺さっていたであろう速度。左肩に鋭い痛みが走り、顔が苦痛に歪む。

「(丸腰じゃキツイ。どうする?)」

武器の選択は二つ、一つ目はブーツに隠してあるナイフ。

二つ目は影の剣、だがこちらはナイフより取り出すのが遅れる。

「(それに、こちらの手の内を見せるのは…せめて魔法を使ってくれれば)」

カオナシは桜花の方へは見向きもせず、真っ直ぐに俺の方へと向かってきた。

一瞬の思考。

判断を決めた俺は、ブーツへと手を伸ばし、右手で仕込んだナイフを取り出す。

カオナシのナイフと俺のナイフが交差する。

ガキンツと金属同士の衝突する音がした。

『…へえ』

カオナシがどこか意外そうな声を発する。

しかし、それも束の間、姿勢を低くし、足払いを掛けられた。

「…ッ!!」

後方へ下がることでそれを回避。

着地の衝撃で肩の痛みが増すが、カオナシとの距離を取ることが出来た。

そして俺はカオナシに気づかれないよう視線を桜花へと向ける。

「…コクッ!」

桜花が頷くのを確認し、俺は眼の前の敵に集中する。

カオナシはナイフを構え、驚くべき速さで距離を詰めてきた。

カオナシの放つナイフの軌跡が俺へ襲い掛かる。

ガキンッ!

ガンッ!

キンッ!

紙一重で躲し、何度も刃を交わす事で、嫌でも分かってしまった。

「(技術が違い過ぎる!)」

左腕の負傷だけが原因じゃない。

死神の反射神経をもってしてもギリギリ捌けているくらいだ。

当然反撃などできるはずもなく、避けるか、受け流すだけで精一杯だった。

「…ッ!!」

『…フツ!!』

カオナシが行ったフェイント。

それに引つかかりできた一瞬のスキ。

その瞬間を見逃すはずが無く、カオナシの蹴りが腹部へ命中し、態勢が崩れる。間髪入れずに左肩のナイフに蹴りを入れられた。

「があ…ぐ…ああああ!!」

蹴られた衝撃で後方へと飛び、ナイフがさらに深く刺さる。

肉を裂く痛みに耐えきれず、崩れ落ちる。

抉られたせいで傷口が広がり、血が溢れる。

血で汚れた手からナイフが右手から滑り落ちる。

『…もう終わり?』

激痛に耐え、地面に崩れ落ちる俺を嘲笑うようなカオナシの声。

頭に血が上っていくのが分かる。

「…だ…があああ」

熱い、左眼が焼ける様に熱い。

まずい、これはまずい。

頭の中で警報が鳴り響く。

今すぐ逃げろ！こいつから離れろ！

じゃないと、戻れなくなる!!

「…だれがあ!!」

痛む身体を無理やり動かし、右手を地面に叩き付ける。

「影遊びッ!!」

右手を中心に周りから影が集まり、形を形成する。

カオナシは警戒してか一度距離を取った。

その隙に柄を形作らせ、掴み、一気に引き抜いた。

『それが魔物を倒した武器か』

右手で影の剣を持ち、カオナシへ向ける。

「…第二ラウンドだ。カオナシ」

息は既にながたつていて、肺が痛い。

そして何より、先ほどから左眼がおかしい。

闘い始めてからドンドンその熱が強くなっている。

感情が先行し、冷静さを失いつつある。

暴走と似ている、でも少し違う。

「(今は何も考えるな、ただ生き残ることだけ考えろ)」

死にたくない。

死ぬわけにはいかない。

生き残る。

だが…。

『クククッ、君の考えていることは分かるよ。怖いのだろうか?』

「…ッ!?!」

『何体もの魔物は葬っていても、君は人を殺めたことなどないのだろうか?』

心を読まれているようにカオナシの言葉は的を射ていた。

人を殺す恐怖。

それが奏華の行動を更に制限し、今の劣勢に繋がる一つとなっていた。

技術だけではなく、心でも負けていたのだ。

『その程度の心構えじゃあ、僕は倒せない。倒すなら殺す気で行かないと…ね!』

「…ツクー!よくしゃべるじゃねえか!!」

こちらへ距離を詰めていたカオナシに剣を薙ぐ様にして斬りかかる。

そんな単調な攻撃は直ぐに躲され、懐へと入られた。

そして奏華は直ぐに剣を盾にして攻撃を防ぐ構えを取った。

『…フツ、甘いなあ!』

カオナシは俺の行動に嘲笑う。

このままナイフの切っ先は剣を掻い潜り、俺へと突き立てられるだろう。

だが――奏華は不敵に笑って見せる。

カオナシの後方、そこに信頼する相棒がいた。

「私を忘れてもらっては困ります」

俺とカオナシを隔てる様に出現する一枚の大きな影の壁。

分断されたカオナシのいる地面から、木から、岩から、周りにあつた自然の影から何

千本もの針が飛び出す。

影の杭とは違い、その一本一本はとても細く、そして速い。

「影遊び――技法――無限針（むげんばり）」

桜花の技が――無数の針がカオナシを捉えた。

全方位から襲い掛かる技に逃げ場はない。

「これで……終わりです！」

カオナシを倒せる、そう思っていた。

だがそれは現実にはならなかった。

『危ない、危ない、もう少しでハチの巣になるところだった』

カオナシは無傷だった。

いや、針はカオナシに届いてすらいなかった。

針はカオナシの周りに制止するように止まって動かない。

カオナシは首だけを動かし、視線を桜花へ向ける。

『君は簡単に殺せるんだねえ。彼とは大違いだ』

どこか感心したような、憐れむような、そんな声で桜花を見つめる。

その言葉に桜花の顔に苛立ちが見える。

「人を異常者みたいに言わないでもらえますか。先に仕掛けたのはそちらで、私は目の前の脅威を排除する為にしているんですから」

『驚異の排除…人…クフフフ。君が…ねえ』

明らかに何か含んだ物言いに、桜花は眉をひそめる。

「…何ですか？」

『いいや、随分人間世界に溶け込んでいると思ってるねえ』

「…貴方まさかっ!？」

『…今宵はここまでとしよう』

俺たちに視線を巡らせ、カオナシは飛び上がる。

「待ちなさい!!」

「なっ!？」

一度ではない。

カオナシは空中を蹴る様にジャンプを繰り返して、木々の奥へ消えていった。

「(…アイツ、戦闘中、一切魔法を使わなかった。俺の眼を警戒して?)」

それに…同胞。

カオナシはそう言った、俺を見て。

アイツの眼、仮面に覆われ、顔を―眼を確認することはできなかった。

だが…。

「(アイツは…魔眼所持者だ)」

魔物を操っていた。

見えない壁。

空中ジャンプ

そのどれか、あるいはどれも可能にする能力なのか？

「…う」

やば…い、血、流し過ぎた…。

身体から体温が減っていくのが分かる。

傷口からはドクドクを血が溢れ出る。

温かい血が腕を伝い地面へと零れ落ちる。

次第に手足の感覚がなくなり、急速に身体が寒くなる。

いつの間にか手に握っていた剣も落としていた。

剣に俺の血が滴り落ちると、吸うように赤黒く点滅を繰り返し、やがて空気に溶ける様に消失。

「兄さん！直ぐに傷を！」

カオナシの去っていった方を見ていた桜花も俺を見るなり、直ぐに駆け寄り、止血を始めた。

桜花の修復のおかげで、傷口自体は直ぐに塞がったが、血液を急速に失った為か、視界が霞み、気持ちが悪い。

桜花に肩を貸してもらいながら、寮へと帰った。

その夜は身体を休めるために、襲撃者について何も話すことはできず、俺達は眠りについた。

「…暇だ」

あの夜の次の日、俺は貧血ということで学園を休んでいる。

桜花に魔力で無くなった分の血を入れたはずだが、身体の調子は良くない。

元々学園に行くことを重要視していない桜花も看病と称して俺の近くにいます。

「気分はどうですか？ 兄さん」

「ん、少しダルいな」

「八神君は血を流し過ぎて貧血気味ですからね」

そういうと、桜花は新しく待つてきた水差しを入れ替える。

おでこに置かれた濡れタオルを交換する。

生暖かったタオルが、ひんやりとしたものに変わり落ち着く。

「私の魔力修復はあくまで代替え、少しの間、本来のものの肩代わりをするに過ぎませ

ん。実際貴方の身体に必要な血は無くなっているのですから。無茶はしないでくださ

い」

「…そっか。ごめん」

「分かってもらえれば。ですが、ようやく敵が見えましたね」

「…ああ」

あくまで予想の中だった。

魔物を使い俺を襲う何者か。

それがついに眼の前に現れたのだ。

桜花の言う通り間違いなくアイツは敵だ。

「顔は見るのができませんでしたが、いくつかの情報は得られましたね」

「まずは性別、これは背丈での推測になるが男だと思う。そして……」

「私たちの進行を妨げ、私の攻撃を防いだ。詳細不明な能力。見えない壁……ですかね」

何度か体験した。

何かにぶつかるといふような佇む見えない壁。

何度もそれに行動を制限され、今回もまた移動を妨害された。

そして、カオナシへ向けた桜花の攻撃。

アレを防いだものも同じだと考えられる。

「見えない……不可視の壁……か」

多分、その正体の端を俺は知っている。

そう確信できるものが俺にはあった。

右手を左眼へと添える。

あの時、この眼が熱くなつていくのが分かった。

何かを反応したのだ。

そして奴の言った、同胞。

ほぼ間違いない。

「ヤツは…魔眼所持者」

桜花も俺と同じ考えだったのだろう。

コクンと頷く

「やはり、その可能性が高いですね。でもそれならどうして八神君を襲うのか」

「…分からない」

「貴方の魔力を狙ってなのか…それとも。ん、取り敢えず、八神君は身体を直してください。いつまた襲撃があるのか分からないのですから」

そう言うと、ベッドにスポーツドリンクを一つ置いて桜花は部屋を出る。

自分の部屋に戻るようで何かあれば呼ぶようにと言われた。

俺はペットボトルへ手を伸ばし飲み始める。

冷やされた液体が喉を通る感覚は気持ちの良いものだ。

俺は仰向けに倒れながら、考える。

これからどうするべきなのか。

「(希沙羅に聞けば、魔眼について分かるだろうか?)」

それが彼女のいつもいる資料室。

あそこなら歴史について書いてある書物もあった。  
もしかしたら…。

そうと決まればと、明日の計画を立て始める。

その途中、瞼が重くなり、いつの間にか眠ってしまった。